

## 目次

はじめに：本研究の意義と目的.....	1
第1章 序論.....	3
第1節 理論的背景.....	3
第1項 「住環境」と母親」の関わりにおける前提.....	3
第2項 住環境と人間 母親を中心として.....	6
第3項 先行研究の問題点および本研究が目指すもの.....	18
第2節 本研究の目的および仮説.....	19
第1項 本研究の目的.....	19
第2項 本研究の仮説.....	20
第3節 方法.....	22
第1項 本研究の調査概要およびデータについて.....	22
第2項 本研究で用いる分析 共分散構造分析.....	28
第4節 本論文の構成.....	29
第1項 本研究の構成.....	29
第2章 母親をとりまく住環境の実態と評価.....	32
第1節 子育てをめぐる住環境の実態と評価(1) :1998年度データの分析.....	33
第2節 子育てをめぐる住環境の実態と評価(2) 2000年度データの分析.....	44
第3節 子育てをめぐる住環境の実態と評価 考察.....	57
第4節 第2章のまとめ.....	62
第3章 住環境と精神的健康.....	63
第1節 子育てをめぐる住環境と精神的健康(1) :1998年度データの分析.....	64
第2節 子育てをめぐる住環境と精神的健康(2) 2000年度データの分析.....	67
第3節 精神的健康に影響を及ぼす住環境の側面.....	72
第4節 第3章のまとめ.....	77

第4章	住環境と子育てに対する意識	78
第1節	子育てをめぐる住環境と子育てに対する意識(1) 1998年度データの分析	79
第2節	子育てをめぐる住環境と子育てに対する意識(2) 2000年度データの分析	84
第3節	第4章のまとめ	94
第5章	住環境と養育態度との関係,子どもへの影響の検討	95
第1節	子育てをめぐる住環境と養育態度(1) 1998年度データの分析	96
第2節	子育てをめぐる住環境と養育態度(2) 2000年度データの分析	102
第3節	住環境が子どもに及ぼす影響～母親の影響を介して	110
第4節	第5章のまとめ	125
第6章	結論	126
第1節	本論文の総括	126
第1項	本論文の概要	126
第2項	本論文の問題点と今後の研究の展望	128
第2節	総合的考察	132
第1項	総合的考察	132
第2項	結論	140
第3項	さいごに	141
引用文献		142
謝辞		153
資料		154

## 表一覧

## 第1章

Table1.2.1	1998年度調査対象者居住地域の概要.....	25
Table1.2.2	1998年度データの対象者属性.....	25
Table1.2.3	2000年度調査対象者居住地域の概要.....	26
Table1.2.4	2000年度データの対象者属性.....	26

## 第2章

Table2.1.1	1998年度データの住居特性.....	34
Table2.1.2	住環境と住居特性との関係.....	42
Table2.2.1	住環境変数の因子分析結果.....	46
Table2.2.2	2000年度データの住居特性.....	48
Table2.2.3	住環境と住居特性との関係.....	54

## 第3章

Table3.1.1	精神的健康度を表す形容詞の主成分分析結果.....	65
Table3.2.1	精神的健康度を表す項目の主成分分析結果.....	68
Table3.2.2	住環境の各変数と精神的健康度との相関.....	70
Table3.3.1	精神的健康度基準変数,住環境の評価を説明変数とした 重回帰分析結果.....	73

## 第4章

Table4.1.1	子育てに対する意識の因子分析結果.....	80
Table4.2.1	子育てに対する意識の因子分析結果.....	85
Table4.2.2	住環境の変数と活動制限感の相関 偏相関係数.....	87
Table4.2.3	各パスの推定値とフル検定結果.....	89

## 第5章

Table5.1.1	不適切な養育態度の主成分分析結果.....	97
Table5.2.1	暖かい養育態度の主成分分析結果.....	103
Table5.2.2	住環境の変数と暖かい養育態度の相関 偏相関係数.....	106
Table5.3.1	子どもの問題行動傾向の因子分析結果.....	112
Table5.3.2.1	衝動的・非統制的な行動特徴と各変数との相関 偏相関係数.....	116
Table5.3.2.2	依存的な行動特徴と各変数との相関 偏相関係数.....	116
Table5.3.3	各モデルの適合度指標.....	118

## 図一覧

### 第1章

Figure1.1.1	住環境における取捨選択モデル.....	9
Figure1.2.1	本研究の取捨選択モデル.....	21
Figure1.2.2	本研究のデータ構成.....	27
Figure1.2.3	因果連鎖(仮説)と各段階を分析する章.....	30
Figure1.2.4	本研究の枠組み.....	31

### 第2章

Figure2.1.1	住環境における困りごとに対する回答傾向(%).....	36
Figure2.2.1	住環境(住居)における困りごとに対する回答傾向(%).....	49
Figure2.2.2	住環境(住居周辺環境)における困りごとに対する回答傾向(%).....	50
Figure2.2.3	施設への利便性に対する回答傾向(%).....	51

### 第4章

Figure4.1.1	住環境困りごと数・精神的健康度・ 子育てに対する否定的な意識のパスダイアグラム.....	82
Figure4.2.1	住環境・精神的健康度・活動制限感のパスダイアグラム.....	91

### 第5章

Figure5.1.1	住環境困りごと数・精神的健康度・子育てに対する否定的な意識・ 不適切な養育態度のパスダイアグラム.....	100
Figure5.2.1	住環境の変数・精神的健康度・活動制限感・ 暖かい養育態度のパスダイアグラム.....	107
Figure5.3.1	住環境から子どもの問題行動傾向までの 因果連鎖を示したモデル.....	114
Figure5.3.2.	住環境から衝動的・非統制的な行動特徴までの 因果連鎖を示したパスダイアグラム.....	119
Figure5.3.3	住環境から依存的な行動特徴までの 因果連鎖を示したパスダイアグラム.....	120

### 第6章

Figure6.2.1	住環境,母親,子どもの関係を表した因果モデル.....	136
-------------	-----------------------------	-----

## はじめに：本研究の意義と目的

子どもを産み、育てるといふ営みにおいて、住環境はどのような意味を持っているのだろうか。多くの動物は、子育てのために「巣」といふ住環境を整え、初めて常住する場所を確保する。つまり、巣をつくるという行動は、極めて重要な意味を持つ最初の子育て行動であると言えるだろう(オールポート,1998)。動物は営巣に最適な場所を探し、親にとって多大な時間とエネルギーを要する子育ての負担を軽減し、子どもが安全に育ち、巣立っていくために必要な工夫をその巣に凝らす。中には、生得的な行動として、驚くほどの高機能な巣を作る鳥類もいることも知られている(モリス,1991)。つまり、繁殖といふ重要な活動を成功させる戦略の一つとして、「子育てのための環境整備」は、人間を含め動物にとって必要不可欠なものであると考えることができるだろう。種族保存の成功とそれを確実なものにする諸条件「安全性、衛生性など」を備えた子育て環境を確保・維持、そして最適化していくことは、生物学的な視点から見て、大きな意味を持っているものと思われる。

ヒの場合も巣(住居)は元来、外敵や寒さなどから身を守るシェルターであると同時に、種族保存、子女育成の場として大きな役割を果たしていたと考えられる。しかしながら現代の人間は、多機能・多側面な生活を送っており、子育てといふ営みも、もはやその一つに過ぎない状況となってしまう。子どもを持たないという選択肢もあり、子どもを育てることが必ずしも生活の中心とはなっていない。このことは、住環境に子育ての場としての機能が希薄化してきたことを暗示している。子育てのために快適な環境を整備しようという問題意識は次第に薄れ、大人中心の住環境整備が拡大しつつあると言えるだろう。しかしながら、子育ての大変さは、他の動物と人間とを比べて大きな差があるわけではなく、「子育てのための環境」としての巣の快適性を追求することは、本質的に重要であると考えられる。したがって、これは現代社会においても意識的・積極的に模索されるべき問題であるといえよう。すなわち、人間にとって、子育てがしやすい環境に必要とされる具体的な条件を詳しく検討することが急務であると考えられる。

近年、子育て環境の問題は、少子化問題などの面から社会的に注目されるようになってきている。一言で「子育て環境」と言っても、ヒの場合には、自然文化環境、人間関係を含む社会

的環境,そして家屋としての家庭 近隣の住環境があり,これらが相互に子育てに影響を及ぼしているものと考えられる。

現在までは「子育て環境」の研究と言えば,主にソーシャルサポートなど社会的な環境が中心にして議論されてきた感がある。例えば,保育園の整備や地域ぐるみの子育ての促進,子どもをめぐる人間関係の重要性などが指摘されている。しかしながら,住環境の質そのものについて検討することも今後重要になってくると考えられるだろう。平成 10 年度の厚生白書の統計によると,妻が理想の子ども数を持たない理由として「家が狭いから」と回答した割合は 13.4%にもなっている(厚生省,1998)。また,東京都の調査でも約 9 割の人が東京の少子化に対して厳しい住宅事情が影響していると考えていることが報告されている(東京都住宅局総務部住宅政策室,1998a)。これらの結果は,秋山(1988)や袖井(1994)が指摘しているように,住環境の悪条件が子どもの発達や子育てをする母親に負の影響を及ぼすことを,多くの人々が経験的に予測していることを示していると解釈できる。

従来の住環境についての研究は,設計 使い方などに関わるものであり,居住者への影響を心理学的視点から検討したものは殆ど行われていない(秋山,1988)ことに加えて,母親が子育てに対して抱く感情や子どもの発達に直結して検討されたものも少ない。よって,本研究は,子育て中の母親を取り巻く住環境について,主に住居や周辺環境の状況や質に焦点をあて,子育てといふ営みや子どもに及ぼす影響を検討し,子育てしやすい住環境の特徴を明らかにしていくことを目的としているものである。

Kasl, Will, White, and Marcuse (1982)は,貧困,疾病や社会的問題などが一つの長い因果連鎖であり,その初期の輪の一つとして住居があるとすれば,住環境の大きな影響が想定されること,そして,前述のような問題に対して住環境の視点からの介入の利点が期待できることは,理に叶っているとしている。子育てについてもこの考え方は適用できると考えられるだろう。本研究では,こうした枠組みに沿って,因果連鎖の初期の輪としての住環境の可能性を実証的に検討していきたいと考えている。

## 第1章 序論

### 第1節 理論的背景

#### 第1項 「住環境」と「母親」の関わりにおける前提

##### §1. 住環境とは？

我々人間をとりまく“環境”と一言に言っても、その定義の仕方は多種多様である。本研究では、その中でも最も身近であり、長い時間を過ごす重要な空間である住環境を取り上げる。では、まず住環境とはどこまでの範囲を指すものなのであろうか。

WHO (世界保健機関)では、housing (住居、住環境)の問題を考える際、その範囲として、中心となる住居だけではなく、近隣の街路、オープンスペースなど住居周辺の環境、商店、学校、公共施設など生活に必要な施設も含めるとしている (World Health Organization, 1974)。

石井 (1988)も、人間が生活・行動する住居を拠点とした、より広範囲な世界をも住環境に含めて考えなければならぬとしている。そして、住環境を、室内環境、住宅環境 (独立住宅)、近隣街区環境、都市環境、地域環境の5種類のスケールに分け、住居だけではなく、近隣環境、そして通勤などで利用する空間をも全て含めたものを住環境とするという考え方を提示している。

本研究で扱う住環境は、石井 (1988)が示した5種類のスケールで述べられている室内環境・住宅環境・近隣街区環境までの範囲を指すものとする。これらの範囲には、住居から、日常的に買い物などをする範囲が含まれている。

さらに、住環境を考えるとときに重要になるのは、上記のような範囲の問題だけではなく、人間・空間・時間であり、中でもその住環境の中心となる人物が重要である (石井, 1988)。その環境の中心人物が誰であるか、またその人のライフサイクルによって、環境に対する依存性 (秋山, 1988)や要求が異なると考えられるからである。

##### §2. 母親を中心人物とした住環境 子育てをめぐる住環境

先に指摘したように、居住者の属性やライフサイクルは、住環境について検討する際に重要

な要因となっている。具体的には、独身で住む時期、夫婦二人で住む時期、そして子どもが生まれ、子育てをする時期によって、住環境における様々な要求（住要求）が異なってくることを意味していると言えるだろう。本研究では、低年齢の子どもを育てている母親を対象としているが、秋山（1988）によれば、この時期の家族の住要求は、以下ようになる。

長子が生まれ、その子が学童期を終えるまでの時期。子供が生まれ、家族員数が増加し、育児に関する仕事が家事作業の中で大きなウエートを占める時期でもある。家族員数の増加により、住宅の広さ、空間が必要となり、住居の安全性、衛生性、構造性が問われる時期でもある。また子供を感性豊かに成長させる調和のとれたインテリアなども必要となってくる。（p. 73）

つまり、子育てが母親の仕事の大部分を占める時期には、住居や近隣環境は子育てをしやすきことが最重要課題になると考えられる。本研究で扱う住環境とは特に、母親を中心とした子育てをめぐる環境であり、「子育てをする上で大切な」あるいは「子育てをしやすくするための」住環境の側面を指しているものである。

### §3. 「母親」と住環境」の関わり背景

住環境と人間との関わりを考える場合、その中心人物を「子育て中の母親」とするのであれば、最終的な目標は、子どもの発達への影響の検討となると考えられるだろう。早川（1994）は、家庭内の雰囲気、特に母親の感情が子どもに影響を及ぼすことが多く、その母親の感情が住居の状態によっても左右されがちなこと」に注意しなければならないと述べ、住環境が母親を通して子どもの発達に及ぼす間接的な影響の重要性を指摘している（早川、岡本、1993）。定行（1986）、Parke（1978）も住環境の物理的な条件が、母親の意識・行動を通して、間接的に子どもの発達に影響を与えているのではないかと述べている。加えてEvans, Wells, and Moch（2000）は、母親の養育態度は、住居の質と子どもの発達との関係を理解するための重要なポイントで



あり、この養育態度は、継続する住居内のトラブルによって影響を受けていると述べている。つまり、「母親」と住環境」の関わりを検討することによって、住環境が持つ子どもの発達への影響についての示唆が得られるものと考えられる。これは、育児支援の一環として、住環境の整備の重要性を示しており、実証的に検討する必要性があるものといえよう。

## 第2項 住環境と人間 母親を中心として

### §1. 住環境と人間との関係 取舍選択モデル

住環境と母親との問題について論じる前に、「住環境と人間」の関係に関して環境心理学の分野で明らかにされていることについて概観しておくことが必要だろう。環境と人間との関係を説明できるような理論的な枠組みは1つでは十分ではなく、状況に応じてモデルを使い分けたり、組み合わせたりする必要があることが明らかとなってきた(Cave, 1998)。環境心理学の分野における環境と人間との関係を表している代表的な枠組みは、生態学的アプローチ(Ecological Approach)、覚醒水準アプローチ(Arousal Level Approach)、環境負荷アプローチ(Environmental Load Approach)、順応水準アプローチ(Adaptation Level Approach)、行動抑制アプローチ(Behavior Constraint Approach)、そして環境ストレスモデル(Environmental Stress Model)である。

生態学的アプローチは、人間と環境の間に相互依存性があるとする立場をとる。これは、行動セッティングに注目し、行動セッティングは多くの人に影響を及ぼしているため、セッティングによってそこで生起する行動が予測できると考えるものである。行動セッティングとは、ある決まった行動パターンが生じるような、物理的セッティングのことを指す(クルパット, 1994)。教室、コンサートホール、レストラン、床屋では、それぞれの場所において、その場所に特有な一定の行動(講義をする、演奏を聞く、食事をする、髪を切る)が生じるため、行動セッティングと考えられている(Gifford, 1996)。この行動セッティングアプローチは、個人よりは個人を超えたグループの行動を予測するために有効であると考えられている(Cave, 1998)。

覚醒水準アプローチとは、より生理学的なアプローチをするものである。このアプローチの代表的な考え方として、ヤーキース・ドットソンの法則がある。この考え方を環境との関わりで論じたのが覚醒水準アプローチである。これは、ある特定の課題の遂行と覚醒との関係は、逆U字型になっており、覚醒レベルが低すぎても、また高すぎても課題遂行の成績は低下することを示している。そして、人間には最適レベルの覚醒水準があり、それを達成できるような環境状況を探し求めていることが示唆されている。

環境負荷アプローチは、情報処理の考え方を基礎としている。このアプローチでは、人間の情報処理能力は限られていること、処理能力を超えた情報が入ってきた場合には、入力情報を制限したり、注意を向けなければならない情報を選別したりすることによって、適応しようとしていることが示されている(菅, 2000)。さらに、処理能力を超える量の情報が入ってきた場合や、注意を向ける必要性が長時間続くと、負荷を感じるとしている。

順応水準アプローチの基本的な考え方は、人間は、最も良く機能できるような覚醒水準に達することができるように、環境との関わり方を調節するというものである(Wohlwill, 1976)。このアプローチでは、知覚判断の基準として、個人の主観的な水準を考えている。この個人要因(過去の経験や親近性など)の影響を強く受ける主観的な水準が、順応水準と呼ばれる(Cave, 1998; 菅, 2000)。

行動抑制アプローチとは、環境の様々な側面は人間がこうしたいと思うことを抑制(妨害)し、行動を変化させるという立場をとっている。このアプローチで重要な概念は、リアクタンسと学習性無力感(Seligman, 1992)である。例えば、エスカレーターを歩いて昇っていく際に、(日本では)右側に人が止まっていて、歩いていくのを妨害されることがある。このような状況において、まず人はどのような行動をとるだろうか。第一に不快な感情を持つ。これがリアクタンスと呼ばれる。次に、声をかけたりして道をあけてもらおうと、何らかの行動に出る。この働きかけを繰り返し行っても成功しなかった場合に生起するのが、学習性無力感である。環境との関わりにおいて、この学習性無力感が発現する過程は、「ストレス状態での引きこもり反応やストレス後遺症を説明する有力なモデルである」(菅, 2000)とされている。

環境ストレスモデルとは、ストレスラーに対する生理的・心理的な反応を主張し、覚醒水準、環境負荷、順応水準、そして行動抑制アプローチを統合したものと捉えられている。環境からの刺激に対する評価は、個人要因に影響されており、その刺激が脅威であると評価された場合は、alarm reaction(警告反応)が起こる。そして、コーピングの成功如何によって、適応できるか、不適応になるのかが決まるとしている。

さらに、以上の6つのアプローチを全て統合したものが、取舍選択モデルと呼ばれるもので

ある (Bell, Fisher, Baum, & Greene, 1996). このモデルは, 様々な場面に対して, 適用が可能であるとされている. これは, 環境が行動に与える影響と, それによって生じる人の心的過程に焦点をあてた, 理論的アプローチの一つである (菅, 2000). 本研究は, 住環境について検討したものであるため, この取捨選択モデルを住環境にあてはめたものをFigure1.1.1に示している.

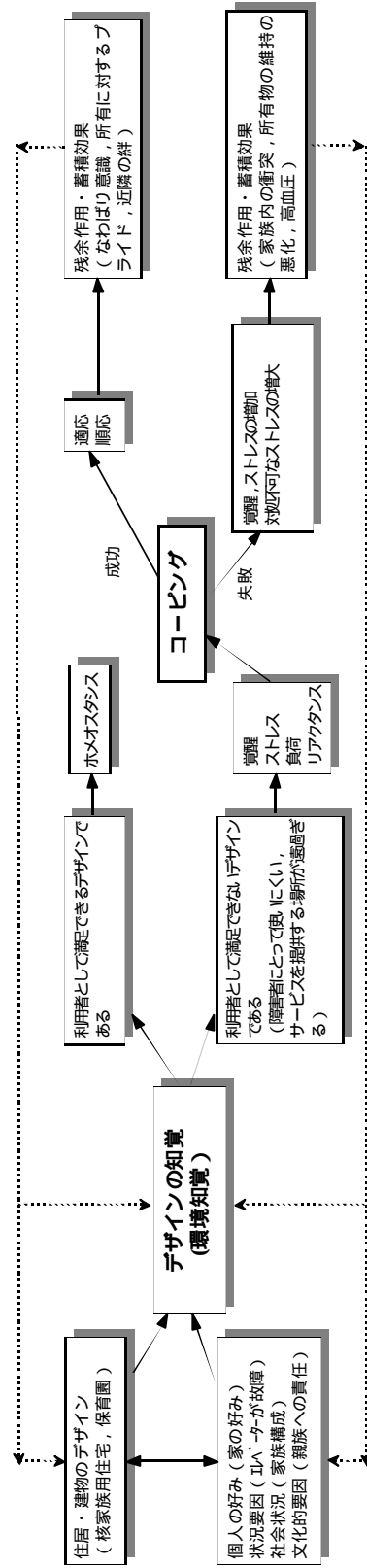


Figure 1.1.1 住環境における取捨選択モデル  
(Bell et al., 1996 より引用)

このモデルでは、次のようなプロセスが示されている。人間は自身の背景要因に基づいて、物理的な環境を評価する。その結果、その評価が満足できる（＝刺激が適正水準の範囲内である）ものであれば、ホメオスタシスが保たれる。しかし、満足できるものでない（＝刺激が適正水準の範囲外である）場合には、心理的な負荷などが生じ、コーピングが行われる。そして、環境ストレスモデルと同様にこのモデルでも、その成功・不成功によって、適応・不適応に伴う結果が現れるとされている。

このように取捨選択モデルでは、ある環境の客観的・物理的状态（環境刺激）を知覚した場合、それが適正条件を超えていると知覚されると、負荷が生じるとしている。特定のイベントや状況は、“ストレッサー”と考えられ（Cave, 1998）、それに対して様々な対処行動がとられる。よって、負荷を生じさせる環境からの刺激は、環境ストレッサーと考えられるだろう。

では、環境からの刺激で、適正条件を超えていると評価され、コーピングが行われる（＝環境ストレッサーとなる）のは、どのような刺激が考えられるだろうか。自然災害や戦争など、衝撃も大きく、多くの人間が被害を受けるようなものから、騒音など、衝撃は大きくはないが、繰り返し日常的に起こるものまでである。Evans and Cohen (1987) はストレッサーを以下のように4種類に分類している。

- Ambient Stressors（環境（広義の）ストレッサー）
- Cataclysmic Stressors（災害ストレッサー）
- Stressful Life Events（ストレスフルな生活上のイベント）
- Daily Hassles（日常苛立ち事）

Ambient Stressors は、より広い地域に渡る慢性的な環境の悪さを指し、大気汚染や人口過密などが挙げられる。Cataclysmic Stressors は、自然災害や地震、戦争など広い地域に影響が及ぶもので、基本的には、人類に共通して不快なものである。持続期間は短い場合が多いがその影響は長期にわたる。大抵の場合、この種のストレッサーに対して、個人はもとよ、集団であっても無力である。Stressful Life Events とは“ライフイベント”と称されるものである。離婚、引越などが挙げられる。個人的な問題が多く、影響も大きい。最後の Daily Hassles は、

Micro-stressors (微小ストレス)と呼ばれるようなものを含んでいる。日常生活で長期間にわたって経験するものであるが、衝撃の程度は低いトラブルや困りごとを指す。このタイプのストレスによる影響は、塵も積もれば山となる式であり、このようなストレスからの蓄積された影響は、より衝撃の強い一時的な刺激より強いものになると考えられている (Cassidy, 1997)。例えば、ドアがきちんと閉まらない、隙間風がひどいといったような物理的環境の状態において経験する困難さ (Lazarus & Cohen, 1977) などは、一つ一つはそれほど強い影響力を持っているものではないが、日常的に経験することであるため、緩やかではあるが、確実に人間に影響を及ぼしている。すなわち、居住者が日頃環境に対して感じている些細な苛立ち事も、環境ストレスとなっていると考えられるのである。

## §2. 住環境からの刺激

住環境からの刺激は、環境ストレスとなりうるのだろうか。植村 永田 松田 鈴木 (1979) は、生活全般にわたるストレスを広く収集し、「社会的ストレス尺度」を構成した。その中で、「家屋の空間や住み心地、近所づきあい」などは、社会生活領域の下位尺度として、また、「家屋の空間、構造、衛生環境」などは、家族生活領域の「家屋の環境問題」の下位尺度として抽出されることを示している。また、渡辺 (1985a) は、調査の結果を踏まえて、住居の物理的条件は居住者に生理的・心理的・行動的な影響を及ぼしており、個人にとって好ましくない側面は、住環境ストレスとして、居住者の精神的健康にも何らかのかかわりあいをもっていると述べている。Freeman (1984) は、精神的な健康度の低下の理由の一つとして、社会的・文化的・そして物理的な環境の有害な交互作用を挙げている。さらに Evans, Wells, Chan, and Saltzman (2000) は、もし物理的環境が精神的な健康状態に影響を及ぼすのであれば、住居の質 (housing quality) は、真っ先に調査の対象となるべきであるとしている。これらの知見から、住環境は、日常生活において環境ストレスとして存在していると考えerことは妥当であるといえよう。そして住環境からの刺激は、衝撃は大きくないが日常的に繰り返し経験されるものであるから、先の Daily Hassles に含まれると考えることができる。

以上の点をまとめると、(1)住環境からの刺激は、環境ストレスとなりうる；(2)各刺激は強力ではないが、いくつか重なることや、長期間の暴露によって、人間にマイナスの影響がある；とらえることができる。

では、実際に住環境からの刺激によって、人間にはどのような影響が生じるのだろうか。次のセクションでは、この点について述べる。

### §3. 住環境と精神的健康

前セクションの Figure 1.1.1 で示した取舍選択モデルにおいて、適正条件を超えた認知された刺激に対する対処行動が失敗した場合、精神的・身体的な不調が生じることを示した。ここでは、精神的な面での健康に対する住環境の影響について検討した先行研究を概観する。

「これはまた思いきって汚い部屋だねえ、ロージャ。まるで墓穴みたいだよ」...

おまえがこんな<sup>きうつ</sup>気鬱症にかかったのも、半分はきっとこの部屋のせいだよ」(ドストエフスキー 『罪と罰』よ！抜粋)

「居は気を移す」とい孟子の言葉や、上記のドストエフスキーの文章にも示されているように、住環境と住み手の精神的健康度とは関わりがあると、昔から考えられてきた。その関わりが重要であるとされているのは、人間が他のどんな空間よりも、住居で過ごす時間が長いからであると言えるだろう(Evans, Wells, Chan, et al., 2000)。日本人の場合、在宅時間(睡眠時間も含む)は、平均およそ15時間であり(NHK 放送文化研究所, 2002)、これは一日の約3分の2に相当する。

住環境と精神的健康の問題で頻繁に取り上げられるのが、住居の過密の問題である。多くの研究は、住居の過密について否定的な結果を示している。一方、Gabe and Williams (1986) は、住居内の人口密度が極度に低い場合(独居など)も人口密度が極度に高い場合も精神的な不調を訴える割合が多い、すなわち、J字型の関係性があることを報告している。また、Mitchell (1971) は、同居人の属性に注目し、過密の悪影響(情緒的な健康 = emotional health の悪化)や敵意の増加は、同居人が親戚ではない場合に見られるとしている。



また、過密だけではなく、他の住環境の状態が精神的健康に及ぼす影響も検討されている。例えば、住居形態（集合住宅と一戸建て住宅）が挙げられる。一戸建て住宅より集合住宅の方が、精神的な健康状態へのネガティブな影響があるという印象があり、中には「flatneurosis（集合住宅神経症）」があると信じている人もいようである（Knipschild, 1978）。しかし、研究においては一貫した結果が得られているわけではない。例えば、Fanning（1967）は、集合住宅の方が精神的健康度が低いという結果を報告しているが、同じような条件で Moore（1974）が行った調査では、住居の形態による違いは認められなかった。また同じ集合住宅でも居住階による精神的健康度の違いも指摘されている（Gillis, 1977; Hannay, 1981 など）。一方、このような物理的・客観的な指標だけではなく、居住者が住環境に対して感じている不満や困りごとなど、主観的な指標による違いなども報告されている（Smith, Smith, Kearns, & Abbott, 1993）。

さらに、住環境と精神的な健康状態との関わりにおいては、交絡する要因の存在がしばしば指摘される。住環境が精神的な健康状態に影響を及ぼしていると考えられるのは、交絡する要因（例えば、経済状態など）によるものであり、住環境そのものの影響ではないと議論される場合もある。しかしながら、Smith et al.（1993）は、経済的、社会的、地理的、そしてデモグラフィックな変数を統制してもなお、housing stressors（住居ストレス）は、心理的ディストレスに統計的に有意な影響を及ぼしていたことを示している。さらに Evans, Wells, Chan, et al.（2000）も、収入を統制しても良い住環境は心理的ディストレスと負の相関があったことを報告している。

この他にも、住環境と精神的な健康状態との関係に影響を及ぼす変数の存在も多々指摘されている。また、調査方法の違いや文化の差（Cave, 1998）があり、この2つの変数間について一貫した結果は得られていないが、少なくとも、住環境が精神的な健康状態に影響を及ぼしていないと積極的にはいきれない状況であると言えるだろう。

#### §4. 住環境と母親の精神的な健康状態の関係

では本研究の対象である母親に関しては、住環境と精神的な健康状態との関係についてどのような結果が得られているのであろうか。住環境と母親の健康に関する研究は、古くは先に

述べた Fanning (1967) に遡る。この研究は、主婦の健康状態を集合住宅と一戸建て住宅で比較したもので、集合住宅の方が、精神的健康度が低かったことを報告している。Richman (1974) は、3歳以下の幼い子どもを育てている母親を対象に調査を行った結果、抑うつや孤独感は、一戸建て居住者より集合住宅居住者の方が強いと報告している。Halpern (1995) は、集合住宅と一戸建て住宅の精神的健康の違いについての先行研究の結果を概観し、集合住宅の居住者は、一戸建ての居住者に比べて精神的な健康状態がやや悪い傾向にあり、特にこの傾向は子どもを持つ女性に見られるとしている。

日本では、逢坂 (1991) が東京都内在住の母親に対して、生活環境と健康状態に関する調査を実施し、母親の神経症的傾向の割合と住環境(住宅構造、居住階)の関連性を検討した。その結果、木造住宅より鉄筋鉄骨住宅に居住している母親の方が神経症的傾向が強く、また、この傾向は居住階の上昇に伴って強くなることを報告している。

Duvall and Booth (1978) は、子どもを持つ母親を対象に調査を行った結果、スペースの問題、プライバシーの欠如、住居の構造上の大規模な問題、睡眠を妨害するような騒音が、精神的な健康状態に影響を及ぼしていることを報告している。渡辺 (1982) は住環境から蒙るストレスの程度を示す「住環境ストレス」と専業主婦の健康との関連について、主婦 344 人を対象とした調査の結果から、「住環境ストレス度」が大きいほど心身不健康度が高いと、いうことを明らかにした。さらに渡辺 (1985b) は、集合住宅での子育てとストレスについて検討しており、隣近所への気兼ねや子どもの事故に対する不安感など、住環境は母親の潜在的・顕在的なストレスとなっており、このようなストレスは子育て期に相当する 20 代の主婦に高いと、いうことを指摘している。河野 日暮 織田 (1996) は、高層集合住宅に居住する母親 181 人を対象とし、母親の生活環境への満足度と自覚的健康度の関連性について調査を行った。その結果、生活環境に対する満足度が低い母親は精神的不調が多いという傾向が見られたことから、生活環境への満足度は自覚的健康度(特に精神的健康度)と関係があることを指摘している。これらの研究結果から、住環境が子育て期の母親の精神的な健康状態に影響を及ぼしていることが推察される。

## §5. 住環境と子育てに対する意識 養育態度の関係

母親が住環境から受けるストレスは子育てに対する意識や養育態度との間にどのような関係があると考えられるだろうか。

子育て中の母親は、子育てをすることに喜びや楽しさを感じると同時に、育児に対する不安や育児ノイローゼ、子どもを育てていく上での悩み事や煩わしさから派生する様々な感情を持つと考えられる。後者のような感情を包括的に述べたものが子育てに対するストレスであるとされている(戸田, 2000)。このような子育てに対するストレスに影響を及ぼしている要因は、先行研究から数多く明らかにされてきており、父親のサポートや母親自身の社会的な人間関係(牧野, 1982, 1988)、母親の就業や生育家族への良好なイメージ(坂間・山崎・川田, 1999)、母親の健康状態などが報告されている。

子どもを育てることに対する煩わしさや困難、不安感は、子どもに対する態度に影響を及ぼすと考えられる。子育てに対して否定的な感情を持っていると、子どもに対する態度も拒否的、無関心など、子どもの発達に対してネガティブな影響を及ぼすものになると予測される。Simons and Johnson (1996)や Conger, McCarty, Yang, Lahey, and Kropp (1984)は、日常生活で経験されるストレス(Life Stress)は、親のパーソナリティーや感情的な健康度(Emotional Well-being)を媒介として、養育態度の質に影響を及ぼすと指摘している。

住環境の様々な状況は、環境ストレスとなること考えられるから、これらが子育てに対する否定的な意識や養育態度に対して影響を及ぼしていることが想定される。例えば、住居内の過密が親子関係に影響を及ぼしていることが報告されている(Bradley & Caldwell, 1984; Wachs & Camli, 1991など)。さらに、Booth and Edwards (1976)は、住居内の人口密度が高くなるほど、親が子どもを叩く回数が増える傾向が見られたことを指摘している。

さらに、Oda, Taniguchi, Wen, and Higurashi (1989)が行なった、集合住宅に住む子どもの自立行動の発達についての調査によると、高層階居住が子どもの発達に及ぼす影響として、基本的な生活習慣の自立の遅れを指摘し、その原因として、高層階になるほど母子密着が強くなりやすく、その結果、子どもの自立行動の発達が遅れるのではないかと述べている。さらに、高層階に

住む子どもの自立の遅れの根本的原因は養育者である母親の態度であり、それを高層という住環境が助長しているといえる」(織田 日暮, 1991)と考察している。すなわち、住環境は母親の子育てに対する意識や感情、子どもへの養育態度にも影響を及ぼすことが指摘されていると考えられる。

以上の知見から、住環境は母親の健康度などを通して、子育てに対する意識にも影響を及ぼしており、最終的に子どもに対する行動や態度に影響が及ぶという因果連鎖を想定することは理論的に妥当であると考えられるだろう。

## §6. 子育てをめぐる住環境、母親そして子ども

これまで、住環境と母親の関係性について論じてきたが、早川 (1994) などが指摘しているように、最終的には住環境から母親という因果連鎖の先に、子どもを想定することが必要になると考えられる。

Conger, Conger, Elder, Lorenz, Simons, and Whitebeck (1992) は、慢性的な負担 (chronic strain) が人間の発達に及ぼす影響は、その人の最も近い社会的なきずな (social ties) というコンテキストの中において、最も良く理解することができるという Coyne and Downey (1991) の指摘を提示し、この視点から経済的な困難 (= 慢性的な負担) の影響が思春期初期の男子の適応に伝わるプロセスを詳細に検討している。その結果、経済的な困難の影響は、連続した段階として解釈するのが最も良いことが明らかとなったと報告している。親が経済的に困窮すると、鬱状態になり、家庭内の関係が悪化する。そして夫婦の争いが増加したり、育児に対する態度が悪化した結果、子供達の心理的適応が悪くなり、行動に問題が見られるようになったことを示している。また、これらの中で、子どもに対する決定的な影響力を持っていたのは、親の子どもに対する態度の変化であった。前に指摘したように、住環境における困りごとや不満なども、居住者にとっては慢性的な負担と考えられる。よって、住環境と子どもの関係についても、Conger et al. のように、連続した因果プロセスとして捉えることは可能であると推測される。

また Richman (1977) は、住環境や社会的要因が若い家族に及ぼす影響について研究する

この重要性を指摘しており、それは特に母親の抑うつや子どもの問題行動について検討する必要があるとしている。

住環境が子どもの発達に及ぼす影響については、いくつかの先行研究があるが (Richman, 1977; Parke, 1978; Saegert, 1982; Evans, Kliever, & Martin, 1991; Evans, Saltzman, & Cooperman, 2001 など)、母親の介在を視点としたものはほとんどない。しかし、Conger et al. (1992) が示したような段階的な因果連鎖のプロセスを、住環境についても適用できる可能性を示唆する研究として、Evans, Lepore, Shejwal, and Palsane (1998) が挙げられる。この研究では、住居内の過密と子どもの成績や学校適応などの関係について検討している。結果として、住居内の過密と子どもに関する変数の関係性において、親子間の葛藤 (子どもによる評価) が、mediator (中介者) として機能していることを報告している。また、住環境に対する不満や困りごとは、母親の健康状態 (Matsumoto, 2002) や子育てに対して否定的な意識 (松本, 2002) を介して養育態度に影響を及ぼしていることが示唆されている。Evans et al. (2001) は、住居の質が悪いことが子どもにマイナスの影響を及ぼしているメカニズムを説明できる可能性のある説として、「質の悪い住居に住んでいることによって、無数の苛立ちごとに対処しなければいけない」ということは、フラストレーションや苛立ちの原因となり、厳しい養育態度となって表れる”ことを挙げている。

以上のように、これまで論じてきたことを考慮すると、母親から子どもへ因果関係をつなげていくことは、理論的に考えても可能であると考えられる。すなわち、住環境と子どもの発達との関連について母親というmediator (中介者) を新たに仮定して検討することは、これまでの研究成果とは異なる視点から、多くの知見を得られる可能性が十分にあり、重要であるといえよう。

### 第3項 先行研究の問題点および本研究が目指すもの

先行研究などから、適正条件を超えたと思われるような住環境の状態は、環境ストレスとなって、居住者に影響を及ぼすことが指摘されている。そして、居住者を母親に限定した場合、その影響は、母親の自身の状態に及ぼされる影響ばかりにとどまらず、子どもを育てることに対する感情・意識、そして養育態度にまで影響が及ぶということを想定することが可能であることが示された。渡辺 (1985b)、織田 (1990)、Evans et al. (1998)、そして Evans et al. (2001)の研究においては、このような関係性が指摘されているが、これまでにこの関係性自体を検討する目的で行われた研究は少なく、先行研究はそのほとんどが各要因（住環境、母親の条件・状況、子どもの発達状態など）間の関係についてそれぞれ個別に注目して調査したものと考えられる。

しかしながら先にも述べたように、住環境が母親を介して子どもの発達に及ぼす影響に注目し検討することは、育児支援という観点からも重要であると考えられる。この立場から、本研究では、子育てをめぐる住環境として、家庭内外の人間関係や人的サポート以外の、住居やその周辺環境の状態・状況などに、主に焦点をあて、このような住環境を始点とし、母親の精神的健康、母親が持っている子育てに対する意識や養育態度、そして子どもに及ぶ因果連鎖を実証的に明らかにしていこうとするものである。

## 第2節 本研究の目的および仮説

### 第1項 本研究の目的

本章において、住環境が精神的健康、子育てに対する意識そして養育態度に及ぼす影響を想定することが可能であることが示唆された。そこで、本研究の目的は次の通りである。

- (1) 子育てをめぐる住環境について、実態を把握し、母親の評価を明らかにする。
- (2)
  1. 子育てをめぐる住環境が母親の精神的健康、子育てに対する意識を介して、養育態度に影響を及ぼしているかを検討する。言い換えれば、住環境の影響が母親の内的プロセスを通して、最終的に子どもとの関係性にまで及ぶプロセスを検証する。
  2. 上記プロセスの検証と共に、母親が子育てをする上で重要な住環境の側面 (= 子育てがしやすい住環境の条件) についても検討する。
- (3) (2)で検討したプロセスが、子どもに与える影響を検討する特に、問題行動傾向の萌芽的傾向への影響)。

## 第2項 本研究の仮説

先行研究の結果から、(1)住環境からの刺激は環境ストレスとなること、(2)この環境ストレスは精神的健康度に影響を及ぼすこと、(3)対象が母親の場合、それが子育てに対する感情・意識、養育態度に影響を及ぼすこと、(4)その影響は子どもにも伝わる可能性があるという4点が指摘され、これを基に、本研究の仮説を立てた。すなわち、

子育てをめぐる住環境から派生する困りごと、不満ごとなど(環境ストレス)は、母親の精神的な健康状態を低下させ、それが子育てに対する感情や意識を否定的にし、不適切な養育態度を生じ、その結果、子どもの行動特徴に対してもネガティブな影響を及ぼす

という方向の因果連鎖を仮定した。この仮説を取捨選択モデルに当てはめたものを Figure 1.2.1 に示している。



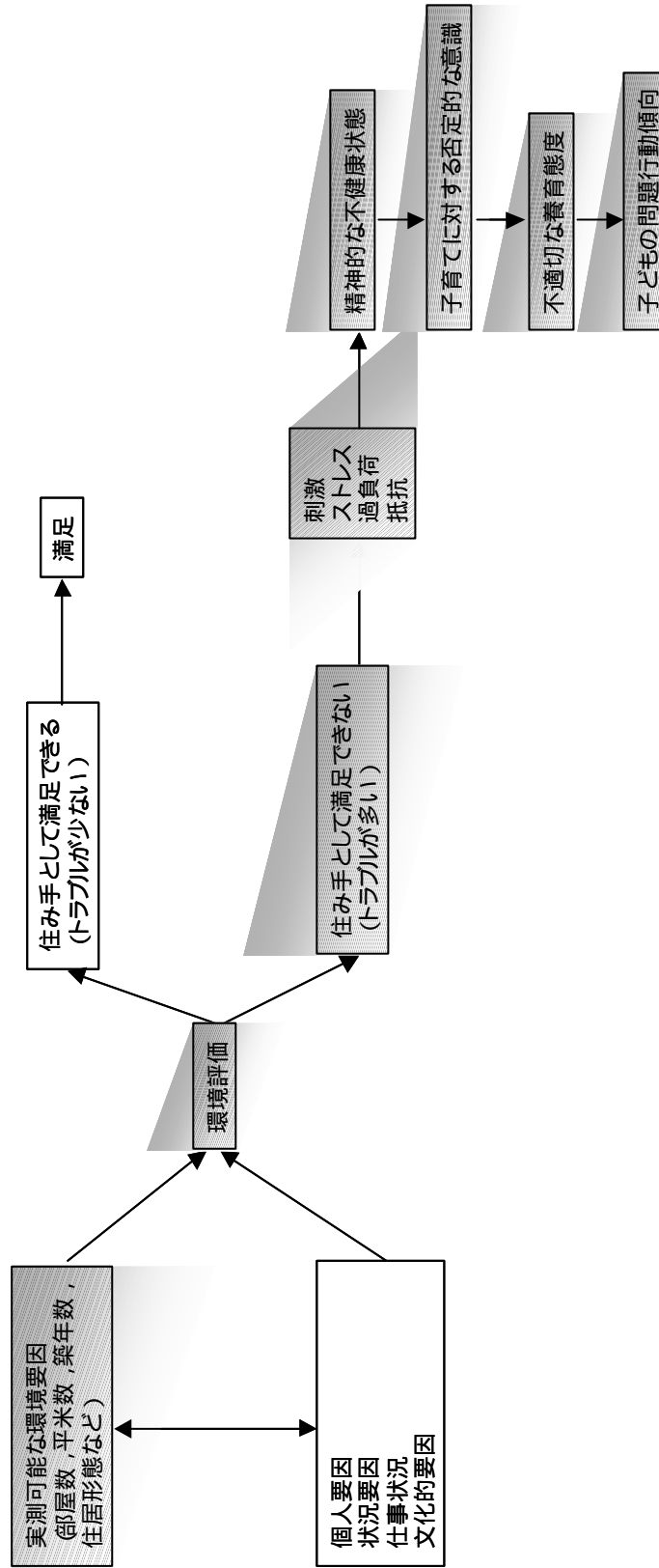


Figure1.2.1 本研究の仮説モデル

(黒く塗ってある部分のプロセスを本研究で検証)

### 第3節 方法

#### 第1項 本研究の調査概要およびデータについて

本研究のデータは、1998年度調査および2000年度調査の2回にわたって行った子育てと子育てをめぐる環境に関する調査（1998年度：子育ての環境と子どもの発達に関する調査；2000年度：子育ての環境と育児についての調査）から得られたものである。両調査とも、乳幼児を持つ母親を対象として、居住環境と精神的健康・子育てとの関係性を明らかにすることを目的として行った調査である。調査の概要をFigure1.2.2 (p. 27)にまとめている。以下に、それぞれの調査の概要およびデータについて述べる。なお、分析には全て統計パッケージ SPSS10.0J および AMOS4.0 を使用した。

#### 1998年度調査：

##### 1. 調査対象者の居住地域の概要（人口統計 自治省行政局「住民基本台帳人口要覧（平成10年度版）」による）

調査対象者の居住地域は、埼玉県A市・B市、および東京都C区・D区・E区である。これらの地域の特徴は以下の通りである。また、公的調査の結果を基にして、地域の概要についてまとめたものをTable1.2.1に示している。

**埼玉県A市：**埼玉県南部、東京都に隣接する都市。人口は、322,000人（1998年3月31日現在）。JR 1路線、私鉄2路線が市内を通っている。都心へは急行を利用して約30～40分と交通の便も良く、住宅地としての開発が進んでいる。本調査における5地域の中で、1世帯あたりの所得が最も高い（4,831,000円）地域である。

**埼玉県B市：**埼玉県南部に位置する都市。人口は162,000人（1998年3月31日現在）。私鉄2路線が市内を通っている。都心へは1時間弱の位置にあり、住宅都市として人口が増加している。本調査における5地域の中で、1世帯あたりの延べ床面積が最も広く（80.7 m<sup>2</sup>）、持ち家比率も高い（66.9%）地域である。

**東京都C区：**東京都区部西端に位置する地域。人口は500,000人（1998年3月31日現在）。JR 1路線、私鉄3路線、地下鉄2路線が区内を通っている。都心へはおよそ30分と交通の便が良く、比較的 naturally 恵まれた住宅地域である。本調査における5地域の中では、最も1 m<sup>2</sup>あた

りの土地価格が高い(499,200円/m<sup>2</sup>)地域である。

**東京都D区**：東京都区部北部に位置する地域。人口は321,000人(1998年3月31日現在)。JR5路線、地下鉄1路線、都電1路線が区内を通過しており、交通の便は良い。戦後工場跡地が大規模住宅団地となり、ベッドタウン化している。本調査における5地域の中では、人口密度が最も高い地域である(15,704人/? )。

**東京都E区**：東京都区部の北東部、埼玉県に隣接する地域。人口は619,000人(1998年3月31日現在)。JR1路線、私鉄1路線、地下鉄2路線が区内を通過している。近年は高層集合住宅も増加中の住宅密集地域である。本調査における5地域の中では、世帯数が最も多い(255,693世帯)地域である。

## 2. 調査方法

本調査は、1998年7月～10月にかけて行った。対象者は東京都および埼玉県に居住し、幼稚園あるいは保育園に子どもを通わせている母親とした。調査は、園を通しての留め置きによる質問紙調査法を用いた。回収率は70%(690部)であったが、回答者が母親ではないものを除外した653部を分析に使用した。この調査において特徴的なのは、住環境に対する評価に関する項目として、日頃感じている困りごと・不満ごとの有無で評定するものを用いていることである。調査対象者の属性をTable1.2.2に示している。

### 2000年度調査：

#### 1. 調査対象者の居住地域の概要 (人口統計 自治省行政局「住民基本台帳人口要覧(平成12年度版)」による)

調査対象者の居住地域は、千葉県F市、および東京都C区、G区である。これらの地域の特徴は以下の通りである。また、公的調査の結果を基にして、地域の概要についてまとめたものをTable1.2.3に示している。

**千葉県F市**：千葉県西部、東京都に隣接する都市。人口は、449,000人(2000年3月31日現在)。JR3路線、私鉄2路線、地下鉄3路線が市内を通過しており、東京までおよそ30分と交通の便も良い。ベッドタウンとして人口が増加しているが、本調査における3地域の中で人口密度は最も低い(7,545人/m<sup>2</sup>)。一方、1世帯あたりの所得は3地域の中で最も高い(4,507,000円)

地域である。

**東京都C区**：1998年度調査と同様の地域。ただし、人口は2000年3月31日現在、522,000人となっている。本調査における3地域の中では、一戸建て住宅の比率が最も低い(25%)地域である。

**東京都G区**：東京都の都心に近い住宅地域。人口は658,000人(2000年3月31日現在)。私鉄3路線、地下鉄2路線が区内を通っている。緑被率が23区内で最も高く(22.6%、都市データパック2000年度版による)、良い住環境を保っている。本調査における3地域の中で、最も世帯数が多い(283,729世帯)地域である。

## 2. 調査方法

本調査は、2000年6月～8月および10月にかけて行った。対象者は、東京都に居住し、子育てサークルに参加している母親、および千葉県に居住し、子どもを保育園に通わせている母親とした。子育てサークルにおいては、会合の際に調査票を配布し、次回回収するという方法と、郵便にて返送してもらうという方法をとった。保育園においては、園を通して配布・回収という方法を用いた。いずれの場合も質問紙による調査法を用いた。回収率は58%であり、1081部を分析に使用した。この調査においては、1998年度調査と異なり、住環境に対する評価に関する項目は、住居内および住宅周辺環境について5段階で評価するという方法をとった。調査対象者の属性をTable1.2.4に示している。

Table1.2.1 1998年度調査対象者居住地域の概要

	埼玉県		東京都			全体 <sup>注)</sup>
	A市	B市	C区	D区	E区	
1. 人口密度 (人 / m <sup>2</sup> )	4,454	3,295	14,681	15,704	11,639	9,955
2. 世帯数	116,921	57,168	253,288	148,649	255,693	166,344
3. 1世帯あたり延べ床面積 (m <sup>2</sup> )	77.6	80.7	55.3	50.1	56.9	64.1
4. 一戸建て住宅・集合住宅 (%)	50 :50	56 :44	25 :75	25 :75	31 :69	33 :67
5. 持ち家比率 (%)	59.5	66.9	37.7	36.0	43.4	48.7
6. 住宅地地価 (100円 / m <sup>2</sup> )	2,600	2,052	4,992	4,963	3,165	3,568
7. 1世帯あたり所得 (千円)	4,831	4,673	4,420	3,615	3,617	4,231

出典：1-3, 5-6 :東洋経済新聞社「都市データパック (1998度)」

4 :総務庁統計局「平成10年 住宅・土地統計調査報告」

7 :日本マーケティング教育センター「2002年度版 個人所得指標」

注) 著者が算出

Table1.2.2 1998年度データの調査対象者属性

1. 家族の人数(人)	4.26 (1.12)	5. 居住年数	
2. 子どもの人数(人)	1.96 (0.76)	1年未満	11.8%
3. 対象児の年齢(歳)	4.40 (0.94)	~3年未満	23.9%
4. 母親の就労		~5年未満	23.1%
有職	43.3%	~10年未満	28.3%
専業主婦	55.7%	10年以上	11.4%
		6. 引越しの予定	
		ある	14.1%
		したいが未定	35.7%
		ない	49.0%

注1. カッコ内はS.D.

注2. 母親の年齢・学歴については質問していない

**Table1.2.3 2000年度調査対象者居住地域の概要**

	千葉県	東京都		全体 <sup>注)</sup>
	F市	C区	G区	
1. 人口密度 (人 / m <sup>2</sup> )	7,545	14,727	13,329	11,867
2. 世帯数	187,891	259,593	283,729	223,742
3. 1世帯あたり延べ床面積 (m <sup>2</sup> )	60.1	55.3	60.4	57.7
4. 一戸建て住宅 : 集合住宅 (%)	35 : 65	25 : 75	42 : 58	33 : 67
5. 持ち家比率 (%)	44.2	37.7	41.8	41.2
6. 住宅地地価 (100円 / m <sup>2</sup> )	2,549	4,718	3,907	3,725
7. 1世帯あたり所得 (千円)	4,507	4,420	4,411	4,446

出典：1-3, 5-6 東洋経済新聞社「都市データパック (2000年度版)」,  
 4 総務庁統計局「平成10年 住宅・土地統計調査報告」,  
 7 : 日本マーケティング教育センター「2002年度版 個人所得指標」  
 注) 著者が算出

**Table1.2.4 2000年度データの調査対象者属性**

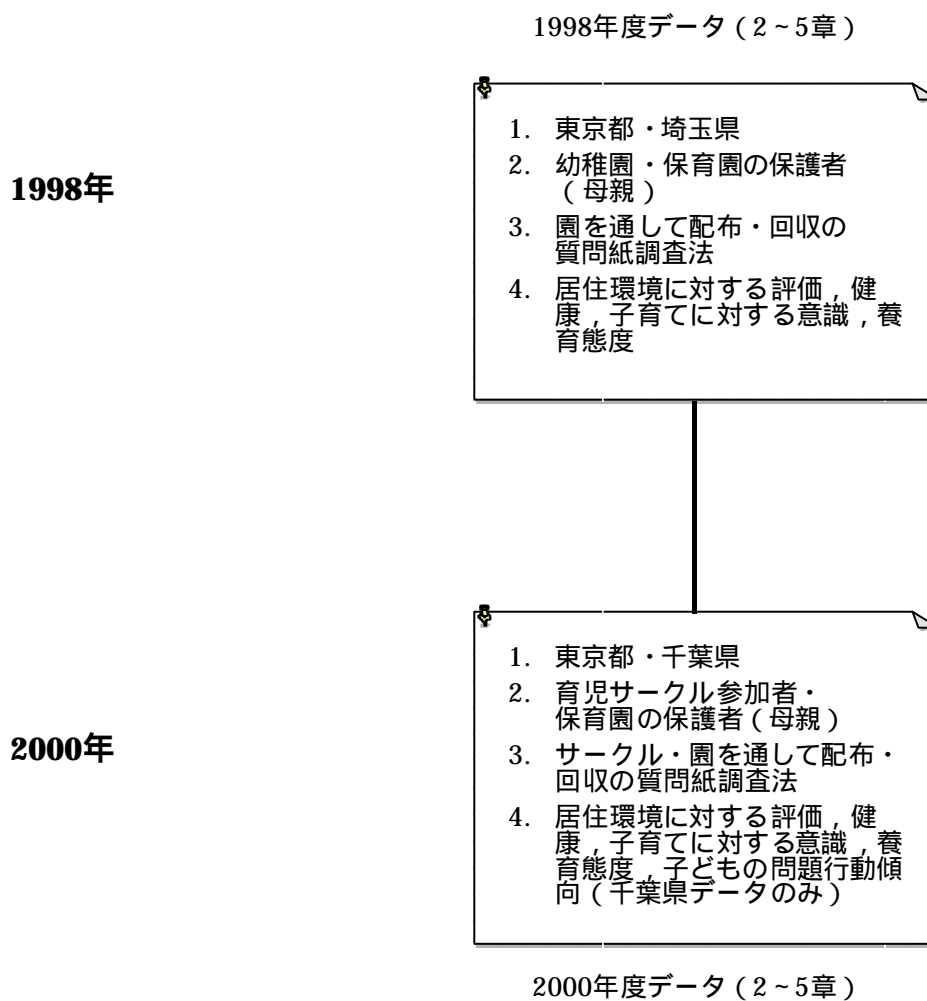
1. 家族の人数(人)	3.79 (1.07)	7. 居住年数	
2. 子どもの人数(人)	1.68 (0.75)	1年未満	11.7%
3. 対象児の年齢(歳)	2.72 (1.79)	~3年未満	31.0%
4. 母親の年齢(歳)	33.2 (4.73)	~5年未満	23.2%
5. 母親の就労		~10年未満	23.9%
有職	72.6%	10年以上	9.3%
専業主婦	24.3%	8. 引越しの予定	
6. 母親の学歴		ある	10.8%
中学校	5.5%	したいが未定	31.7%
高校	29.3%	ない	56.3%
専門学校	21.1%		
短大・高専	20.8%		
大学以上	21.7%		

注1. カッコ内はS.D.

凡例

- 
1. 調査対象地域
  2. 調査対象者
  3. 調査方法
  4. 調査内容

< 調査時点 >



**Figure1.2.2 本研究のデータ構成**

## 第2項 本研究で用いる分析：共分散構造分析

本研究は、第1章第2項で示したような因果連鎖のモデルを仮説として提示している。このように、仮説としてモデルがあり、それを検証するような場合には、共分散構造分析モデルの下位モデルの1つである、パス解析モデルが有用である(本研究の場合は、潜在変数を伴わない構造方程式モデル、豊田,1998)。よって、本研究の第3章から第5章まで、モデルの検証においては、共分散構造分析を適用している。

共分散構造分析を用いたパス解析は、従来の重回帰分析を繰り返して行うパス解析(重回帰によるパス解析、豊田,1998)とは異なり、仮定されたモデルとデータとの適合度を今意味することが可能である(豊田,1998)。

モデルの評価を行う際に、使用される代表的な指標として、カイ二乗値、GFI、AGFI、そしてRMSEAが挙げられる。カイ二乗検定値については、帰無仮説の設定の仕方が通常とは逆であり(採用したい仮説を帰無仮説に設定している)、仮説検定の結果から有用な知見が得にくい(豊田,1998)こと、値が標本数に依存することなどから、あまり使われなくなっている。一方、モデルがデータの分散共分散をどの程度説明しているのかを割合で示したものが、GFI(Goodness of Fit Index)とAGFI(Adjusted Goodness of Fit Index)である。AGFIは、GFIを自由度で修正したものである。これらはカイ二乗検定と比較して、標本数に左右されにくい(Kline,1998)。GFI・AGFIの値が0.9以上あることが、因果モデルとして採用する一つの経験的な目安となっている(豊田,1998)。また、RMSEA(Root Mean Square Error of Approximation)は、モデルの分布と真の分布との乖離を1自由度あたりの量で示したもので、0.05以下であれば、モデルのあてはまりが良く、0.1以上の場合には当てはまりが悪いと判断する(豊田,1998)。

本研究では、仮説で示した因果モデルを以上のようなモデル評価指標を用いて、評価していく。



## 第4節 本論文の構成

### 第1項 本研究の構成

本研究論文は、6章で構成されている。第1章では、理論的背景、先行研究のレビューを行った上で、本研究の仮説について述べた。第6章は、結論である。第2章から第5章で、仮説に従って、段階的に分析を進めて行く(p. 21, Figure1.2.1)。本研究論文の枠組みを Figure1.2.3 に示した。

第2章ではまず、調査対象者がおかれている子育てをめぐる住環境の実態を把握すると同時に、その環境に対する居住者(母親)の評価について検討している。

第3章では、子育てをめぐる住環境と母親の精神的健康との関わりを検討している。

第4章では、子育てをめぐる住環境と母親の子育てに対する意識との関係を検討している。

第5章では、仮説モデルの検証を行っている。仮説では、子育てをめぐる住環境が母親の精神的健康および子育てに対する意識を介して子どもに対する態度(養育態度)、および子どもに影響を及ぼしているとしているが、この単方向の因果連鎖の関係を、共分散構造分析(第1章第2節第3項参照)により検討している。

第2章から第5章までの分析において、本研究では、1998年度調査と2000年度調査について、同様の枠組みで分析を行っている。1998年度調査においては、住環境の変数を困りごとの数という変数で分析しており、住環境の困りごとを量的に捉えている。2000年度のデータでは、住環境の各側面について詳細に分析しており、住環境の困りごとを質的に検討している。このように、本研究では2種類のデータによって、住環境の影響を量的・質的に分析をしている。このようなデータの性質上、1998年度のデータについては、仮説モデルを概括的に検討し、2000年度のデータで詳細に検討するという構成になっている。

第6章では、本研究に対する全体的な考察を行っている。

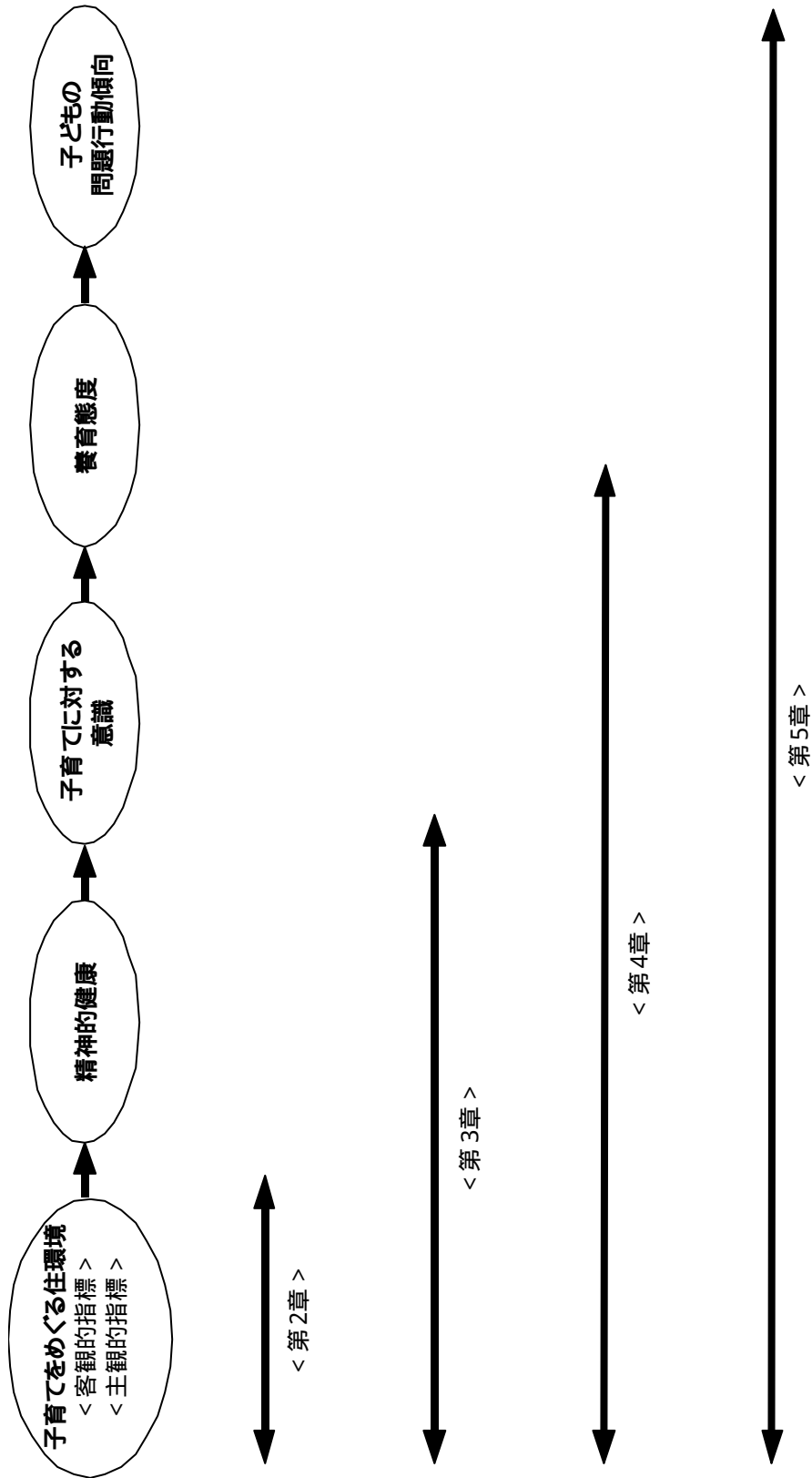


Figure1.2.3 因果連鎖（仮説）と各段階を分析する章

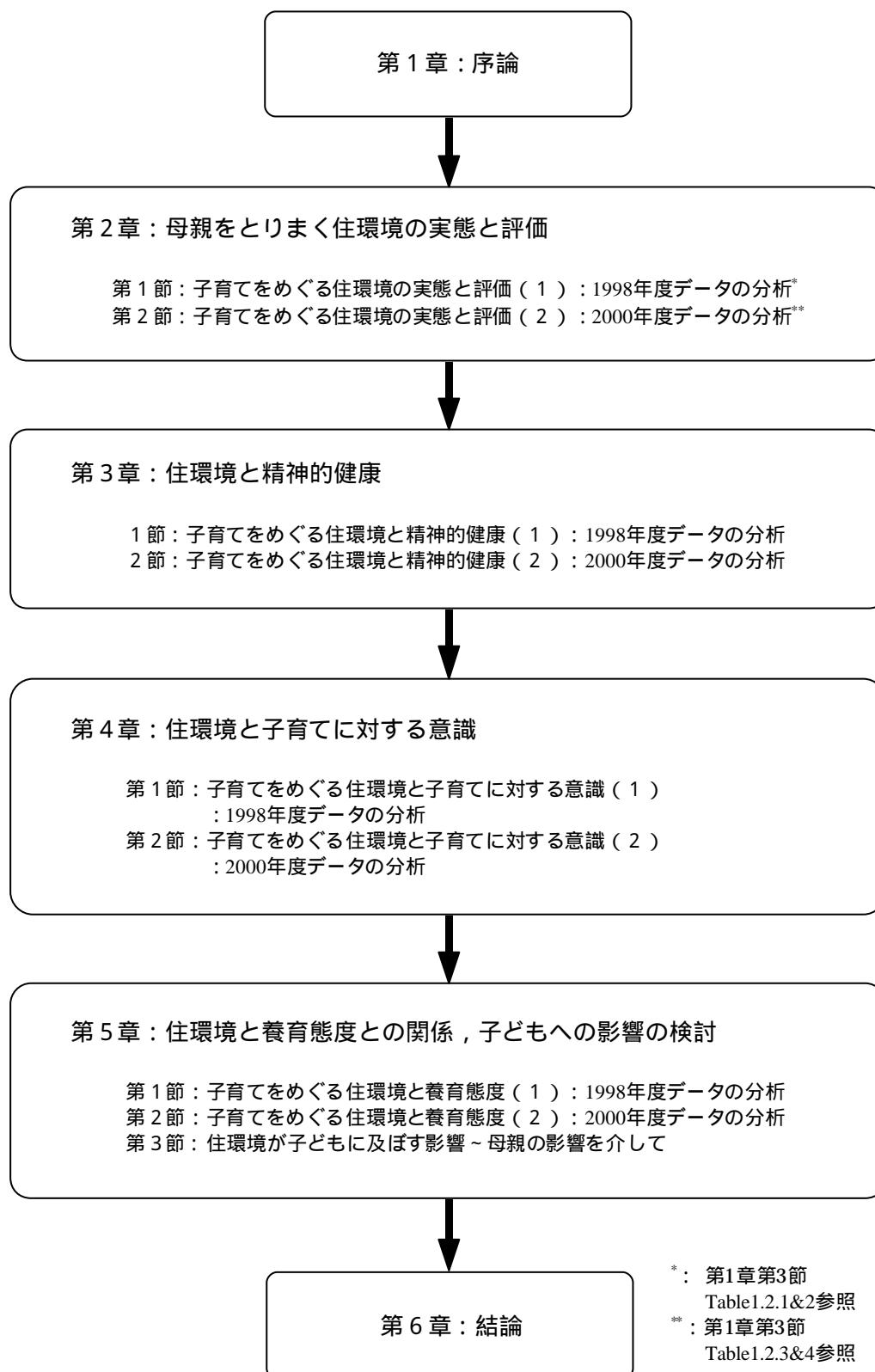


Figure1.2.4 本研究の枠組み

## 第2章 母親をとりまく住環境の実態と評価

本章では、子育てをめぐる住環境の実態とその環境に対する母親の評価について検討することを目的としている。

住環境の実態は、住環境の客観的指標と主観的指標によって把握することができる。本研究では、この住環境の客観的指標として、住居特性を用いている。一方主観的指標は、住環境に対する居住者の評価と考えられ、本研究では、居住者が自分の住んでいる環境に対して感じている、住みにくさや不便さ、困りごとの程度などに対する評価を用いている。

このような視点から、1998年度データと2000年度データを基に、以下のように分析・考察を行っている。

- (1) 調査対象者の住居特性についてまとめる。
- (2) 調査対象者の子育てをめぐる住環境に対する評価傾向を把握する。

2000年度データについては、子育てをめぐる住環境に対する評価項目の構造を検討する。

- (3) 住居特性と住環境に対する評価の関係について検討する。

なお本章では、第1節と第2節の考察を第3節で総括して行っている。

## 第1節 子育てをめぐる住環境の実態と評価(1)

### : 1998年度データの分析

#### §1. 方法

##### 1. データ

1998年度データを用いた(N=653)。

##### 2. 測度

###### (1) 住居特性

住環境の客観的な指標として、住居特性の「住居の形態(一戸建て 集合住宅)」、所有の形態(持ち家 賃貸住宅)、延べ床面積、部屋の形式、居住階(集合住宅のみ)の5属性を検討した。

###### (2) 子育てをめぐる住環境に対する評価

住環境に対する評価として、住環境における困りごとの経験の有無をたずねるという方法をとった。本研究で使用した困りごとは、(a) 渡辺(1982)の住環境トラブルイベントアイテムと(b) 松本(1997)で母親に対して子育てをするうえで、住環境について不満・困難に感じることをたずねた自由記述回答を参考にして作成したものである。評価項目は全22項目で、そのうち住居に関するものが20項目、住居周辺の環境に関するものが2項目である。これらの項目に対して、提示された困りごとを経験した場合には「はい」、経験したことがない場合には「いいえ」と回答してもらった。

#### §2. 結果

##### 1. 住居特性

調査対象者の住環境の実態を把握するため、住居の形態、所有の形態、延べ床面積、部屋の形式、居住階(集合住宅のみ)の5属性をTable2.1.1にまとめた。

**Table2.1.1 1998年度データの住居特性**

		度数 (%)	
1. 住居の形態		4. 部屋の形式	
一戸建て	309 (47.5)	1K-1DK	8 (1.4)
集合住宅	341 (52.5)	1LDK-2DK	102 (17.7)
2. 所有の形態		2LDK-3DK	159 (27.7)
持ち家	375 (58.5)	3LDK-4DK	160 (27.8)
賃貸	266 (41.5)	4LDK-5DK	85 (14.8)
3. 延べ床面積 (Mean =77.18m <sup>2</sup> , S.D.=54.75)		5LDK以上	61 (10.6)
~ 60m <sup>2</sup>	225 (44.4)	5. 居住階 (集合住宅のみ)	
~ 80m <sup>2</sup>	133 (26.2)	1F	83 (24.7)
~ 100m <sup>2</sup>	70 (13.8)	2F-3F	147 (43.8)
100m <sup>2</sup> 以上	79 (15.6)	4F-5F	51 (15.2)
		6F以上	55 (16.4)

本研究の対象者については、一戸建て居住者 (47.5%) と集合住宅居住者 (52.5%) の割合はほぼ半数ずつであった。所有形態の別 (持ち家 賃貸) についても、持ち家 58.5%、賃貸 41.5% とおよそ 6:4 であり、極端な差は見られなかった。延べ床面積に関しては、平均 77.18 m<sup>2</sup> (SD=54.75) であり、カテゴリー化を試みた場合、80 m<sup>2</sup> (およそ 24 坪) までで、全体の 7 割を占めていた。部屋の形式については、ダイニングキッチン (DK) と 2 部屋あるいは 3 部屋というタイプが最も多かった (55.5%)。集合住宅について、建物全体の高さや居住階を調べたところ、3~5 階建ての中層住宅と 6 階建て以上の高層住宅がそれぞれ 40% ずつとなっていた。さらに、居住階については、2 階あるいは 3 階に住んでいる人が全体の 43.8% で最も多かった。

## 2. 住環境に対する評価

住環境に関する困りごとに関する項目の回答傾向を Figure 2.1.1 に示している。(経験したことのある人の割合が少ない順に項目を並べ替えてある。)

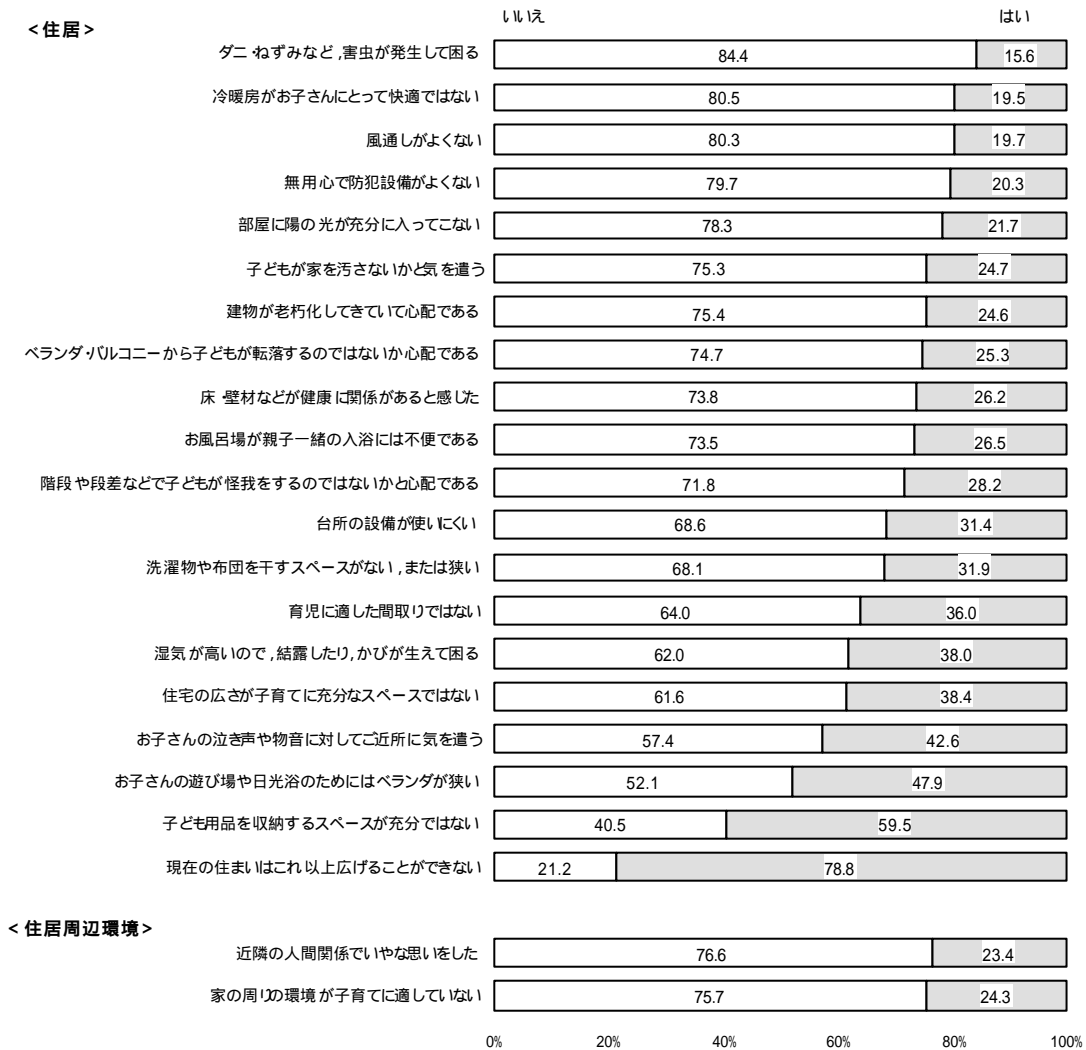


Figure2.1.1 住環境における困りごとに対する回答傾向 (%)



### (1) 住居における困りごと

住居における困りごとを経験している人の割合は、経験していない人の割合を下まわっている項目の方が多いという結果となった。特に、害虫の問題 (15.6%) や風通しの問題 (19.5%)、冷暖房の設備の問題 (19.7%) などは、経験している人の割合が全体の 20% にも満たず、このような問題で困っている人は相対的に少ないことがわかった。一方、「子どもの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い」(47.9%)、「子ども用品を収納するスペースが充分ではない」(59.5%)、「現在の住まいはこれ以上広げることができない」(78.8%)と、らように住居内のスペースに関する項目については、経験したことがある人が多かった。

### (2) 住居周辺環境における困りごと

住居周辺環境における困りごとについては、家の周りの環境が子育てに適していないと感じている人は全体の 24.3% であり、人間関係についてもいやな思いをしたことがある人は全体の 23.4% であった。住居周辺環境においても、項目に示されたような困りごとを経験している人は多くはなかった。

### 3. 住居特性と住環境に対する評価の関係について

住居特性(属性)について、住居および住居周辺環境に関する各項目との関係を検討した。質的変数間の関係の強さを示す連関係数として、 $2 \times 2$  のクロス表の場合、係数が用いられ、 $k \times k$  のクロス表の場合はクラメールの連関係数( $V$ )が用いられる(吉田,1998)。そこで、各変数に対して適切な連関係数を求め、住居特性と住環境に対する評価の関係を分析した。結果を模式的にTable2.1.2(p.42)に示している。

#### (1) 住居形態による違い

住居形態(集合住宅か一戸建て住宅か)による住環境に関する困りごとの経験の有無の偏りを係数を算出して検討した。回答に1%水準で有意な偏りが見られたのは、「風通しがよくない」( $=.106$ )、「住宅の広さが子育てに十分なスペースではない」( $=.264$ )、「子ども用品を収納するスペースが充分ではない」( $=.235$ )、「冷暖房が子どもにとって快適ではない」( $=.117$ )、「台所の設備が使いにくい」( $=.129$ )、「お風呂場が親子一緒の入浴には不便である」( $=.250$ )、「子どもの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い」( $=.140$ )、「洗濯物や布団を干すスペースがない狭い」( $=.216$ )、「子どもの泣き声や物音に対して近所に気を遣う」( $=.300$ )、「湿気が高いので、結露したりかびが生えたりして困っている」( $=.268$ )、「階段 段差などで子どもが怪我をするのではないかと心配である」( $=-.161$ )、「子どもが家を汚さないかと気を遣う」( $=.190$ )、「現在の住まいはこれ以上広げることができない」( $=.367$ )、「家の周りの環境が子育てに適していない」( $=.109$ )の14項目であった。また、5%水準で有意な偏りが見られたのは、「育児に適した間取りではない」( $=.081$ )と「ベランダなどから子どもが転落するのではないかと心配である」( $=.088$ )の2項目であった。これらの中で、「階段 段差などで子どもが怪我をするのではないかと心配である」という項目のみ、一戸建て住宅の方が経験している人が割合として相対的に高かった。これ以外の項目については、全て集合住宅の方が経験している割合が相対的に高かった。

## (2) 所有形態による違い

所有形態(賃貸か持ち家か)による住環境に関する困りごとの経験の有無の偏りを係数を算出して検討した。回答に1%水準で有意な偏りが見られたのは、「住宅の広さが子育てに十分なスペースではない」( $\chi^2=263$ )、「育児に適した間取りではない」( $\chi^2=163$ )、「子ども用品を収納するスペースが充分ではない」( $\chi^2=205$ )、「冷暖房が子どもにとって快適ではない」( $\chi^2=192$ )、「台所の設備が使いにくい」( $\chi^2=244$ )、「お風呂場が親子一緒の入浴には不便である」( $\chi^2=219$ )、「子どもの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い」( $\chi^2=184$ )、「ベランダなどから子どもが転落するのではないかと心配である」( $\chi^2=110$ )、「洗濯物や布団を干すスペースがない狭い」( $\chi^2=193$ )、「子どもの泣き声や物音に対して近所に気を遣う」( $\chi^2=192$ )、「湿気が高いので、結露したりかびが生えたりして困っている」( $\chi^2=318$ )、「ダニ、ねずみなど害虫が発生して困る」( $\chi^2=163$ )、「無用心で防犯設備がよくない」( $\chi^2=147$ )、「建物が老朽化してきていて心配である」( $\chi^2=136$ )、「子どもが家を汚さないかと気を遣う」( $\chi^2=180$ )、「現在の住まいはこれ以上広げることができない」( $\chi^2=278$ )の16項目であった。また、5%水準で有意な偏りが見られたのは、「風通しがよくない」( $\chi^2=106$ )のみであった。全ての項目について、賃貸住宅に住んでいる人の方が経験している割合が高かった。

## (3) 延べ床面積による違い

住居の延べ床面積による住環境に関する困りごとの経験の有無の偏りをクramerの連関係数( $V$ )を算出して検討した(延べ床面積は、 $\sim 60\text{ m}^2$ 、 $\sim 80\text{ m}^2$ 、 $\sim 100\text{ m}^2$ 、 $100\text{ m}^2$ 以上の4群に分けた)。回答に1%水準で有意な偏りが見られたのは、「住宅の広さが子育てに十分なスペースではない」( $V=424$ )、「育児に適した間取りではない」( $V=208$ )、「子ども用品を収納するスペースが充分ではない」( $V=325$ )、「冷暖房が子どもにとって快適ではない」( $V=169$ )、「台所の設備が使いにくい」( $V=287$ )、「お風呂場が親子一緒の入浴には不便である」( $V=273$ )、「子どもの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い」( $V=270$ )、「洗濯物や布団を干すスペースがない狭い」( $V=242$ )、「子どもの泣き声や物音に対して近所に気を遣う」( $V=236$ )、

“湿気が高いので、結露したりかびが生えたりして困っている” ( $V=323$ )、 “ダニ・ねずみなど害虫が発生して困る” ( $V=224$ )、 “建物が老朽化してきていて心配である” ( $V=191$ )、 “現在の住まいはこれ以上上げることができない” ( $V=320$ ) の 13 項目であった。また、5%水準で有意な偏りが見られたのは、“床 壁材などが健康に関係があると感じた” ( $V=128$ ) と “無用心で防犯設備がよくない” ( $V=131$ ) の 2 項目であった。全ての項目について、延べ床面積の狭い群の方が経験している割合が高かった。

#### (4) 部屋の形式による違い

住居の部屋の形式 (= 部屋数) による住環境に関する困りごとの経験の有無の偏りをクramerの連関係数 ( $V$ ) を算出して検討した (部屋の形式は、1K ~ 2DK、2LDK ~ 3DK、3LDK ~ 4DK、4LDK ~ 5DK、5LDK 以上の 5 群に分けた)。回答に 1%水準で有意な偏りが見られたのは、“部屋に陽の光が充分に入っていない” ( $V=171$ )、 “風通しがよくない” ( $V=224$ )、 “住宅の広さが子育てに十分なスペースではない” ( $V=416$ )、 “育児に適した間取りではない” ( $V=292$ )、 “子ども用品を収納するスペースが充分ではない” ( $V=356$ )、 “冷暖房が子どもにとって快適ではない” ( $V=215$ )、 “台所の設備が使いにくい” ( $V=292$ )、 “お風呂場が親子一緒の入浴には不便である” ( $V=274$ )、 “子どもの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い” ( $V=222$ )、 “洗濯物や布団を干すスペースがない狭い” ( $V=255$ )、 “子どもの泣き声や物音に対して近所に気を遣う” ( $V=236$ )、 “湿気が高いので、結露したりかびが生えたりして困っている” ( $V=298$ )、 “ダニ・ねずみなど害虫が発生して困る” ( $V=187$ )、 “建物が老朽化してきていて心配である” ( $V=205$ )、 “現在の住まいはこれ以上上げることができない” ( $V=283$ ) の 15 項目であった。また、5%水準で有意な偏りが見られたのは、“近隣の人間関係でいやな思いをした” ( $V=152$ ) のみであった。全ての項目について、部屋数が少ない群の方が経験している割合が高かった。

#### (5) 居住階による違い

集合住宅において、住居がある階数によって、住環境に関する困りごとの経験の有無に偏りが見られるかをクramerの連関係数 ( $V$ ) を算出して検討した (居住階は、1F, 2~3F, 4~5F, 6F以上の4群に分けた)。回答に1%水準で有意な偏りが見られたのは、「部屋に陽の光が充分に入っていない」 ( $V=.209$ )、*「育児に適した間取りではない」* ( $V=.219$ )、*「ベランダなどから子どもが転落するのではないかと心配である」* ( $V=.243$ )、*「湿気が高いので、結露したりカビが生えたりして困っている」* ( $V=.211$ )、*「無用心で防犯設備がよくない」* ( $V=.217$ )の5項目であった。また、5%水準で有意な偏りが見られたのは、「子どもの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い」 ( $V=.169$ )と家の周りの環境が子育てに適していない” ( $V=.155$ )の2項目であった。「ベランダなどから子どもが転落するのではないかと心配である」と家の周りの環境が子育てに適していない”という項目については、高層階に住んでいる人の方が経験している割合が高く、それ以外の項目については、低層階の群の方が経験している割合が高かった。

全体的な傾向として、集合住宅よりは一戸建て住宅、賃貸住宅よりは持ち家、延べ床面積が狭いよりは広い方が、困りごとを経験している割合が高いことが示された。また、集合住宅における居住階による違いを見ると、全体的には低層階の方が、困りごとを経験している割合が高いが、ベランダなどから子どもが転落する不安や、住環境が子育てに適していないと感じている割合は、高層階に高いことが示された。

Table 2.1.2 住環境と住居特性との関連

	住居周辺の環境					
	住居	住居周辺の環境				
住居の形態						
所有の形態						
延べ床面積						
部屋の形式						
住居の階数						
		近隣の人間関係でいやな思いをした				
		家の周りの環境が子育てに適していない				
		現在の住まいはこれ以上上げることができない				
		子どもが家を汚さないかと気を遣う				
		建物が老朽化してきていて心配である				
		無用心で防犯設備がよくない				
		階段や段差などで子どもが怪我をするのではないかと心配である				
		床・壁材などが健康に関係があると感じた				
		ダニ・ねずみなど、害虫が発生して困る				
		湿度が高いため、結露したり、かびが生えて困る				
		お子さんの泣き声や物音に対してご近所に気を遣う				
		洗濯物や布団を干すスペースがない、または狭い				
		ベランダ・バルコニーから子どもが転落するのではないかと心配である				
		お子さんの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い				
		お風呂場が親子一緒の入浴には不便である				
		台所の設備が使いにくい				
		冷暖房がお子さんにとって快適ではない				
		子ども用品を収納するスペースが充分ではない				
		育児に適した間取りではない				
		住宅の広さが子育てに充分なスペースではない				
		風通しがよくない				
		部屋に陽の光が充分に入っていない				

\*p<.01, \*\*p<.05

#### 4. 住居特性(属性)と住居における困りごとの数との関連

住居における困りごとの経験数(最大値=20)を合計し、住居特性との関連を検討した。その結果、一戸建てよりは集合住宅の方が( $t = -7.914, p < .01$ )、持ち家よりは賃貸住宅の方が( $t = -9.823, p < .01$ )困りごとが多いことがわかった。

次に、延べ床面積、部屋の形式(=部屋数)、居住階(集合住宅のみ)については、一元配置の分散分析を行った。その結果、狭く( $F(3, 496) = 40.870, p < .01$ )、部屋数が少ない方が( $F(4, 562) = 33.346, p < .01$ )困りごとが多かった。集合住宅の居住階による困りごとの数に違いは認められなかった。

延べ床面積については、カテゴリー化する前の連続変数を用いて住居内の困りごとの数との相関関係を検討したところ、有意な負の相関が見られ( $t = -.344, p < .01$ )、延べ床面積が大きい方が、困りごとが少ないことが明らかとなった。

## 第2節 子育てをめぐる住環境の実態と評価(2)

### : 2000年度データの分析

#### §1. 方法

##### 1. データ

2000年度データを用いた(N=1081)。

##### 2. 測度

###### (1) 住居特性

住環境の客観的な指標として、住居特性の「住居の形態(一戸建て 集合住宅)」、所有の形態(持ち家 賃貸住宅)、延べ床面積、部屋の形式、居住階(集合住宅のみ)、子ども部屋の有無の6属性を検討した。

###### (2) 子育てをめぐる住環境に対する評価

第2章第1節の場合と同様に、住環境に対する評価として、住環境における困りごとを提示し、それに対する居住者の評価をたずねるという方法をとった。本研究で用いた住環境評価項目28項目(主に住居に関する項目15項目、住居周辺環境に関する項目13項目)は、松本(1997)が行った育児環境に関する調査において、子育て中の母親から得られた住環境の不満な点・困っている点に対する自由記述回答を分類・整理したものを項目化したものである。これらの項目に対して、1 まったくあてはまらない～5 非常にあてはまるの5段階評価により回答を求めた。

これらの項目に加え、子育て中に必要と考えられる各施設への利便性について、0 ない～4 近いまでの5段階評価により回答を求めた。

28項目の住環境評価項目を分類するために、因子分析を行なった。住環境評価項目28項目を主因子法(クォーティマックス回転)により、固有値1.0以上で抽出された主因子について、共通性が極端に低い項目や因子負荷量が0.40未満の項目を除外しながら繰り返し因子分析を行った。その結果、最終的に4因子が抽出され、この4因子で全体の分散の42.2%を説明していた。因子分析の結果をTable2.2.1に示す。抽出された各因子は以下のように解釈できる。



第Ⅰ因子 住居内のスペースに関連していると思われる困りごとを表している項目に負荷が高いことから、「スペース」因子(6項目)と解釈する。

第Ⅱ因子 住居周辺環境における快適性に関連した項目が高く負荷していることから、「住居周辺環境の快適性」因子(4項目)と解釈する。

第Ⅲ因子 日当たり風通しという項目に高く負荷していることから、「室内環境」因子(2項目)と解釈する。

第Ⅳ因子 住居のつくりから派生する困りごとを表している項目に負荷が高いことから、「家のつくり」因子(3項目)と解釈する。

各因子の内的整合性を表す 係数を求めたところ、0.603～0.755 の範囲であり、信頼性が認められた。以後の分析では、因子分析の結果得られた4因子と、因子分析の過程で除外された項目を単項目として使用していく。

Table2.2.1 住環境変数の因子分析結果

	平均値 (SD)	I	II	III	IV
<b>&lt;スペース&gt;</b> = .755	16.64 (5.07)				
家が狭いので友人を呼ぶことができない		.760	-.013	.111	.138
子どものためのスペースは充分にある (逆)		<u>.675</u>	.090	.021	-.050
自分のための場所がない		<u>.614</u>	.075	.085	.114
収納スペースは充分である (逆)		<u>.563</u>	.083	-.008	-.055
間取りの使い勝手が悪い		<u>.449</u>	.011	.154	.357
ベビーカー・三輪車の置き場所がない		<u>.423</u>	.136	.019	.106
<b>&lt;住居周辺環境の快適性&gt;</b> = .682	11.70 (3.35)				
この地域は静かである (逆)		.103	<u>.820</u>	.016	-.031
この地域の空気は悪い		.084	.554	.006	.074
車や電車が通るとうるさい		.082	<u>.515</u>	-.007	.095
緑や自然に囲まれている (逆)		.111	<u>.498</u>	.045	-.072
<b>&lt;室内環境&gt;</b> = .749	4.13 (1.98)				
風通しが悪い		.164	.039	<u>.965</u>	.025
日当たりが悪い		.217	.043	<u>.564</u>	.069
<b>&lt;家のつくり&gt;</b> = .603	5.41 (2.11)				
子どもに目が届かない場所があり不安だ		-.012	.032	.097	<u>.665</u>
室内に段差が多い		.145	.028	.022	.536
階段 (室内, 室外を含む) の昇降がづらい		.167	.019	-.071	<u>.531</u>
因子負荷量二乗和		2.269	1.537	1.311	1.215
寄与率 (%)		15.126	10.247	8.743	8.097
累積寄与率 (%)		15.126	25.374	34.117	42.214

## §2. 結果

### 1. 住居特性

調査対象者の住環境の実態を把握するため、住居の形態、所有の形態、延べ床面積、部屋の形式、居住階（集合住宅のみ）、子ども部屋の有無の6属性をTable2.2.2にまとめた。

本研究の対象者については、一戸建て居住者（34.7%）と集合住宅居住者（65.3%）の割合がおよそ3:7となっており、集合住宅居住者の方が多い。所有の形態に関しては、持ち家（47.6%）賃貸住宅（52.4%）がほぼ半数ずつとなっていた。延べ床面積に関しては、平均71.60㎡（SD=39.81）であり、カテゴリー化をした場合、80㎡（およそ24坪）までで、全体の75%を占めていた。部屋の形式としては、ダイニングキッチン（DK）と4部屋というタイプが最も多く、全体の33.1%であった。集合住宅の居住者において、建物全体の高さや居住階を調べたところ、2階建て（低層住宅）と6階建て以上（高層住宅）がそれぞれ30%ずつ、3～5階建ての中層住宅が40%を占めていた。居住階については、2階あるいは3階の居住者が最も多かった（47.0%）。また、全体の60.0%が子ども部屋がある、または将来子ども部屋にする予定の部屋があると回答していた。

**Table2.2.2 2000年度データの住居特性**

		度数 (%)
1. 住居の形態		
一戸建て	372 (34.7)	
集合住宅	700 (65.3)	
2. 所有の形態		
持ち家	509 (47.6)	
賃貸	560 (52.4)	
3. 延べ床面積 (Mean =71.60m <sup>2</sup> , S.D. =39.81)		
~ 60m <sup>2</sup>	394 (44.8)	
~ 80m <sup>2</sup>	265 (30.1)	
~ 100m <sup>2</sup>	110 (12.5)	
100m <sup>2</sup> 以上	111 (12.6)	
4. 部屋の形式		
1K-2DK	190 (22.4)	
2LDK-3DK	223 (26.3)	
3LDK-4DK	280 (33.1)	
4LDK-5DK	101 (11.9)	
5LDK以上	53 (6.3)	
5. 居住階 (集合住宅のみ)		
1F	190 (28.4)	
2F-3F	314 (47.0)	
4F-5F	96 (14.4)	
6F以上	68 (10.2)	
6. 子ども部屋の有無		
ある	646 (60.0)	
ない	431 (40.0)	

## 2. 住環境に対する評価

因子分析により分類した評価項目および単独で使用する項目に対する回答をFigure1.2.1 からFigure1.2.3 にまとめた。住居と住居周辺環境に関するグラフは、全くあてはまらないとあまりあてはまらないを1グループ、ややあてはまる、あてはまると非常にあてはまるを1グループとして、百分比で示したものである。また、施設への利便性に関しては、ない、遠い、やや遠い、まあまあ近い、近いの3群にわけて、百分比で示した。各因子項目ごとに評価の分布を検討する。(各項目ごとにあてはまると回答した人の割合が少ない順に並べ替えてある。)

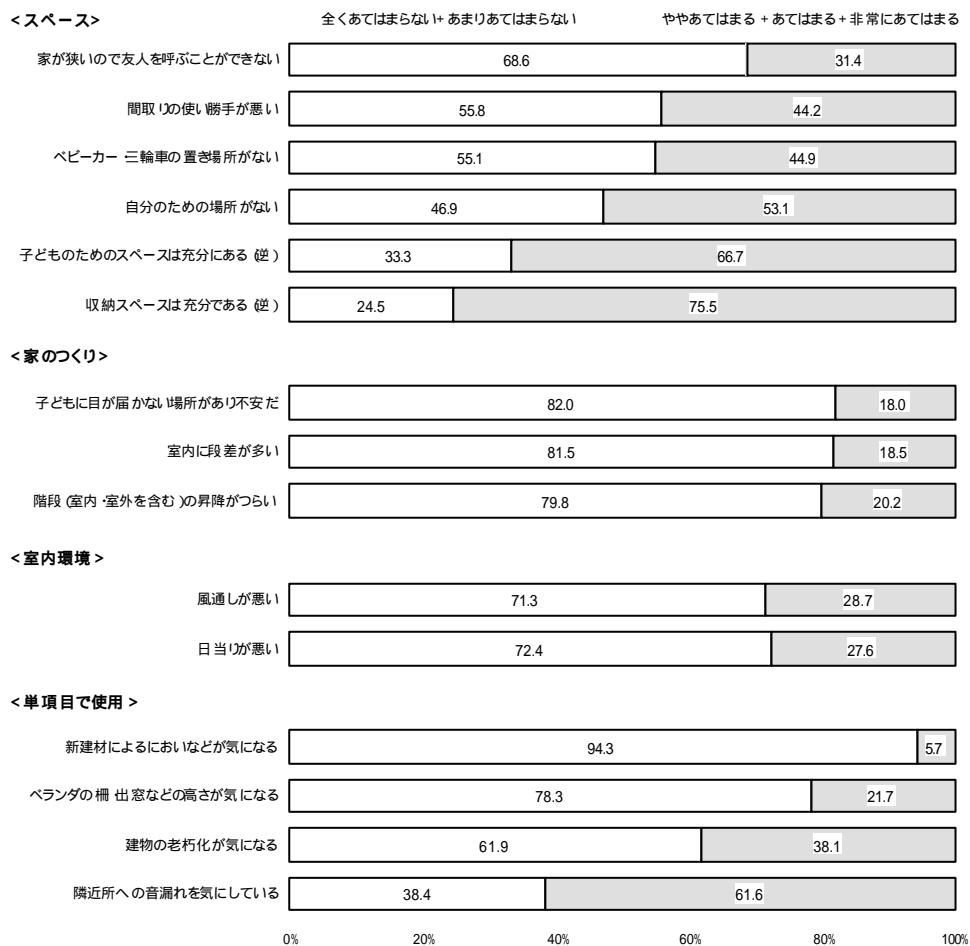


Figure2.2.1 住環境(住居)における困りごとに対する回答傾向(%)

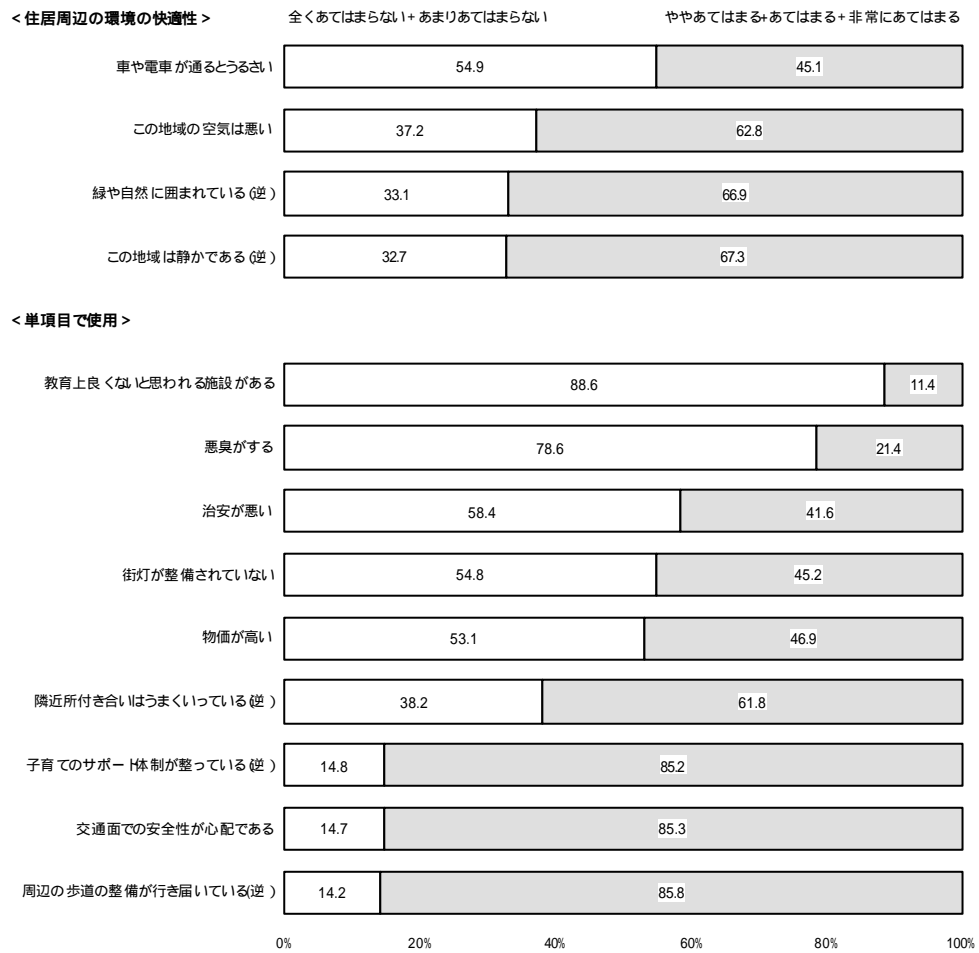


Figure2.2.2 住環境(住居周辺環境)における困りごとに対する回答傾向(%)

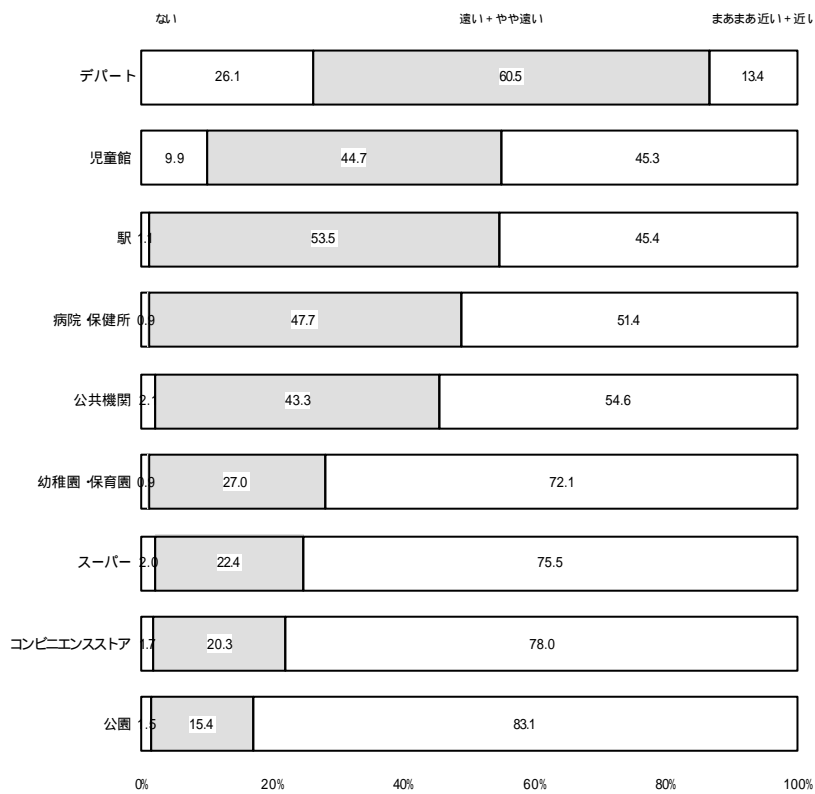


Figure2.2.3 施設への利便性に対する回答傾向(%)

以上のグラフに基づいて、各因子 項目ごとに評価の分布を検討する。

### (1) 住居に対する評価

#### ‘スペース’因子：

スペースに対する評価は、他の項目に比べて低い。自分のための場所がない(53.1%)、子どものためのスペースが充分ではない(66.7%)と感じている割合は過半数を超えていた。特に収納スペースに関しては、充分と感じている割合は低い(24.5%)。

#### ‘家のつくり’因子：

家の中で、子どもに目が届かない場所があって不安だと感じている割合は18.0%、室内に段差が多くて困っている割合は18.5%、階段の昇降がづらいと感じている割合は20.2%と、家のつくりのこのような側面に対して不満を感じている人は少ないことがわかった。

#### ‘室内環境’因子：

風通しが悪いと感じている割合は28.7%、日当たりが悪いと感じている割合は27.6%であり、このような室内の環境に関わる側面に対して、不満を感じている人は少ないことが示された。

#### 単項目(住居)：

新建材によるにおいが気になっている割合は5.7%とかなり少数であった。また、ベランダの高さなどが気になっている割合も21.7%とあまり多くはなかった。建物の老朽化が気になっている割合は38.1%であった。一方、経験している割合が高いのが、隣近所への音漏れ(61.6%)であった。

### (2) 住居周辺の環境に対する評価

#### ‘住居周辺環境の快適性’因子：

‘住居周辺環境の快適性’因子を構成している各項目については、‘車や電車が通るとうるさい’と感じている人は45.1%、地域の空気が悪いと感じている人は62.8%、緑や自然が少ないと感じている人は66.9%、地域は静かではないと感じている人が67.3%と、総じて評価が低く、



近隣環境の快適性に対しては不満を感じている人が多いことが示された。

#### 単項目 (住居周辺環境):

単独で使用する項目のうち、不満を感じている人の割合が特に多かったのは、子育てのサポート体制 (85.2%)、周辺の歩道の整備 (85.3%)、交通面での安全性 (85.8%)であった。また、隣近所付き合いについても、不満を感じている人が多かった (61.8%)。

#### 各施設の利便性:

各施設への利便性については、3パターンにわかれた。近くにあると感じている割合が多い施設のグループには、公園 (83.1%)、コンビニエンスストア (78.0%)、スーパー (75.5%)、および幼稚園 保育園 (72.1%)があった。近くにあると感じている人の割合が50%前後であったのが、公共機関 (54.6%)、病院 保健所 (51.4%)、駅 (45.4%)、児童館 (45.3%)であった。また、デパートが近くにあると回答していた人の割合は全体の13.4%であった。

### 3. 住居特性による評価の違い

次に、住居の形態、所有の形態、部屋の形式、居住階、延べ床面積などによって、住居に関する評価が異なるかを検討した。住居の形態と所有関係については、 $t$ 検定を用いて、延べ床面積、部屋の形式および居住階については、一元配置の分散分析を用いて分析した。結果を模式的にTable2.2.3に示した。

**Table2.2.3 住環境と住居特性の関係**

	住居						
	因子			単項目で使用			
	スペース	室内環境	家のつくり	建物の老朽化が気になる	新材によるにおいなどが気になる	隣近所への音漏れを気にしている	ベランダの柵・出窓などの高さが気になる
住居の形態							
所有の形態							
延べ床面積							
部屋の形式							
住居の階数							

p<.01 , p<.05

**(1) 住居の形態によるちがい**

住居の形態 (集合住宅 一戸建て住宅) によって、住居内の環境に対する評価に差が見られるかを、 $t$  検定を用いて検討した。その結果、「新建材によるにおいが気になる」( $t = -2.819, p < .01$ )、隣近所への音漏れを気にしている」( $t = -7.854, p < .01$ )、「ベランダの柵 出窓などの高さが気になる」( $t = -2.363, p < .05$ )の3項目と「スペース因子」( $t = -8.719, p < .01$ )に関しては、集合住宅の方が有意に評価が悪く、「家のつくり」因子 ( $t = 3.816, p < .01$ )、に関しては、一戸建て住宅の方が有意に評価が悪かった。

**(2) 所有の形態によるちがい**

所有の形態 (持ち家 賃貸住宅) によって、住居内の環境に対する評価に差が見られるかを、 $t$  検定を用いて検討した。その結果、「老朽化が気になる」( $t = -7.189, p < .01$ )、「ベランダの柵 出窓などの高さが気になる」( $t = -2.754, p < .01$ )、「スペース因子」( $t = -9.996, p < .01$ )と室内環境因子 ( $t = -3.636, p < .01$ )であり、全て賃貸住宅の方が評価が低かった。

**(3) 延べ床面積によるちがい**

延べ床面積によって、住居内の環境に対する評価に差が見られるかを、一元配置の分散分析を用いて検討した。延べ床面積は、前出の4カテゴリーを用いた。その結果、「建物の老朽化が気になる」( $F(3,870) = 27.185, p < .01$ )、「隣近所への音漏れを気にしている」( $F(3,869) = 15.494, p < .01$ )、「ベランダの柵 出窓などの高さが気になる」( $F(3,870) = 7.930, p < .01$ )、「スペース因子」( $F(3,862) = 78.171, p < .01$ )、および「室内環境因子」( $F(3,873) = 7.963, p < .01$ )の5つの側面において、延べ床面積による評価の差が認められた。全ての側面において、延べ床面積の広い群になるほど、評価は高くなっていった。さらに、カテゴリー化する前の連続変数の延べ床面積と住居に関する変数との間の Pearson の相関係数を求めたところ、「建物の老朽化が気になる」( $r = -.161, p < .01$ )、「隣近所への音漏れを気にしている」( $r = -.194, p < .01$ )、「ベランダの柵 出窓などの高さが気になる」( $r = -.120, p < .01$ )、「スペース因子」( $r = -.364, p < .01$ )と

‘室内環境’因子 ( $r = -.125, p < .01$ )との間に、有意な負の相関関係が見られ、広くなるほど評価が良くなることが示された。

#### (4) 部屋の形式によるちがい

部屋の形式 (= 部屋数) によって、住居内の環境に対する評価に差が見られるかを、一元配置の分散分析を用いて検討した。部屋の形式は、前出の5カテゴリーを用いた。その結果、建物の老朽化が気になる” ( $F(4,833) = 25.127, p < .01$ )、新建材によるにおいなどが気になる” ( $F(4,835) = 3.454, p < .01$ )、隣近所への音漏れを気にしている” ( $F(4,832) = 14.097, p < .01$ )、ベランダの柵 出窓などの高さが気になる” ( $F(4,833) = 2.704, p < .05$ )、‘スペース’因子 ( $F(4,823) = 52.119, p < .01$ )、‘家のつくり’因子 ( $F(4,828) = 4.494, p < .01$ ) および ‘室内環境’因子 ( $F(4,836) = 6.466, p < .01$ ) の住居内の全ての側面において、部屋の形式による評価の差が認められた。‘家のつくり’因子においては、最も部屋数の少ない1K~2DKと3LDK~4DKという2つの群が、他の3群よりも統計的には有意ではないが、評価が良いという結果になった。その他の側面については、部屋数の多い群になるほど、評価は高くなっていた。

#### (5) 集合住宅における居住階について

集合住宅において、居住階により住居内の環境に対する評価に差が見られるかを、一元配置の分散分析を用いて検討した。居住階は前出の4カテゴリーを用いた。その結果、建物の老朽化が気になる” ( $F(3,659) = 6.150, p < .01$ )、隣近所への音漏れを気にしている” ( $F(3,657) = 2.685, p < .05$ )、‘スペース’因子 ( $F(3,650) = 4.197, p < .01$ )、‘家のつくり’因子 ( $F(3,656) = 12.459, p < .01$ ) および ‘室内環境’因子 ( $F(3,659) = 18.352, p < .01$ ) の5側面について、居住階によって住居内の環境に対する評価が異なることが示された。居住階が高い方が評価が高い傾向にあった。しかし、家のつくりに関しては、1階の居住者と6階以上の居住者に比べて、2~5階の居住者の評価が低かった。

### 第3節 子育てをめぐる住環境の実態と評価 考察

本章の第1節と第2節において、1998年度データ、2000年度データ、それぞれにおいて、子育てをめぐる住環境の実態と評価について把握した。本節では、これらの結果に対する考察を行う。

#### 1. 住居特性

1998年度データでは、一戸建てと集合住宅の割合がほぼ半数ずつであったが、2000年度は、およそ3:7となっており、集合住宅居住者の方が多くなっていた。

1998年度データ、2000年度データともに、持ち家と賃貸住宅がほぼ半数ずつであった。これは、調査対象地域の公的調査の結果 (p. 25~26, Table1.2.1, 1.2.3)とあまり差はなかった。

延べ床面積は、1998年度の平均が77.18 m<sup>2</sup>、2000年度の平均が71.60 m<sup>2</sup>であり、いずれの場合も、調査対象地域の公的調査の結果よりもかなり広がった (p. 25~26, Table1.2.1, 1.2.3)。すなわち、物理的な広さだけを考えた場合、本研究の回答者の住宅は水準が高いといえよう。

この水準の高さは、「国の居住水準」との比較によっても裏づけされる。建設省が提示している最低居住水準は世帯人員が3人の場合は39 m<sup>2</sup>、4人の場合は50 m<sup>2</sup>、都市居住型の誘導居住水準 (水準向上のガイドライン、品質の高い住生活水準)は、それぞれ75 m<sup>2</sup>、91 m<sup>2</sup>となっている (中根, 2002)。本研究の回答者の平均値は最低居住水準を大幅に上回っており、さらに3人家族の場合、誘導居住水準と同程度の広さを確保できている。このことから、本研究の回答者の住居の水準の高さが推察される。

部屋の形式については、前出の都市居住型誘導居住水準では、夫婦+子ども1人、あるいは2人の場合、それぞれ2LDKあるいは3LDKとなっている (中根, 2002)。本研究の回答者においては、2LDK~4DKといったパターンの頻度が最も高く、夫婦+子ども1人~2人 (平均子ども数: 1998年度データ=1.96人、2000年度データ1.68人)といふ家族構成に適した部屋の形式であると考えられる。

居住階は2階あるいは3階といふ家庭が多かった。上層階は小さな子どもがいる場合には安

全について心配な面があること、価格、賃貸料が高いことなどから、あまり好まれないことが予測される。一方、集合住宅における1階は、専用の庭などがついている場合などがあり、好まれると予想されたが、プライバシー、防犯、湿気、音漏れなどの面から、小さな子どもがいる家庭は避けているものと考えられる。

## 2. 住環境に対する評価

### <住居>

住居の各側面に対する評価については、1998年度、2000年度のデータに共通して見られたのは、住居内のスペースに関わる問題に対する評価の低さである。育児環境に対する満足度を検討した松本(2000)の研究においても、「住居の間取りや広さ」については、満足度が低いことが示されている。矢郷(1997)の調査でも、子育て中の母親が住居に持つ不満として最も多いものが「狭さ」に関するものであり(64%)、中でも「ゆとりのスペースがない」(52%)、「物をしまふスペースがない」(42%)などの不満が多いという結果が得られている。

住宅を新築した人を対象に調査した結果(住宅金融公庫、2000)、以前の住居に納戸があった割合は22.3%、新築した住居に納戸がある割合は53.6%と2倍以上になっていたが、それにもかかわらず、新築した住居においてもまだ、収納に対する満足度は低く、収納できる場所が空間的に増えたとしても、まだまだ足りないと考えている人が多いことが示されている。本研究においても、収納に対する不満は強く、満足のいく収納空間を確保することは難しいことを示唆している。

また、同じ住宅金融公庫の調査(2000)において、自分のための空間(妻の専用個室)の所有率が3.0%から新築した住居では8.7%と約3倍に増加していることが報告されている。さらに、本研究の回答者のような、現在乳幼児を育てている親は、自分自身も子ども部屋を所有していた可能性が高い世代であると考えられるため、結婚後も自分の場所を求める傾向が強いと思われる。このようなことから、家で自分の時間を自分のために使いたい、そのための空間を持つことを希望している人が多いことが予想される。本研究の結果でも、自分のためのスペース

がないと感じている人は多く、同様の傾向が示唆されている。

一方、風通しや日当たりといった、室内環境に対する評価は両方のデータにおいて、満足度が高いことが示された。松本(2000)の調査においても、風通しや日当たりに対する満足度は高いことが明らかにされている。前出の住宅金融公庫の調査(2000)によると、この2つの要素に対する満足度は、他の住宅の基本要素に比べて高いことが示されている。また、横浜市で子育て世代を対象に行われた調査では、住宅および地域環境において「日当たり、通風が良い」の重視度が最も高いという結果が得られている(白石, 2002)。これは、住居を新築、あるいは選択する際、これらの要素は最重要視されることを示している。そして、このような要素を満たす住居に入居していると考えられるため、不満を感じている母親は少ないものと考えられる。

また、どちらのデータにおいても、建物の老朽化について心配している母親の割合は低かった。これはまだ家族が若いため、入居している住居もそれほど年数が経っていないためと考えられる。

#### <住居周辺環境>

近隣環境については、1998年度データは質問項目が少ないため、2000年度のデータを中心に考察を行う。

住居周辺環境の快適性については、評価が低かった。公害や騒音、緑の少なさは、都市部に住む人間の共通の不満であると考えられる。特に、子育て中の母親にとっては、子どもの健康にとっても重要な問題であるため、敏感になっているものと考えられる。同様の理由で、子育てのサポート体制、周辺の歩道の整備(ベビーカーを使って移動するときに不便を感じる、など)、交通面での安全性(交通量の激しい道路などに子どもが出て行ってしまいう危険性がある、など)についても、不満が高くなっていると思われる。

各施設への利便性については、近くにあると感じている施設が3つのパターンにわかれた。「近くにある」と回答した人が多かったグループは、子育てと密接な関係のある施設(公園、幼稚園、保育園)と主に「食」に関わると考えられる施設である。現在のようなライフステージにおいて住居を選択する際に、このような子育て期に必要な施設へのアクセスを重視している可能

性が示唆されるだろう。次は、近くにある」と回答した人が約半数ほどだったグループである。これらに含まれていたのは、病院、保健所、児童館、公共機関と駅である。これらのグループは子育て期においては、二次的な重要性を持つ施設であると考えられることができるだろう。デパートについては、近くに欲しいと思っている施設に関する項目作成のための自由記述回答が多かったため項目として採用した。しかし、これはあくまでも願望であり、実現している人は少ないことがわかった。

### 3. 住居特性による評価の違い

総じて、集合住宅や賃貸住宅の方が住環境に対して困っていると感じている人の割合が多いことが示された。

住居形態については、集合住宅の方で評価が悪かった項目は、集合住宅の特性をよく反映しているものとなった。集住という点において、隣近所への音漏れは一戸建てに比べて気を遣うと予測される。さらに、新建材やベランダ 柵の高さも、構造的な面から考えて、一戸建てよりも評価が悪くなるであろう。一方、一戸建てで評価が悪かった「家のつくり」については、平面に全てが配置されている集合住宅と異なり、上下移動が多くなる一戸建ての方が不便に感じられる。また、一戸建ての場合、段差がないプランは、集合住宅に比べて少ないことが予想される。

所有形態については、賃貸の方が全体的に住環境に対する評価が低いことが示された。賃貸の場合、分譲に比べて、仮の住居的な考え方もあり、細部まで居住者が納得して入居しているわけではないことが考えられるので、評価が低くなるものと推察される。また、持ち家であれば、不満、不便を感じる箇所については、手を加えられる可能性がある。つまり、不満を解消する手段があるということが、賃貸住宅に比べて、相対的に高い評価となる一つの要因であると考えられる。

延べ床面積と部屋の形式（部屋数）によって、住居に対する評価が異なるかを検討したところ、いずれの場合においても、住環境の状況が良いほど（広いほど、部屋数が多いほど）、困りごとが少ない（評価が高い）という結果が得られた。



集合住宅の居住階による住環境に対する評価の違いは、困りごとの数では違いが認められなかったが、質的な側面から検討した2000年度のデータにおいては違いが見られた。全体としては高層階の方が評価が高いという結果が得られた。また、家の作りに関しては、低層階と高層階の評価が低く、中層階の評価が高いことが示された。このような差が生じた理由の一つとして、階段の昇降という要因が考えられる。1階は階段を使用する必要がなく、一方、6階以上は確実にエレベーターが設置されている。2～5階では、住棟にエレベーターがなく、階段を使用しなくてはならない場合が考えられ、よって評価が低くなったものと思われる。

住居特性と子育て環境評価の関係においては、それぞれの特徴が反映された項目で評価がわかれた。全体として賃貸集合住宅、部屋数が少ない狭い住居の方が評価は低いですが、細かい部分においては、どちらの形態の場合でも、それぞれに不満な点があると言えるだろう。

#### 第4節 第2章のまとめ

本章では、子育て中の母親がおかれている住環境の現状と、子育てをめぐる住環境に対する評価について検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) 子育てをめぐる環境に対する評価は全体として高い。しかしながら、スペースに関わる住居の側面、近隣環境の快適性、子育てをする上で重要と思われる周辺環境の側面に対する評価は低い。
- (2) 近隣施設へのアクセスについては、子育てに関わる施設や食事に関わる施設へのアクセスの良い場所に住んでいることが示された。
- (3) 住居特性と住環境に対する評価については、一戸建て>集合住宅、持ち家>賃貸、広い>狭い、部屋数が多い>少ない、高層階>低層階とらように、左辺の属性の方が概して評価が高い。しかしながら、細かく検討していくと、それぞれの属性の特徴を反映した側面で評価がわかる場合もある。

次節では、このような住環境に対する評価と、母親の精神的な健康状態との関連性について検討する。

### 第3章 住環境と精神的健康

先行研究においては、住環境と精神的健康との関係について、以下の点が指摘されている。

- 住居特性によって精神的健康が影響を受ける場合がある
- 住環境において経験する困りごとの程度は、住環境から受けるストレスに相当すると考えられており、精神的健康に影響を及ぼしている(渡辺,1985a)可能性がある

以上のような先行研究からの示唆を踏まえ、本章では、子育てをめぐる住環境の各側面と母親の精神的健康とのかかわりを明らかにすることを目的としている。そのため、1998年度データと2000年度データを用いて、以下のように分析・考察を行っている。

- (1) 住居特性および子育てをめぐる住環境に対する評価と精神的健康との関連性を  $t$  検定・相関分析により検討する。(1998年度データ・2000年度データ使用)
- (2) 精神的健康に影響を及ぼしている住環境の側面を、重回帰分析を用いて検討する。(2000年度データ使用)

## 第1節 子育てをめぐる住環境と精神的健康(1)

### : 1998年度データの分析

#### §1. 方法

##### 1. データ

1998年度データを用いた(N=653)。

##### 2. 測度

###### (1) 住居特性

第2章第1節で使用した住居特性に関する属性(住居形態,所有形態,居住階,部屋の形式,延べ床面積)を用いた。

###### (2) 子育てをめぐる住環境に対する評価

第2章第1節で使用した住環境困りごと数を用いた。住居困りごと数(最大値=20),住居周辺の環境困りごと数(最大値=2)の2変数を設定した。

###### (3) 精神的健康度

八田 田尾 三戸 中迫(1993)を参考にして,気分を表す形容詞を18個用意した(Table3.1.1参照)。これらの形容詞は,周りの環境状態を反映する(Mackay, Cox, Burrous, & Lazzerini, 1978)とされているものである。これらに対して,1:ぜんぜんあてはまらない~5:ぴったりあてはまるまでの5件法で回答を求めた。主成分分析の結果,全項目が因子負荷量0.40以上で,一成分に収束した。これら18項目で全分散の47.3%を説明していた。18項目全体の内的整合性を表す信頼性係数を求めたところ, $\alpha = .933$ であり,高い内的一貫性が見られたので,これら18項目の素点を合計して,「精神的健康度」とした。得点が高いほど,精神的な健康状態が悪いことを意味する。

Table3.1.1 精神的健康度を表す形容詞の主成分分析結果

安らかな*	.680
穏やかな*	.691
やりきれない	.736
ほっとした*	.484
こちよい*	.671
心細い	.625
幸福な*	.628
ゆううつな	.772
暗い	.771
沈んだ	.787
情けない	.723
腹立たしい	.683
居心地が良い*	.642
重苦しい	.760
和やかな*	.658
いらだたしい	.696
深刻な	.622
快適な*	.684
因子負荷量二乗和	8.509
寄与率 (%)	47.273

注：\*は逆転項目

## §2. 結果

まず始めに、住居特性を表す各指標と精神的健康度との関連性を検討した。その結果、住居の形態 ( $t = -1.247, n.s.$ )、所有の形態 ( $t = -.687, n.s.$ ) によって精神的健康度に有意な差は認められなかった。さらに、部屋の形式 ( $F(4, 539) = 1.677, n.s.$ )、居住階 ( $F(3, 318) = 0.819, n.s.$ ) についても検討したところ、いずれの場合においても精神的健康度に有意な差は認められなかった。また、延べ床面積と精神的健康度との Pearson の相関係数を求めたところ ( $r = -.048, n.s.$ )、両者の間に有意な相関は認められなかった。以上のことから、本研究で使用している住環境の客観的の指標のいずれにもおいても、群間で精神的健康度に違いは認められなことが明らかとなった。

一方、子育てをめぐる住環境に対する評価（主観的評価）である住環境困りごと数と精神的健康度との間には、有意な正の相関が認められた（住居  $r = .203, p < .01$ 、住居周辺の環境  $r = .147, p < .01$ ）。

## §3. 考察

客観的指標、主観的指標と精神的健康度との関連性については、客観的指標においては、精神的健康度との有意な関連性が認められなかった。すなわち、住居の形態、所有の形態、部屋の形式、居住階や延べ床面積などの住居特性は、直接的には精神的健康度に影響を及ぼしていないことを示している。このような差が見られなかった理由としては、住居特性によって、精神的健康度に違いを生じさせるほど差がないことが想定される。

一方、主観的指標は精神的健康度と有意な関連性が認められた。第2章で検討したように、客観的指標と主観的指標の間には関係性が認められていることも考慮すると、住居のタイプや物理的な広さなどの住居特性は居住者の評価を介して間接的に、居住者の住居に対する評価は直接的に、精神的健康度に影響を及ぼしていると考えられる。

## 第2節 子育てをめぐる住環境と精神的健康(2)

### : 2000年度データの分析

#### §1 方法

##### 1. データ

2000年度データを用いた(N=1081)。

##### 2. 測度

###### (1) 住居特性

第2章第2節で使用した住居特性に関する属性(住居の形態,所有の形態,居住階,部屋の形式,延べ床面積)を用いた。

###### (2) 子育てをめぐる住環境に対する評価

第2章第2節で使用した住環境に対する評価項目(4因子+23項目)を用いた。

###### (3) 精神的健康度

精神的健康に関する項目を9個用意し(Table3.2.1参照),これらに対して,1:まったくない~5:よくあるまでの5件法でたずねた。主成分分析の結果,全項目が因子負荷量0.40以上で,一成分に収束した。これら9項目で全分散の59.9%を説明していた。9項目全体の内的整合性を表す信頼性係数を求めたところ, $\alpha = .915$ であり,高い内的一貫性が見られたので,これら9項目の素点を合計して,「精神的健康度」とした。得点が高いほど,精神的な健康状態が悪いことを意味する。

Table3.2.1 精神的健康度を表す項目の主成分分析結果

項目	I
くよくよ考える	.851
気持ちが落ち込むことがある	.845
何かをする時,うまくいかないのではないかと自信がない	.828
情緒が不安定になりやすい	.804
意欲がわかず,集中できない	.759
漠然とした不安を感じることもある	.759
何かを決めるとき,迷って決定できない	.750
周囲のことが気になる	.734
家事・仕事を負担に感じる	.607
因子負荷量二乗和	5.392
寄与率(%)	59.908

注：財団法人パブリックヘルスリサーチセンター “こころの健康づくり- ストレスの自己チェック-”を参考に作成



## §2. 結果

住居特性と精神的健康度との関係を検討したところ、住居形態 ( $t = -.533, n.s.$ )、所有形態 ( $t = -.990, n.s.$ )、居住階 ( $F(3, 656) = 1.91, n.s.$ )、部屋の形式 ( $F(4, 831) = 1.05, n.s.$ )のいずれにも群間で精神的健康度に有意な差は認められなかった。

さらに、「延べ床面積面積」と精神的健康度との Pearson の相関係数を求めたところ、両者の間に有意な相関は認められなかった ( $t = -.041, n.s.$ )。

次に、子育て環境評価の各変数と精神的健康度の相関関係を検討したところ (Table 3.2.2)、  
 ‘老朽化が気になる’ ( $t = .098, p < .01$ )、‘隣近所への音漏れが気になる’ ( $t = .208, p < .01$ )、柵  
 や出窓の高さが気になる’ ( $t = .124, p < .01$ )、‘隣近所付き合いはうまくいっている(逆)’  
 ( $t = .229, p < .01$ )、‘教育上良くない施設がある’ ( $t = .104, p < .01$ )、‘悪臭がする’ ( $t = .097, p < .01$ )、  
 ‘子育てのサポート体制は整っている(逆)’ ( $t = .154, p < .01$ )、‘スーパーへの利便性’ ( $t =  
 -.136, p < .01$ )、‘駅への利便性’ ( $t = -.061, p < .05$ )、‘公園への利便性’ ( $t = -.061, p < .05$ )、  
 ‘病院への利便性’ ( $t = -.108, p < .01$ )、‘デパートへの利便性’ ( $t = -.073, p < .05$ )、‘公共機関  
 への利便性’ ( $t = -.091, p < .01$ )、‘スペース’因子 ( $t = .254, p < .01$ )、‘家のつくり’因子 ( $t = .139,  
 p < .01$ )、‘住居周辺環境の快適さ’因子 ( $t = .111, p < .01$ )において有意な相関関係が見られた。

Table3.2.2 住環境の各変数と精神的健康度との相関

<b>&lt; 住居 &gt;</b>	
建物の老朽化が気になる	.098 **
新建材によるにおいなどが気になる	.059
隣近所への音漏れを気にしている	.208 **
ベランダの柵・出窓などの高さが気になる	.124 **
【スペース】	.254 **
【家のつくり】	.139 **
【室内環境】	.058
<b>&lt; 住居周辺環境 &gt;</b>	
交通面での安全性が心配である	.044
周辺の歩道の整備が行き届いている(逆)	.048
隣近所付き合いはうまくいっている(逆)	.229 **
教育上良くない施設がある	.104 **
街灯が整備されていない	.056
治安が悪い	.060
物価が高い	.053
悪臭がする	.097 **
子育てのサポート体制が整っている(逆)	.154 **
【住居周辺環境の快適性】	.111 **
<b>&lt; 利便性 &gt;</b>	
スーパー	-.136 **
駅	-.061 *
公園	-.061 *
病院・保健所	-.108 **
幼稚園・保育園	-.056
デパート	-.073 *
コンビニエンスストア	-.050
公共機関	-.091 **
児童館	-.023

\*\* p&lt;.01; \* p&lt;.05

### §3. 考察

住居特性によって精神的健康度には差が見られなかったことから、前節(第3章第1節)でも触れたように、本研究のデータにおいては住居の物理的な側面によって精神的健康度には違いが見られなことが示された。住居特性による差が見られなかった理由としては、先にも述べたように、住居特性によって、精神的健康度に差を生じさせるほど違いがなことが想定される。

一方、子育てをめぐる住環境に対する評価と精神的健康度との間には、ほぼ全ての評価との間に相関関係が見られた。このことは、住環境の中で子育てに関わるような側面に対して評価が低いことは、母親の精神的な健康状態に対して負の影響を及ぼすことを示していると言えるだろう。

以上の結果から、住居の物理的な特徴が精神的な健康状態に影響を及ぼしているのではなく、住居において経験する不満・困りごとによって、精神的な健康状態は左右されると言えるだろう。言うまでもなく、不満・困りごとは住居の物理的な特徴と強い関係がある場合もある。しかし、取捨選択モデル(Figure1.1.1)で示されているように、居住者の評価が介在することによって、精神的健康度に影響が及ぶものと考えられる。そこで、次節では、具体的に環境のどの側面が精神的健康度に影響を及ぼしているかを検討していくことにする。

### 第3節 精神的健康に影響を及ぼす住環境の側面

子育てをめぐる住環境に対する評価のどのような側面が精神的な健康状態に影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的としている。

#### §1. 方法

##### 1. データ

2000年度データを用いた ( $N=1081$ )。

##### 2. 測度

精神的健康度と、第3章第2節において精神的健康度と有意な相関関係にあった、“スペース因子”、“家のつくり”因子、“老朽化が気になる(老朽化)”、“隣近所への音漏れが気になる(音漏れ)”そして“ベランダの柵 出窓の高さが気になる(柵の高さ)”、住居周辺環境の快適さ因子(周辺環境)、“隣近所付き合いはうまくいっている(逆 隣近所付き合い)”、“教育上良いと思われる施設がある(良い施設)”、“悪臭がする(悪臭)”、“子育てのサポート体制が整っている(サポート体制)”、“スーパーへの利便性”、“駅への利便性”、“公園への利便性”、“病院 保健所への利便性”、“デパートへの利便性”、“公共施設への利便性”の各変数を用いた。

##### 3. 分析の方法

精神的健康度を基準変数に、子育てをめぐる住環境の評価に関する16変数を説明変数とする、重回帰分析を行なった。

#### §2. 結果

重回帰分析の結果をTable3.3.1に示す。その結果、1%水準で有意な重相関係数が得られた ( $R^2=.130$ )。標準偏回帰係数については、“スペース因子” ( $\beta=.148, p<.01$ )、隣近所への音漏れが気になる” ( $\beta=.133, p<.01$ )、隣近所付き合いはうまくいっている(逆)” ( $\beta=.153, p<.01$ )、子育てのサポート体制が整っている(逆)” ( $\beta=.071, p<.05$ )において、有意な正の値が示された。

Table3.3.1 精神的健康度を基準変数，住環境の評価を説明変数とした重回帰分析結果

老朽化	-.034
音漏れ	.133 **
柵の高さ	.016
【スペース】	.148 **
家のつくり	.062
隣近所付き合い	.153 **
良くない施設	.043
悪臭	.022
サポート体制	.071 *
【住居周辺環境】	.022
スパー	-.067
駅	.000
公園	-.023
病院・保健所	-.042
デパート	.006
公共施設	-.031

\*\*p<.01; \*p<.05

### §3. 考察

重回帰分析の結果から、母親の精神的健康度に影響を及ぼしているのは、住居の問題としては、スペースに関わる問題、子どもがたてる音に対する隣近所への気遣いであり、住居周辺環境の問題としては、隣近所との関係と子育てのサポート体制であった。これらの側面に対して不満が強いほど、精神的な健康状態が低下することが明らかとなった。

スペースの問題が精神的な健康状態に影響を及ぼしていたことは、全体としては「物理的空間が創り出す心理的空間、行動的空間による心理的圧迫感、行動的制約」(渡辺, 1985a)によるものと解釈できる。さらに、「スペース」因子の構成項目として、「自分(母親)のための場所がない」、「家が狭いので友人を呼べない」が含まれているが、第2章第3節で指摘したように、母親は自分自身のための空間を必要としていることから、それが確保できないことからくる心理的圧迫感が精神的な健康状態に影響を及ぼす可能性があることが示唆される。この結果は、「プライベート空間の確保は育児ストレス感を軽減する」としている白 吉田 菅原 片山 高江 広瀬 (1999) や「なわばい空間」を持っている主婦は持っていない主婦に比べて情緒的に安定し、不安感も低いとしている Omata (1995) の結果を支持するものと考えられる。さらに収納に関する問題については、第2章第3節で示した矢郷 (1997) の報告に加え、東京在住の子どものいる家庭の約6割が不満を感じており(東京都住宅局総務部住宅政策室, 1998b)、部屋に収納しきれなかったものがあふれ、部屋を広く使えない、部屋を動き回る時に収納しきれなかったものにぶつかる、ものを移動させないと別の作業ができなといったことが精神的な健康状態を低下させる原因となっていることが推察される。今起こっているのは、居住者による過密ではなく、モノによる過密が精神的な健康状態に影響を及ぼしていることだとも言えるだろう。

また、「スペース」因子には、「間取りの使い勝手の悪さ」という側面も含まれていた。使い勝手の悪い間取りの特徴は、混乱した動線であると考えられる。動線とは、住居内での人の動きを線で表したものであり、大まかに、起床から就寝までの動きを表す生活動線と家事に伴う動きを表す家事動線にわけられる。使い勝手の良い間取りとは、これらの動線が短く、複雑でないこと、家事動線と生活動線が交差しにくいこと、そして狭い場所に動線が集中しないことなどが挙げら

れる。長く、複雑で、異なる目的の動線と交差しているような動線計画の住宅では、様々な生活活動をスムーズに遂行することができなくなり、家事で忙しい母親にとっては心理的な負荷が強くなり、精神的な健康状態を悪くさせるものと考えられる。

住居の延べ床面積と精神的健康度の間には関係性が見られなかったことは、物理的な広さが精神的健康度と関係があるわけではなく、ことを示している(第3章第1.2節)。しかし、本節の分析で、住環境の要因の中でも、“スペース”といふ因子が精神的健康度に影響を及ぼしていることが示された。これは、空間は広ければよいというものではなく、機能(収納、自分の場所など)を持った空間、そして使いやすさを考えた空間計画が精神的な健康の維持のためには必要であることを示唆していると考えられるだろう。

また、騒音に対する気遣いや隣人との関係性も精神的健康度に影響を及ぼすことが示された。これらの問題点は、近隣関係に関わる重要なストレスであると考えられるだろう。矢郷(1997)は、近隣住民との関係の中で、母親が最も気を遣っていることを調査した結果、“こちらが出す音、声”や“子どもが外で騒ぐこと”であった。つまり、騒音の問題においては、聞く側の人間だけではなく、出す側が音を立てないよう気遣うことも、子育て期の母親にとっては心理的負荷が高いと考えられる。また、隣人との人間関係について山内(1993)は、近隣住民との関係のあり方は、日常生活のストレスとして大きな比重を占めているとしている。加えて、隣人が“うるさい”と感じる程度が、音を出す側と聞く側の人間(音源と聞き手)との間の心理的・社会的関係によって異なることを報告している(山内・山本・久田,1983)。つまり、音漏れに対する気遣いと隣人との関係性は、精神的健康に対して、相乗効果もあることが示唆される。

さらに、子育てサポート体制が母親の精神的な健康状態に影響を及ぼしていた。子育てに対する悩みを相談する窓口や母親サークルなど、子育てをサポートする資源が豊富にあり、気軽に利用できるような環境に住んでいる母親に比べて、これらの資源にアクセスするのが困難な母親とでは、精神的な負担が大きくなり、健康状態も悪くなるものと思われる。

重回帰分析により、母親の精神的健康度に影響を及ぼしている住環境の側面が4つ特定された。低年齢の子どもを育てている時期の母親は、子育てや家事、仕事に忙殺され、精神的・

肉体的・時間的に余裕がないと考えられる。そのような状況にある母親にとって、ここで示された住居内の問題や子育てに関わる住居周辺環境の問題に対して困ったり、悩んだりすることは、精神的な健康を維持する上でマイナスの影響を及ぼしていると言えるだろう。



#### 第4節 第3章のまとめ

本章では、住居特性(客観的指標)と子育てをめぐる住環境に対する評価(主観的指標)と精神的健康度との関係性を検討することを目的として、分析を行った。その結果、以下のようなことが明らかとなった。

- (1) 住居特性によって、精神的健康度に差は見られないが、子育てをめぐる住環境に対する評価とい主観的な指標は、精神的健康度に影響を及ぼしている。
- (2) 主観的評価の中でも、特に住居内のスペースに関連した問題や隣近所との関係、子育てに対するサポートが、精神的健康度に及ぼす影響力が強い。

## 第4章 住環境と子育てに対する意識

第3章では、子育てをめぐる住環境と精神的健康度との関係性について把握したが、この精神的健康度は、母親の子育てに対する意識に影響を及ぼしていることが推測される。

そこで本章では、子育てをめぐる住環境と子育てに対する意識との関係性を、精神的健康度の介在を想定して検討することを目的としている。

そのために、1998年度データと2000年度データに基づいて、以下のように分析・考察を行っている。

- (1) 住環境と子育てに対する意識との関係性を相関分析により検討する。
- (2) パス解析を用いて、住環境・精神的健康度・子育てに対する意識の因果関係を検討する。

## 第1節 子育てをめぐる住環境と子育てに対する意識(1)

### : 1998年度データの分析

#### §1. 方法

##### 1. データ

1998年度データを用いた(N=653).

##### 2. 測度

###### (1) 住環境

第3章で、住居特性は精神的健康度に直接影響を及ぼさず、住環境に対する評価を通して間接的に影響を及ぼしていることが示唆された。よって本章の分析では、住環境の測度として、評価のみを用いることとし、第3章第1節で使用した住環境困りごと数を用いた。本章では、住居困りごと数と住居周辺の環境困りごと数の2変数を合成して使用した(最大値=22)。

###### (2) 精神的健康度

第3章第1節で用いた精神的健康度を使用した。

###### (3) 子育てに対する意識

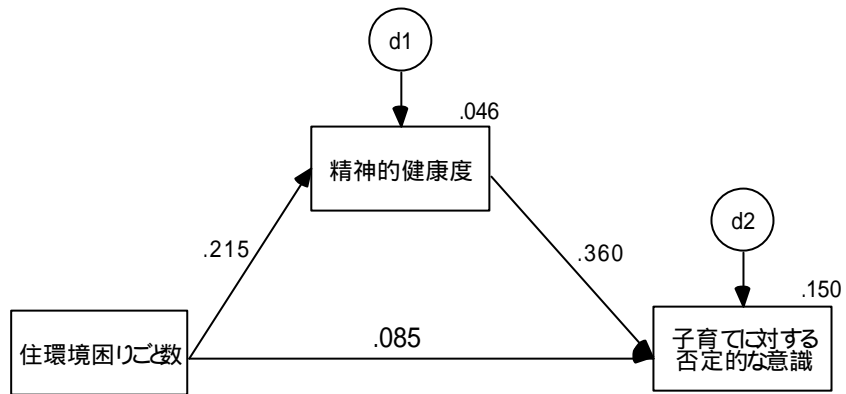
服部 原田(1991)などを参考に、子育てに対する煩わしさなどを表す5項目を設定し(逆転項目2項目を含む)、それに対して1「全くない」~5「よくある」までの5段階評定による回答を得た。これら5項目を用いて因子分析を行った。主因子法(Varimax回転)により因子の抽出を行ったところ、固有値1.0以上で2因子抽出され、この2因子で全体の分散の39.8%を説明していた。因子負荷をTable4.1.1に示す。第1因子は、「子育てに対する否定的な意識」に関する因子であると解釈した。第2因子は、「子育てに対する肯定的な感情」に関する因子と解釈した。内的整合性を表す係数は、第1因子は $=.668$ 、第2因子は $=.512$ であった。本研究では、仮説において、住環境から派生する困りごとなどが母親の精神的健康状態を低下させ、それが子育てに対する感情や意識を否定的にするとしているため、子育てに対する否定的な感情を表している第1因子のみを分析に使用する。第1因子の構成項目の素点の総和を「子育てに対する否定的な意識」の得点とした。

**Table4.1.1 子育てに対する意識の因子分析結果**

		平均値 (SD)	I	II
< 子育てに対する否定的な意識 >	= .668	9.55 (2.18)		
子育てをされていていららする			<u>.934</u>	.104
育児のことで心配なことがあり疲れる			<u>.507</u>	.105
子育てから解放されたいと思う			<u>.476</u>	.108
< 子育てに対する肯定的な意識 >	= .512	2.93 (1.20)		
子育てを楽しいと思う(逆)			.256	<u>.574</u>
子育てをすることで自分も成長していると思う(逆)			.012	<u>.450</u>
因子負荷量二乗和			1.550	.439
寄与率 (%)			30.992	8.774
累積寄与率 (%)			30.992	39.767

## §2. 結果

まず始めに、住環境困りごと数、精神的健康度、そして子育てに対する否定的な意識の3変数間のPearsonの相関係数を求めた。住環境困りごと数と子育てに対する否定的な意識の間には、正の相関関係が認められた( $r=.159, p<.01$ )。また、精神的健康度と子育てに対する否定的な意識の間にも、正の相関関係が認められた( $r=.378, p<.01$ )。ここで、住環境困りごと数と子育てに対する否定的な意識との関係性において、精神的健康度が介在変数として関わっているかを検討するために、精神的健康度を統制した偏相関係数を求めた。その結果、相関係数( $r=.090, p<.05$ )が減少しており、住環境困りごと数と子育てに対する否定的な意識との関係に、精神的健康度が介在していることが示された。さらに偏相関係数が5%水準で有意であったことから、住環境困りごと数は直接的にも間接的にも子育てに対する否定的な意識に影響を及ぼしていることが示唆された。このことを踏まえて、「住環境困りごと数」が「精神的健康度」に影響を及ぼし、その結果として「子育てに対する否定的な意識」が強くなるという3段階の因果連鎖を想定し、共分散構造分析によるパス解析を行った。結果をFigure4.1.1に示す。「住環境困りごと数」が「精神的健康度」を規定する標準化された因果係数は $\beta = .215 (p<.01)$ であり、住環境において経験する困りごとの多さは、精神的健康度の予測変数となっている。同時に、「住環境困りごと数」から「子育てに対する否定的な意識」の因果係数は、 $\beta = .085 (p<.05)$ であり、住環境で経験する困りごとの多さは、「子育てに対する否定的な意識」の程度に対して、影響力があることを示している。「精神的健康度」から「子育てに対する否定的な意識」への因果係数は、 $\beta = .360 (p<.01)$ となっており、精神的な健康状態が悪くなると、「子育てに対する否定的な意識」も強くなることを示している。さらに、「住環境困りごと数」の子育てに対する否定的な意識に対する直接効果と間接効果を計算したところ、直接効果 $= 0.084$ 、「精神的健康度」を介した間接効果 $= 0.077$ であり、直接効果のほうが若干ではあるが強いことが示された。



注：太字 =  $p < .01$   
 細字 =  $p < .05$   
 各変数の右上の数値は  $R^2$

**Figure4.1.1 住環境困りごと数・精神的健康度・  
 子育てに対する否定的な意識のパスダイヤグラム (N=608)**

### §3. 考察

まず第1に、住環境困りごと数と子育てに対する否定的な意識の関わりにおいて、精神的健康度を統制した偏相関係数を求めた結果から、住環境において経験する困りごとの多さは精神的健康度を介して子育てに対する否定的な意識に影響を及ぼしていることが示唆された。この結果をもとに、パス解析を行った結果、住環境において経験する困りごとの多さは、直接的にも間接的にも子育てに対する否定的な意識を強めることが明らかとなった。このことは、住環境において居住者が経験する様々な困りごとは、精神的な健康状態を悪くするストレスとなり子育てに対する否定的な意識に間接的に影響を及ぼすだけでなく、子育て中の母親にとっては、子育てに対する否定的な意識を強めるような直接的なストレスともなっていることを示していると考えられるだろう。

本節の分析から、住環境変数、精神的健康度、そして子育てに対する否定的な意識との関係性の概要を把握することができたといえよう。次節では、住環境のに関する質的な変数を用いて、この因果連鎖について詳しく検討する。

## 第2節 子育てをめぐる住環境と子育てに対する意識(2)

### : 2000年度データの分析

#### §1. 方法

##### 1. データ

2000年度データを用いた( $N=1081$ ).

##### 2. 測度

###### (1) 住環境

第2章第2節で得られた住環境に関する4因子と単項目(14項目)を用いた.

###### (2) 精神的健康度

第3章第2節で用いた精神的健康度を用いた.

###### (3) 子育てに対する意識

牧野(1982)による育児不安尺度項目などを参考に計10項目を設定した.具体的な項目は、「育児のために自分の好きなことができない」、自分一人で子供を育てていると圧迫感を感じる」などの10項目である.これらの項目に対して、1「まったくあてはまらない」~4「あてはまる」の4段階の評価で回答を求めた.これら10項目に対して、主因子法(Varimax回転)で因子分析を行ったところ、固有値1.0以上で2因子が抽出された.共通性が極端に低い1項目を除き、再び因子分析を行った結果、2因子が抽出された.この2因子で、全体の分散の40.7%を表していた.因子分析の結果をTable4.2.1に示す.第1因子は育児によって自身の活動が制限されることに関連した項目に負荷が高いので、「子育てによる活動制限感」(7項目)と解釈した(以下、「活動制限感」とする).これは子育てに対する否定的な感情の一側面であると考えられる.第2因子は育児を肯定的に捉えている項目に負荷が高いため、「育児肯定感」(2項目)とした.各因子の係数はそれぞれ  $=.791$  と  $=.680$  であり、内的整合性が確認できた.本研究では、仮説において、住環境から派生する困りごとなどが母親の精神的健康状態を低下させ、それが子育てに対する感情や意識を否定的にするとしているため、子育てに対する否定的な感情を表している.第1因子のみを分析に使用する.第1因子の構成項目の素点の総和を子育てによ



る活動制限感 (以後, “活動制限感”とする)の得点とした。なお, 点数が高くなるほど, 活動制限感が強くなることを表している。この活動制限感と精神的健康度との Pearson の相関係数を求めたところ, 正の相関関係が認められた ( $r=.515, p<.01$ )。

**Table4.2.1 子育てに対する意識の因子分析結果**

	平均値 (SD)	I	II
<b>&lt; 子育てによる活動制限感 &gt;</b> =.791	15.73 (3.97)		
自分一人で子どもを育てていると圧迫感を感じる		<u>.621</u>	.145
子どものことが煩わしくていららしてしまう		<u>.602</u>	.374
子どもの相手ばかりで, 大人との会話がしたいと思う		<u>.601</u>	.067
毎日毎日, 同じことの繰り返ししかしていないと思う		<u>.571</u>	.175
育児を面倒臭く思う		<u>.540</u>	.372
育児のために自分の好きなことができない		<u>.526</u>	.106
自分は社会から取り残されているような気がする		.504	.044
<b>&lt; 育児肯定感 &gt;</b> =.680	3.44 (1.27)		
育児は楽しい (逆)		.152	<u>.854</u>
育児をすることによって自分も成長していると思う (逆)		.096	<u>.546</u>
因子負荷量二乗和		2.856	.808
寄与率 (%)		31.728	8.976
累積寄与率 (%)		31.728	40.704

## §2. 結果

住環境に関する各変数と活動制限感の各変数間のPearsonの相関係数を求め、5%水準以上で有意であったもののみ Table4.2.2 に示している。さらに、住環境と活動制限感の関連における精神的健康度の影響を調べるため、各住環境変数と活動制限感の相関が、精神的健康度の影響を統制した場合、どう変化するかを偏相関係数を求めて検討した。この結果から、活動制限感は、住居および住居周辺環境の評価とは正の相関を、各施設への利便性とは負の相関を示していることが確認できた。また、各住環境変数と活動制限感との関係において、精神的健康度を統制した場合、全体的に相関関係が弱くなっており、精神的健康度が介在変数として関係していることが示唆された。しかしながら、「隣近所への音漏れが気になる」、「柵や出窓の高さが気になる」、「隣近所付き合いはうまくいっている(逆)」、「物価が高い」、「スペース'因子」、「家のつくり'因子」、「室内環境'因子」、「病院 保健所への近さ」、「幼稚園 保育園への近さ」などは、精神的健康度を統制しても母親の活動制限感と有意な相関関係にあった。

Table4.2 住環境の変数と活動制限感の相関・偏相関係数

	活動制限感	除精神的健康度
新建材	.068 *	.044
音漏れ	.204 **	.117 **
柵の高さ	.141 **	.088 **
隣近所付合い	.170 **	.068 *
物価が高い	.080 **	.059 *
悪臭	.074 **	.028
育児サポート	.119 **	.044
【スペース】	.200 **	.080 *
【家のつくり】	.172 **	.114 **
【室内環境】	.082 **	.065 *
【周辺環境】	.071 *	.011
スーパー	-.101 **	-.031
公園	-.077 *	-.046
病院・保健所	-.111 **	-.072 *
幼稚園	-.073 *	-.062 *
デパート	-.068 *	-.037

\*\* p&lt;.01, \* p&lt;.05

次に、活動制限感に対する住環境変数の影響をさらに詳しく検討するために、相関係数および偏相関係数を基に第4章第1節で示されたモデルを想定して、共分散構造分析によるパス解析を行った。住環境変数として分析に使用した項目は、以下の基準により選定した。

重回帰分析(第2章第3節)により精神的健康度の予測変数として有意であった変数

“隣近所への音漏れ”, “スペース”因子, “隣近所付き合いはうまくいっている(逆)”,

“子育てのサポート体制が整っている”の4変数

活動制限感と精神的健康度を統制変数として求めた偏相関係数が有意であったものの

うち他の変数と強い相関を持たない、あるいは概念が重複しない変数

“物価が高い”とい変数

“柵や出窓の高さが気になる”は、“スペース”因子と( $r = .331, p < .01$ ), “家のつくり”因子は、“スペース”因子と( $r = .237, p < .01$ ), “室内環境”因子は“スペース”因子( $r = .273, p < .01$ )とそれぞれ相関が高かったために、住環境変数として投入しなかった。また、“病院・保健所への近さ”と“幼稚園・保育園への近さ”については、“子育てのサポート体制が整っている”とい変数と概念的に重複する部分がある(相関はそれぞれ  $r = -.136, r = -.178, p < .01$ )と判断し、分析に投入しなかった。

さらに、活動制限感との偏相関係数が有意であった住環境変数については、精神的健康度だけでなく、活動制限感にも直接パスを引いた。また、各住環境変数間で相関関係にあるものは、共分散を設定した。

分析を行った結果、パスの中には、小さなパス係数も見られたため、より適切なモデルへの修正を行った。同じ反説であっても、より単純なモデルによって関係性を説明したい場合、ワルト検定を利用する(山本・小野寺, 1999)。ワルト検定量(C.R.)が標準正規分布の両側5%以内、すなわち絶対値で1.96以上であれば、検定は統計的に有意になり、そのパスは意味があるということになる。このモデルのワルト検定の結果をTable4.2.3に示す。

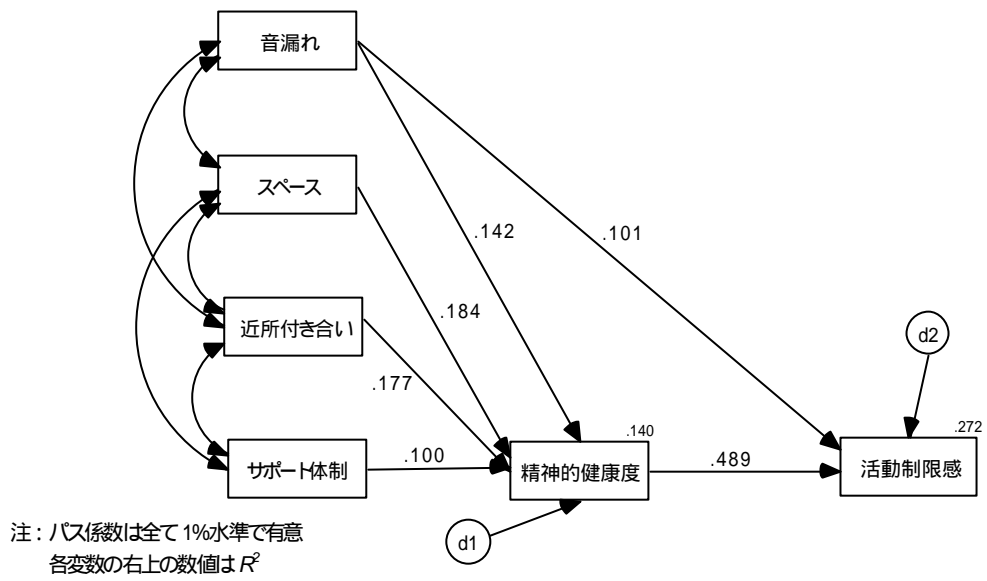
**Table4.2.3 各パスの推定値とワルト検定結果**

	推定値	標準誤差	検定統計量 (C.R.)
サポート体制 精神的健康度	0.776	0.233	3.330
音漏れ 精神的健康度	0.860	0.189	4.542
スペース 精神的健康度	0.272	0.046	5.866
近所付き合い 精神的健康度	1.351	0.228	5.918
音漏れ 活動制限感	0.274	0.093	2.963
スペース 活動制限感	0.030	0.023	1.293
近所付き合い 活動制限感	0.179	0.111	1.610
物価 活動制限感	0.039	0.114	0.346
精神的健康度 活動制限感	0.249	0.015	16.452

(網掛け部分 :1回目の分析においてワルト検定量が有意ではなかったパス)

Table4.2.3 から、「スペース」(C.R = 1.293) , 「隣近所付き合い」(C.R = 1.610) , 「物価」(C.R = 0.346)から活動制限感へ引いたパスが有意ではないことが示された。狩野 (1997)によると、一つのパスを削除しただけで、残りのパスが有意になる可能性があるため、全ての有意でないパスを一度に削除して分析を行うことは適切ではないとされている。よって、C.R.の値が最も小さなパスを1つ削除し、分析を実行し、その結果、有意ではないパスがまだある場合は、またその中で最小の C.R.を持つパスを削除して分析を実行するという方法を、最終的に有意ではないパスがなくなるまで繰り返すという方法をとった。そこで、まず始めに、C.R.の値が最も小さかった「物価」から「活動制限感」へのパスを削除した(これは、このモデルから「物価」という変数を削除することになる)。再計算したところ、「スペース」(C.R = 0.371) , 「隣近所付き合い」(C.R = 1.603)から活動制限感へのパスが有意ではなかったため、このパスを C.R. の値が小さい順に段階的に削除していったところ、最終的に C.R.の値が有意ではないパスがなくなった。その結果を示したのがFigure4.2.1 である。GFI = .998 , AGFI = .990 であり共に0.9以上の値が得られ、RMSEA = .023 と0.05 以下であったことから、妥当性を備えたモデルであるといえよう。住環境に関する各変数が精神的健康度への標準化された因果係数は、音漏れ： = .142 , スペース： = .184 , 近所付き合い： = .177 , サポート体制： = .100 であり、全て 1%水準で有意であった。また、活動制限感に直接影響を及ぼしているのは、音漏れ ( = .101 ,  $p < .01$ )と精神的健康度 ( = .489 ,  $p < .01$ )であった。説明率は、精神的健康度が  $R^2 = .140$  , 活動制限感が  $R^2 = .272$  であった。

「音漏れ」については、活動制限感に対して、直接効果 (0.101)と間接効果 (0.069)も持っているが、直接効果の方が強いことが示された (Appendix4-2-1 参照)。



Chi-square = 6.117 df = 4 p = .191  
 GFI = .998  
 AGFI = .990  
 RMSEA = .023

**Figure4.2.1 住環境変数・精神的健康度・活動制限感のパスダイヤグラム (N=1017)**

### §3. 考察

本節では、住環境変数、精神的健康度、子育てに対する否定的な意識について、第4章第1節で示された因果モデルを想定し、検討を行った。

まず始めに、住環境変数と活動制限感との相関関係において、精神的健康度を統制すると、相関係数が減少した。このことから住環境と活動制限感との関係性において、精神的健康度が介在変数として存在していることが明らかとなった。すなわち、住環境によって引き起こされた心理的負荷が、母親の精神的健康度に影響を及ぼし、それが子育てに対する意識を増悪させるという、仮定していた因果関係が存在する可能性が示された。一方、精神的健康度を統制しても、「隣近所への音漏れが気になる」、「柵や出窓の高さが気になる」、「隣近所付き合いはうまくいっている(逆)」、「物価が高い」、「スペース'因子」、「家のつくり'因子」、「室内環境'因子」、「病院 保健所への近さ」、「幼稚園 保育園への近さ」といった住環境変数は、子育てによる活動制限感と有意な相関関係を持っていた。これらの変数のうち、「物価が高い」、「室内環境'因子」そして「幼稚園 保育園への近さ」は、精神的健康度とは相関関係にないため、子育てによる活動制限感に直接影響を及ぼしている変数であると考えられるだろう。その他の「隣近所への音漏れが気になる」、「柵や出窓の高さが気になる」、「隣近所付き合いはうまくいっている(逆)」、「スペース'因子」、「家のつくり'因子」は、精神的健康度とも有意な相関関係にあるため、直接的にも間接的にも子育てによる活動制限感に影響を及ぼしていることが示唆された。

これらの結果を踏まえ、共分散構造分析により、住環境変数、精神的健康度、そして子育てによる活動制限感の3段階の因果関係を検討し、最終的に採用したモデルから、自身の住居において、住居内のスペースに関する側面に対して不満があり、隣近所に音が漏れるのではないかと気にするといったことでストレスを感じており、さらに隣近所付き合いにも気を遣い、子育てについて相談できる場所やサポートを受けられる場所が居住している地域では充実していないといった状況の母親は、精神的な健康状態が悪くなり、ひいては子育てによって自身の活動が制限されるとより強く感じるといことが読み取れる。また、音漏れに対する気遣いは、精神的健康度を介さず、直接的にも活動制限感に影響を及ぼしていた。



“物価が高い”から活動制限感へのパスの妥当性は得られず、モデルからこの変数自体を削除する結果となった。相関 偏相関分析においては、活動制限感と有意な関係にあったが、分析に投入した他の変数に比べると、活動制限感に及ぼす影響は強くないことが示唆された。また、“スペース”と隣近所付き合い”に関しては、活動制限感へ直接パスを引いたが、このパスの妥当性も示されなかった。物価の場合と同様に、想定したモデルにおいては、これらの変数からの直接のパスは影響力のあるものではないと考えられるだろう。

モデルの中で妥当性が示された変数のうち、スペース、隣近所への音漏れに対する気遣い、隣近所との人間関係、子育てのサポート体制は、精神的健康度に影響を及ぼす側面として、既に第2章第3節で考察を行った。これらの項目は、精神的健康度を介すことによって、子育てによる活動制限感に影響を及ぼしていることが示唆された。

音漏れについては、子育てによる活動制限感に対して、直接的にも、精神的健康度を介して間接的にも影響を及ぼしていること、そして直接的な影響の方が強いことが明らかとなった。直接的な影響は、子どもが立てる音に対して気を遣わなくてはならないことが、その根源である子どもや子育てに対する否定的な感情に反映されてしまうことの表れであると解釈できるだろう。つまり、「子どもがいるからこんなに気を遣わなくてはならない」といったように、子どもがいることや子育てのせいにしてしまうと、可能性が考えられる。また、子どもに対して音を立てないよう注意することが、翻って自分自身の行動を制限しているように感じてしまうことも推測される。さらに、前出の横浜市の調査において、近隣とのトラブルに関するインタビューで「近隣への遠慮から母親と子どもの密室育児が助長される」とい意見が母親から出されていることから(白石, 2002)、子どもがたてる音に対して近隣に気を遣うあまり、子どもを外で遊ばせにくくなり、閉鎖された空間での密室育児になってしまい、母親の活動制限感が高められるという構図が想定できると考えられる。このような直接的な影響の方が間接的な影響より強いことが示されたのは、音漏れに対する気遣いは母親にとって、「子どもを育てること」と密接な関係がある問題であるためだと推察される。

### 第3節 第4章のまとめ

本章では、住環境と子育てに対する否定的な意識との関係性を、精神的健康度の介在を想定して検討することを目的として、分析を行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) 住環境から受けるストレスが増大すると、精神的な面での健康状態が悪化し、ひいては子育てに対する否定的な意識も強くなるという、想定していた単方向の因果関係が確認できた。
- (2) さらに、精神的健康度を介さず、子育てによる活動制限感に対して直接効果を持つ住環境の側面（隣近所への音漏れに対する気遣い）もあることがわかった。

次章では、この因果モデルが子どもとの関わりに関する養育態度、そして子ども自身への影響まで連鎖していくかについて検討を行う。

## 第5章 住環境と養育態度との関係，子どもへの影響の検討

第3・4章では，住環境，精神的健康度そして子育てに対する否定的な意識の関係性について把握したが，本章では母親の子どもに対する養育態度と住環境の関係（因果連鎖）について検討する。さらに，住環境と子どもとの関係性が，仮定した段階的な因果プロセスによって説明できるかということについても一部のデータを用いて分析する。

そこで本章は，住環境と養育態度との関係性を，精神的健康度および子育てに対する否定的な意識の介在を想定して検討すること，そしてこの因果関係が子どもに及ぼす影響を検討することを目的としている。

そのために，1998年度データと2000年度データに基づいて，以下のように分析・考察を行っている。

- (1) 住環境と養育態度との関係性を相関分析により検討し，さらこの関係性における精神的健康度および子育てに対する否定的な意識の影響を把握する。
- (2) 住環境・精神的健康度・子育てに対する否定的な意識・養育態度の因果関係をパス解析により検討する。
- (3) 住環境から養育態度への因果連鎖について，その影響が子ども（問題行動傾向）に及んでいるかについて，パス解析により検討する。

## 第1節 子育てをめぐる住環境と養育態度（1）

### ：1998年度データの分析

#### §1. 方法

##### 1. データ

1998年度データを用いた (N=653)。

##### 2. 測度

###### (1) 住環境

第4章第1節で使用した住環境困りごと数を用いた。

###### (2) 精神的健康度

第3章第1節で用いた精神的健康度を用いた。

###### (3) 子育てに対する意識

第4章第1節で用いた子育てに対する否定的な意識を用いた。

###### (4) 養育態度

服部 原田 (1991)などを参考に、不適切な養育態度を表す4項目を設定し、それに対して1:全くない～5:よくあるまでの段階評定による回答を得た。これら4項目を用いて主成分分析を行ったところ、1成分に収束した。この1成分で全体の分散の62.1%を説明していた。主成分分析の結果をTable5.1.1に示す。これら4項目の素点を合計して、「不適切な養育態度」得点とした ( $r = .795$ )。なお、点数が高くなるほど、養育態度が不適切になることを表している。

**Table5.1.1 不適切な養育態度の主成分分析結果**

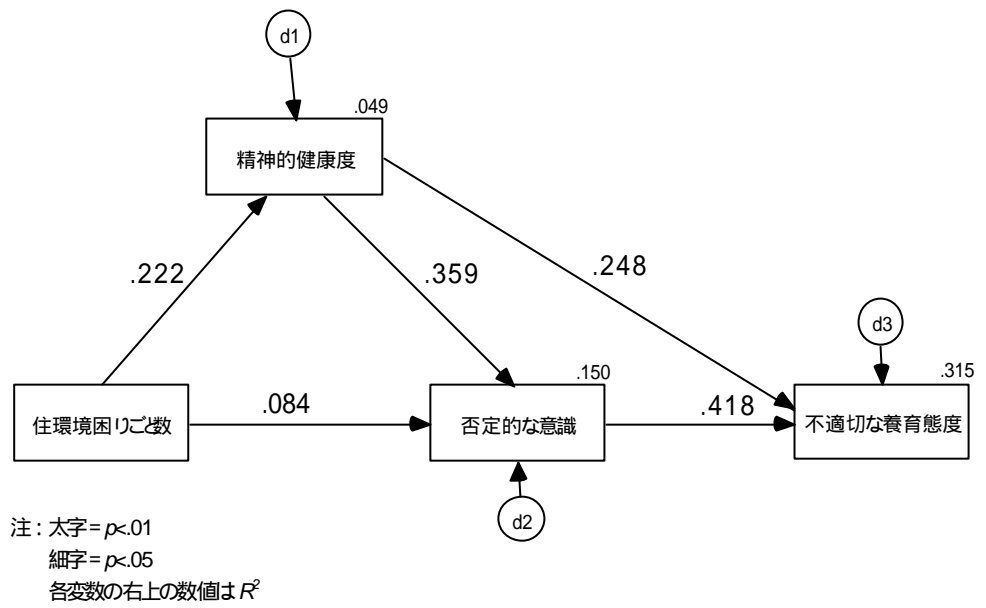
項目	I
その時の感情にまかせて子どもを叱る	.840
子どもに対して腹を立てたり,かんしゃくをおこす	.818
子どもが同じことをしているのに,ある時は叱り, ある時は見逃したりする	.764
子どもの欠点ばかりが目につく	.724
因子負荷量二乗和	2.484
寄与率 (%)	62.092

## §2. 結果

まず始めに，住環境困りごと数，精神的健康度，子育てに対する否定的な意識と，不適切な養育態度の間の Pearson の相関係数を求めた。住環境困りごと数と不適切な養育態度の間には，正の相関関係が認められた ( $r=.132, p<.01$ )。さらに，不適切な養育態度は，精神的健康度 ( $r=.405, p<.01$ )，子育てに対する否定的な意識 ( $r=.502, p<.01$ ) との間にも，有意な正の相関関係を示した。つまり，住環境に関する困りごとが多いことや，精神的な健康状態が悪いこと，そして子育てに対する否定的な意識が強いほど，養育態度が不適切になることを示している。ここで，住環境困りごと数と不適切な養育態度との関係性において，精神的健康度と子育てに対する否定的な意識が介在変数として関わっているかを検討するために，精神的健康度と子育てに対する否定的な感情を統制した偏相関係数を求めた。その結果，相関係数 ( $r=.006, n.s.$ ) が減少しており，住環境困りごと数と不適切な養育態度との関係に，精神的健康度と子育てに対する否定的な意識が介在していることが示された。さらに偏相関係数が有意ではなかったことから，住環境困りごと数は精神的健康度と子育てに対する否定的な意識を介在することによってのみ，相関関係が示されることがわかった。また，精神的健康度と不適切な養育態度との関係性において，子育てに対する否定的な意識を統制した偏相関係数を求めたところ，子育てに対する否定的な意識の影響を除いてもまだ，精神的健康度は不適切な養育態度と有意な正の相関があることが示された ( $r=.267, p<.01$ )。

第3章第1節において検討した，住環境困りごと数，精神的健康度，そして子育てに対する否定的な意識の3変数間の関係性と，本節において検討した不適切な養育態度との関係性についての検討結果を総合して因果関係を仮定し，共分散構造分析によるパス解析を行った。住環境困りごと数が精神的な健康状態を低下させることによって子育てに対する否定的な意識が強くなり，最終的に不適切な養育態度に影響を及ぼすという因果関係を仮定し，共分散構造分析によるパス解析を行った。結果をFigure5.1.1に示す。パス解析の結果，住環境困りごと数は，精神的健康度や子育てに対する否定的な意識を通して，不適切な養育態度に影響を及ぼしていることが示された。まず第一の因果連鎖としては，住環境困りごと数が多いことによって精神

的な健康状態が悪化し(  $\beta = .222, p < .01$  ),そのような母親の状態によって,子どもに対する態度が不適切なものになる(  $\beta = .248, p < .01$  )というルートである.この因果連鎖による住環境困りごと数の不適切な養育態度に対する間接効果は 0.055 となる.次の因果連鎖は,住環境困りごと数が多いことによって,精神的な健康状態が悪化し,それが母親の子育てに対する意識を否定的なものにし(  $\beta = .359, p < .01$  ),その結果として不適切な養育態度を引き起こすというルートである(  $\beta = .418, p < .01$  ).この因果連鎖による間接効果は 0.033 となる.最後の因果連鎖は,住環境困りごと数が多いことによって,母親の子育てに対する意識が否定的なものになり(  $\beta = .084, p < .05$  ),よって養育態度が不適切になってしまう(  $\beta = .418, p < .01$  )というルートである.この因果連鎖による間接効果は 0.035 となる(Appendix5-1-1 参照).以上のように,住環境は3つのルートによって,不適切な養育態度に影響を及ぼしており,その総合効果は,3つのルートを合計した0.124となる.また各被説明変数の説明率は,精神的健康度が  $R^2 = .049$ ,子育てに対する否定的な意識が  $R^2 = .150$ ,不適切な養育態度が  $R^2 = .315$  であった.



**Figure5.1.1 住環境の変数・精神的健康度・子育てに対する意識・不適切な養育態度のパスダイヤグラム (N=602)**



### §3. 考察

パス解析の結果から、住環境における困りごとの程度は、母親の精神的健康度や子育てに対する否定的な意識を介して、不適切な養育態度に影響を及ぼしていることが明らかとなった。このことは、住環境に対する困りごとや不満は、不適切な養育態度の直接的な原因とはなっていないが、母親の精神的な健康状態を悪化させたり、子育てに対する否定的な感情を増長させたりすることによって、子どもに対する不適切な態度を生じさせる一因となっていることを示していると言える。

本節では、住環境の変数として困りごとの数という量的な変数を用いて検討を行った。その結果、以上に述べたような因果連鎖が示された。次節では、住環境の変数として詳細な変数を用いることによって、質的に検討した場合も、このモデルが支持されるかについて検討していく。

## 第2節 子育てをめぐる住環境と養育態度（2）

### ：2000年度データの分析

#### §1. 方法

##### 1. データ

2000年度データを用いた (N=1081)。

##### 2. 測度

###### (1) 住環境

第2章第2節で得られた住環境に関する4因子と単項目(14項目)を用いた。

###### (2) 精神的健康度

第3章第2節で用いた精神的健康度を用いた。

###### (3) 子育てに対する意識

第4章第2節で用いた子育てによる活動制限感を用いた。

###### (4) 養育態度

**暖かい養育態度：**養育態度の測定方法として、本研究では、信頼性・妥当性の検討、精神医学的研究も数多く行なわれ、現在では世界的に広く使われている親子関係指標である(竹内，1999)，Parental Bonding Instrument (PBI) (Parker, 1979)を自分の子どもに対する態度を測るように変えたもの(菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井，1999)を用いた。これら全15項目に対して、1：まったくあてはまらない～4：あてはまるの4段階での回答を求めた。Parker, Tupling, and Brown (1979)は、養育態度として暖かい養育態度を表している“Care”と子どもに対する干渉を表している“Protection”の2因子を設定しているが、先行研究から、前者の“Care”は安定した構造を持つが、後者の“Protection”は、当初想定されていた1因子構造ではなく、2因子に分かれてしまう場合もあり、構造が不安定であることが指摘されている(成田・佐藤・平野・西岡・坂戸・上原・伊藤・笠原，1998)。そこで本研究では、安定した結果の得られている因子「暖かい養育態度 (“Care”)」に属する8項目(暖かく優しい声で話しかけている、「ほめてあげていない」(逆転項目)など)を分析に使用した。これらの8項目に対して、主成分分析を行ったところ、固有値

1.0以上で1成分に集約した。これら8項目で全分散の49.1%を説明している。内的整合性を表す係数は  $r = .849$ であった。暖かい養育態度を示すほど、高得点になるように各項目の素点を換算し、8項目の得点を単純加算した合成得点を、養育態度を測定する尺度とした。主成分分析の結果をTable 5.2.1に示す。

**Table5.2.1 暖かい養育態度の主成分分析結果**

項目	
ちゃんに優しく接している	.811
ちゃんによく微笑みかけている	.806
ちゃんに色々なことを話しかけるのを喜んでいる	.745
ちゃんに対して暖かく優しい声で話しかけている	.724
ちゃんの気持ちに理解を示している	.698
ちゃんに対して冷たい(逆)	.628
ちゃんをほめてあげていない(逆)	.585
ちゃんが必要なことや望んでいることに理解を示していない(逆)	.568
因子負荷量二乗和	3.932
寄与率(%)	49.148

## §2. 結果

まず始めに，住環境に関する変数と暖かい養育態度の間の Pearson の相関係数を求めた。Table 5.2.2 (p.106) は，5%水準以上で有意であったもの示している。暖かい養育態度と住環境に関する変数との間には負の相関関係が認められた（新建材  $r = -.067, p < .05$ ；音漏れ  $r = -.083, p < .01$ ；隣近所付き合い  $r = -.190, p < .01$ ；教育上良くない施設  $r = -.077, p < .05$ ；治安が悪い  $r = -.085, p < .01$ ；悪臭がする  $r = -.115, p < .01$ ；スペース  $r = -.089, p < .05$ ）。また，各施設への利便性とは正の相関関係が見られた（スーパー  $r = .068, p < .05$ ；駅  $r = .087, p < .01$ ；病院  $r = .089, p < .01$ ；幼稚園 保育園  $r = .079, p < .05$ ；コンビニエンスストア  $r = .071, p < .05$ ）。しかし，交通面での安全性に関しては，正の相関関係（ $r = .072, p < .05$ ）を示しており，安全性が確保されていないほど，養育態度が暖かくなることを示している。さらに，精神的健康度（ $r = -.216, p < .01$ ）および活動制限感（ $r = -.348, p < .01$ ）とは負の相関関係があり，精神的な健康状態が悪い，子育てによる活動制限感を強く感じているほど，子どもに対して暖かい態度で接することができなくなることを示されている。

ここで，住環境の各変数と暖かい養育態度との関係性において，精神的健康度と活動制限感が介在変数として関わっているかを検討するために，精神的健康度と活動制限感を統制した偏相関係数を求めた。その結果，全体的に相関関係が弱くなっており，住環境評価と暖かい養育態度とのかわりにおいて，精神的健康度と活動制限感が介在している可能性があることが明らかとなった。偏相関係数が有意ではなくなったものに関しては，住環境評価は精神的健康度と活動制限感を介して暖かい養育態度と相関関係にあるものと考えられる。一方，精神的健康度と活動制限感を統制した後も，“交通面での安全性”，“隣近所付き合い”，“治安が悪い”，“悪臭”，“駅への近さ”は精神的健康度と活動制限感を介さずに直接的にも不適切な養育態度に影響を及ぼしている可能性が明らかとなった。これらの結果を踏まえて，住環境困りごと数が精神的健康度を低下させることによって活動制限感が増加し，最終的に不適切な養育態度に影響を及ぼすという因果関係を仮定し，共分散構造分析によるパス解析を行った。分析に投入した住環境変数は，以下の基準によって選定した。

第3章第2節のパス解析により精神的健康度および子育てによる活動制限感の予測変数として有意であった変数

‘隣近所への音漏れを気にしている’，‘スペース因子’，‘隣近所付き合いはうまくいっている(逆)’，‘子育てのサポート体制が整っている’の4変数

活動制限感と精神的健康度を統制変数として求めた偏相関係数が有意であったものの方他の住環境変数と強い相関を持たない強い相関を持っている場合には，偏相関係数が大きいもの，あるいは理論的に意味のあるもの

‘交通面での安全性’，‘治安が悪い’，‘駅への近さ’の3変数

‘悪臭’は，‘治安が悪い’と相関があり( $r = .295, p < .01$ )，理論的に‘治安が悪い’とい変数の方が意味があると判断し‘悪臭’は分析から除外した。また，‘コンビニエンスストアの近さ’は，‘駅への近さ’と( $r = .402, p < .01$ )強い相関があるため，分析には使用しなかった。

さらに，‘交通面での安全性’，‘治安が悪い’は，精神的健康度とも活動制限感とも相関関係にはなかったため，これらの変数へ直接パスは引かなかった。また，‘駅への近さ’は精神的健康度と相関関係にあったが，重回帰分析で精神的健康度を予測する変数とはならなかったため，これについてもパスを引かなかった。また，各住環境変数間で相関関係にあるものは，共分散を設定した。

共分散構造分析による分析の結果，ワルト検定によって，有意ではないパスはなかったため，修正は行わず，現行モデルを採用した(Figure 5.2.1)。その結果，GFI = .993，AGFI = .983であり共に0.9以上の値が得られ，RMSEA = .024と0.05以下であったことから，妥当性を備えたモデルであるといえよう。前節までのモデルで使用していた住環境変数(音漏れ，スペース，隣近所付き合い，子育てサポート体制)は，精神的健康度および活動制限感を介して養育態度に影響を及ぼしていることが示された。活動制限感から暖かい養育態度への標準化された因果係数は  $\beta = -.322 (p < .01)$ であった。一方，‘交通面での安全性’( $\beta = .086, p < .01$ )，‘治安’( $\beta = -.082, p < .01$ )，そして‘駅への近さ’( $\beta = .083, p < .01$ )の3変数については，精神的健康度や活動制限感を經由せず，直接暖かい養育態度に影響を及ぼしていた。さらに，‘隣近所付

き合い'は，暖かい養育態度に対して，間接的な影響 (- 0.029) だけではなく，直接的にも影響を及ぼしていることが明らかとなった ( $\beta = -.132, p < .01$ )。また各被説明変数の説明率は，精神的健康度が  $R^2 = .142$ ，活動制限感が  $R^2 = .271$ ，不適切な養育態度が  $R^2 = .150$  であった。

**Table5.2.2 住環境の変数と暖かい養育態度の相関・偏相関係数**

	暖かい養育態度	除精神的健康度・活動制限感
新建材	-.067 *	-.052
音漏れ	-.083 **	-.009
交通面での安全性	.072 *	.068 *
隣近所付き合い	-.190 **	-.135 **
教育上良くない施設	-.077 *	-.057
治安が悪い	-.085 **	-.077 *
悪臭	-.115 **	-.077 *
スペース	-.089 *	-.020
スーパー	.068 *	.044
駅	.087 **	.082 **
病院・保健所	.089 **	.060
幼稚園・保育園	.079 *	.054
コンビニエンスストア	.071 *	.066 *
精神的健康度	-.216 **	
活動制限感	-.348 **	

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

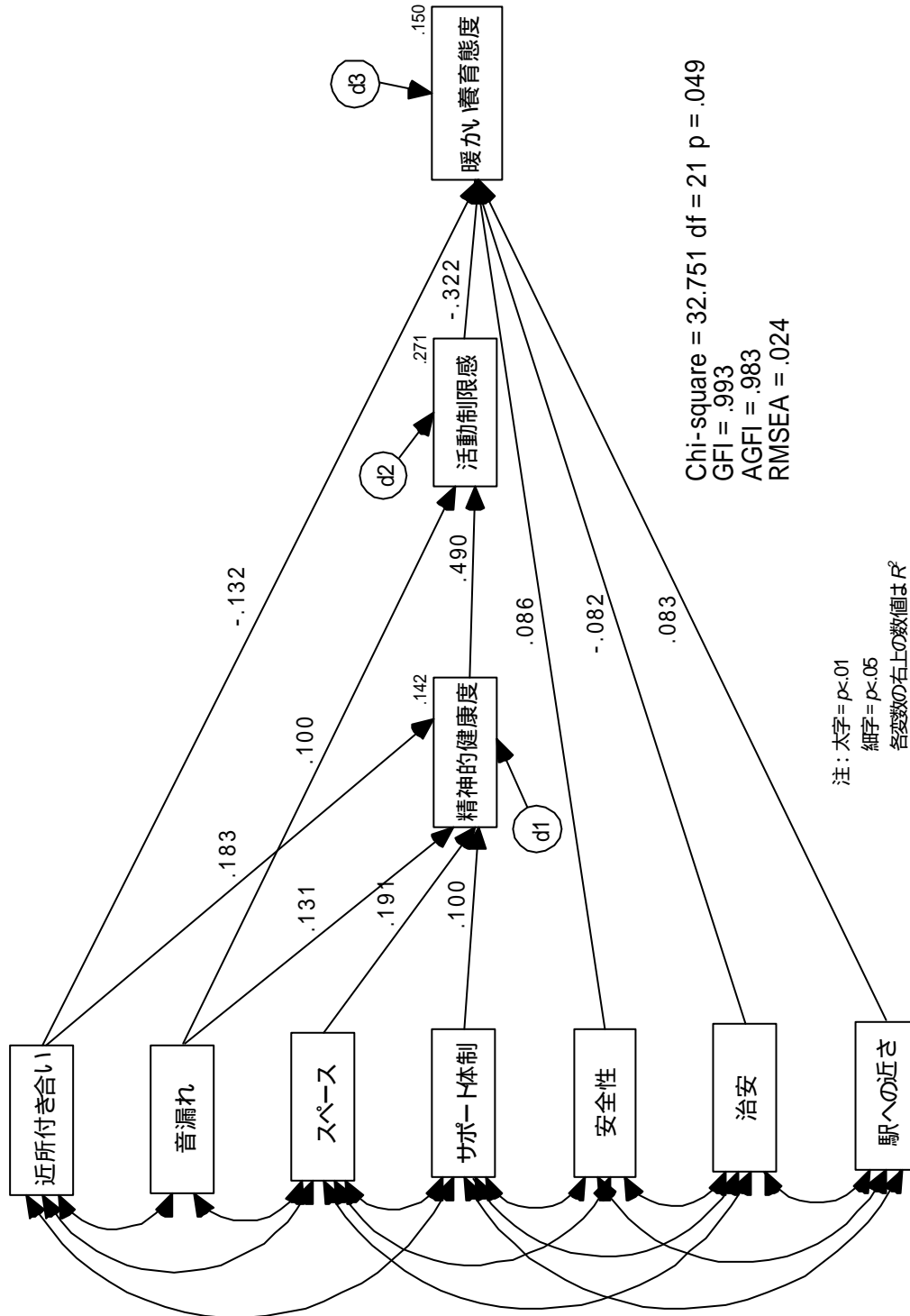


Figure5.2.1 住環境の変数・精神的健康度・活動制限感・暖かい養育態度のパスダイアグラム(N=988)

### §3. 考察

本節では、これまで検討してきた住環境に対して困りごとがあると、精神的な健康状態が悪化し、子育てによる活動制限感を強く感じるようになる」とい因果連鎖が、子どもに対する養育態度にまで影響を及ぼしているかを検討した。その結果、仮説は支持され、住環境の諸側面に対する不満は、母親の精神的健康度や子育てに対する否定的な意識を通して、子どもとの関係性に影響を及ぼしていることが示された。すなわち、住環境の影響により増長した活動制限感によって、母親が子どもに対して暖かい気持ちで接することができなくなることが明らかとなった。一方、「交通面での安全性」、「治安」や「駅への近さ」といった住居周辺環境の側面に対する不満は、精神的健康度や子育てによる活動制限感を介さず直接的に養育態度の暖かさに影響を与えていた。これは、養育態度とい子どもとの関係性が加わったことで、子育てをめぐる住環境にとって重要な側面が広がったと解釈することもできるだろう。

「交通面での安全性が心配である」という項目は、暖かい養育態度に正の影響を与えていた。これは、安全性が心配であるような住環境に住んでいるほど、養育態度が暖かくなる、つまりより養育的になることを示している。安全性が心配であるほど、よ子どもに目を配り、子どものことをよく気をつけるようになるため、結果として暖かい態度で子どもに接するようになると考えられる。しかし、「治安が悪い」という項目は、暖かい養育態度と負の影響関係にあった。治安が悪いほど、養育態度の暖かさが低くなることを意味しており、交通面での安全性とは、逆の結果となっている。安全性とい側面は、両項目に共通するものであると考えられるが、交通状況と治安とは、母親にとって異なる反応を引き出すものであることが予測される。交通面での安全性に対する心配は、親が目を配り注意をすることで多少は改善されると考えられる。しかしながら、治安に対して不安を抱くことが、子どもに対して暖かい態度で接することができなくなる一つの要因であるといらことに関しては、今回の分析では適切な解釈をすることができない。子育て中の母親にとってはどちらの側面も重要であると考えられるので、この点については今後より詳しく検討していく必要があるだろう。最後に、「駅への近さ」については、駅が近いほど子どもに暖かい接することができるという結果であった。これは子どもを連れての移動などを考えた場合、



駅に近い方が体力的にも余裕ができるということが，子どもとの関係性に影響を与えていると考えられる。つまり，駅への利便性は，精神的な負担より身体的な負担の方が大きいと推察される。この点に関しても，今後検討すべきであると思われる。

最後に，隣近所付き合いに関しては，精神的健康度を介しての影響だけではなく，暖かい養育態度に対して直接影響を及ぼしていることが示された。これは，隣近所との付き合いがうまくいっていれば，子どもに対しても暖かい気持ちで接することができることを表している。子育てに対して理解がある隣人に囲まれて生活していれば，子どもがいることで気を遣うといったことが少なくなり，自然と余裕を持って子どもと接することができるようになるのではないかと考えられる。

以上，本節の分析結果について考察してきたが，総括すると，住環境の諸側面が精神的健康度や子育てに対する活動制限感を通して，子どもとの関係性に影響を及ぼしているとした仮説モデルは支持されたとと言えるだろう。また一方で，養育態度に直接影響を及ぼしている住環境の側面もあり，それは主に住居周辺環境に関わることであることが示された。

次節では，この因果モデルが子どもにまで影響を及ぼしているかについて検討する。

### 第3節 住環境が子どもに及ぼす影響～母親の影響を介して

#### §1. 方法

##### 1. データ

2000年度データのうち，子どもに関する変数が含まれているデータのみを用いた (N=889)。

##### 2. 測度

###### (1) 住環境

第2章第2節で得られた住環境に関する4因子と単項目(14項目)を用いた。

###### (2) 精神的健康度

第3章第2節で用いた精神的健康度を用いた。

###### (3) 子育てに対する意識

第4章第2節で用いた子育てによる活動制限感を用いた。

###### (4) 養育態度

第5章第2節で用いた暖かい養育態度を用いた。

###### (5) 子どもの変数

本研究では，子どもに関する指標として，子どもの問題行動に着目した。菅原・吉田・片山・止高江・広瀬(1999)を参考に，子どもが示す困った行動特徴を表す15の項目を設定した。これらの項目に対して，1:まったくあてはまらない～4:よくあてはまるまでの4段階評定による回答を得た。15項目に対して，因子分析(主因子法，Varimax回転)を行ったところ(Table5.3.1参照)，2因子が抽出され，この2因子で全分散の43.8%を説明していた。

第1因子，“いうことをきかない”，“わがまま”，“かんしゃくを起こしやすい”など，頑固さ，衝動性などを表す項目から構成されていた。これは子どもの問題行動の類型の一つである Externalizing (外在的な問題行動 (Achenbach & Edelbrock, 1978)) が持つ特徴と類似していると考えられる。Externalizing な問題行動は，攻撃性や反社会性および注意の散漫さを特徴としており，衝動が強く，そのコントロールが脆弱であるところから，統制不全型の問題行動と分類されている(デビン・ニール，1998)が，第1因子はその萌芽的傾向を表しているものと考えられ

るだろう。

第2因子は，“友だちよりも私と遊びたがる”，“いつも私にくっついて離れないことが多い”など，子どもが回答者（母親）から離れることに対する不安を表している項目から構成されていた。この因子は，母親への密着，依存の程度が示されているものと考えられる。

そこで，第1因子を，“衝動的・非統制的な行動特徴”，第2因子を“依存的な行動特徴”と解釈した。各因子の内的整合性を表す係数を求めたところ，衝動的・非統制的な行動特徴は  $= .856$ ，依存的な行動特徴は  $= .828$  と高い整合性が得られた。各因子を構成する項目の素点を合計して，“衝動的・非統制的な行動特徴”得点，“依存的な行動特徴”得点とした。なお，点数が高くなるほど，それぞれの問題行動傾向が強くなることを表している。

**Table 5.3.1 子どもの問題行動傾向の因子分析結果**

	平均値(SD)	I	II
<衝動的な行動特徴> = .856	18.53 (4.88)		
いうことをきかない		<u>.768</u>	.118
わかまま		<u>.751</u>	.126
かんしゃくをおこしやすい		<u>.660</u>	.210
気が散りやすい		<u>.625</u>	.126
あきっぽい		<u>.580</u>	.136
ちょっとしたことで激しく泣く		<u>.579</u>	.282
一度くずるとなだめにくい		<u>.565</u>	.220
らんぼうだ		<u>.542</u>	.155
<依存的な行動特徴> = .828	13.72 (4.04)		
私がいなくなると機嫌が悪くなり,泣き続けたり時には怒ったりする		.133	<u>.744</u>
私と離れると,非常に気が動転する		.149	<u>.736</u>
友だちよりも私と遊びたがる		.086	<u>.687</u>
いつも私にくっついて,離れないことが多い		.222	<u>.608</u>
友だちのなかで一緒に遊ばせようとしても,なかなか入れない		.172	<u>.600</u>
保育園の行事などの場面で,常に私の姿を目で追っている		.218	.525
私が忙しかったり,誰かと話していると邪魔をする		.367	<u>.413</u>
因子負荷量二乗和		3.573	3.004
寄与率(%)		23.822	20.027
累積寄与率(%)		23.822	43.849

### 3. 解析の手順

まず始めに，子どもの問題行動傾向と住環境に関する各変数との相関係数を求め，さらに介入変数（精神的健康度，活動制限感，暖かい養育態度）を統制した偏相関係数を求め，因果モデルの最終従属変数として，子どもの問題行動傾向を想定することが可能であるか検討する．その点を確認した後，共分散構造分析を用いて，因果モデル（Figure5.3.1 参照）の検証を行っていく．

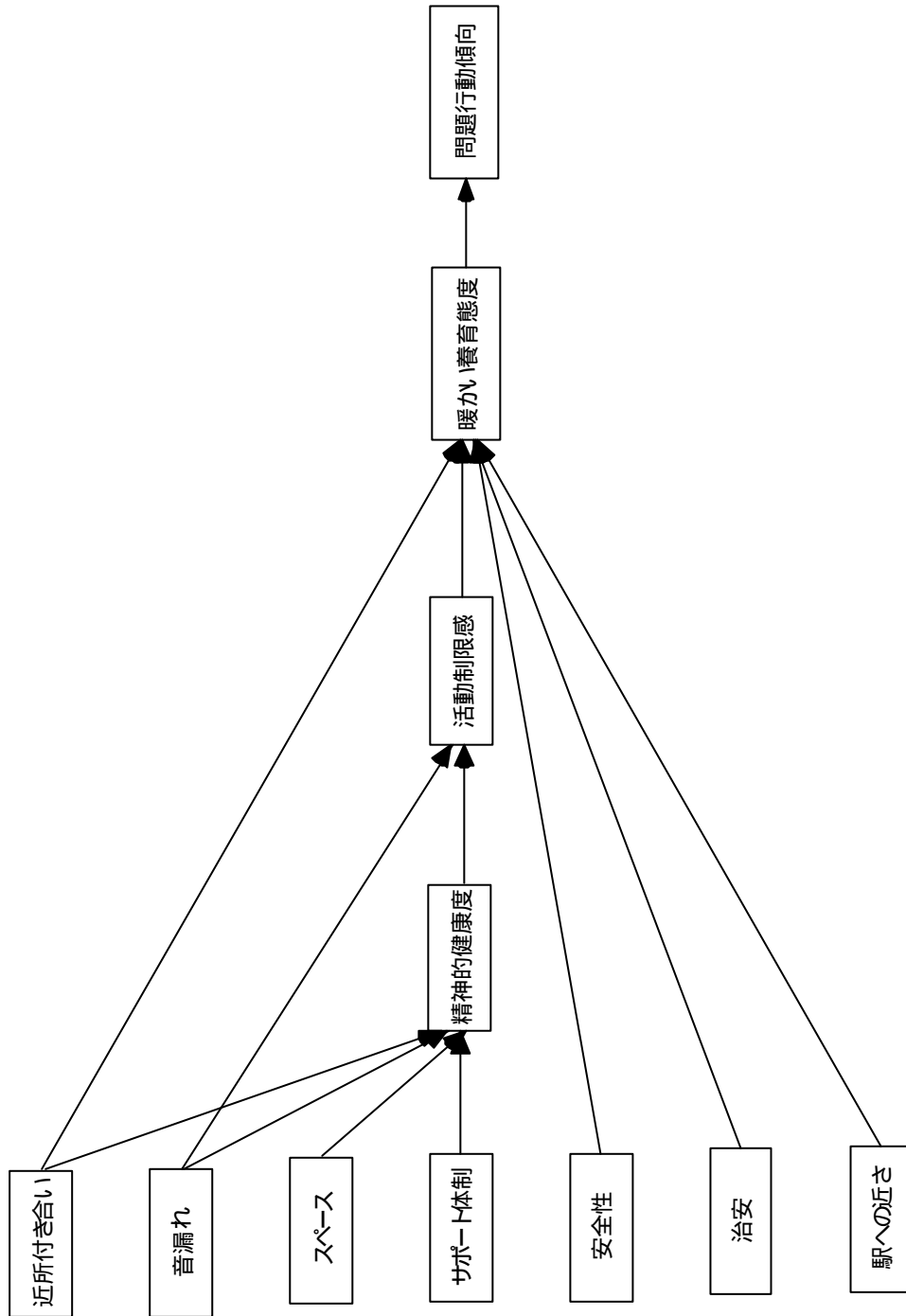


Figure5.3.1 住環境から問題行動傾向までの因果連鎖を示したパスダイヤグラム

## §2. 結果

まず，衝動的・非統制的な行動特徴，依存的な行動特徴と住環境に関する変数，母親の精神的健康度，子育てによる活動制限感，そして暖かい養育態度との相関係数を求めた。さらに住環境に関する変数については，関係のある変数の影響を排除した偏相関係数を求めた。これらの結果をまとめてTable5.3.2.1とTable5.3.2.2に示す。

**Table5.3.2.1 衝動的・非統制的な行動特徴と各変数との相関・偏相関係数**

	相関係数	偏相関係数	統制変数
音漏れ	.125 **	.028	精神的健康度・活動制限感
スペース	.122 **	.050	精神的健康度
駅の近さ	-.060		
安全性	-.004		
隣近所付き合い	.160 **	.049	精神的健康度・活動制限感・暖かい養育態度
治安	.065		
サポート体制	.063		
精神的健康度	.275 **	.117 **	活動制限感・暖かい養育態度
活動制限感	.343 **	.262 **	暖かい養育態度
暖かい養育態度	-.306 **		

\*\*p<.01; \*p<.05

**Table5.3.2.2 依存的な行動特徴と各変数との相関・偏相関係数**

	相関係数	偏相関係数	統制変数
音漏れ	.127 **	.066	精神的健康度・活動制限感
スペース	.098 **	.065	精神的健康度
駅の近さ	-.058		
安全性	-.002		
隣近所付き合い	.072 *	.011	精神的健康度・活動制限感・暖かい養育態度
治安	.051		
サポート体制	-.003		
精神的健康度	.135 **	-.020	活動制限感・暖かい養育態度
活動制限感	.272 **	.247 **	暖かい養育態度
暖かい養育態度	-.106 **		

\*\*p<.01; \*p<.05



衝動的・非統制的な行動特徴は，住環境に関する変数の“スペース”因子 ( $r = .122, p < .01$ )，隣近所への音漏れの心配 ( $r = .125, p < .01$ )，そして隣近所付き合い ( $r = .160, p < .01$ )と正の相関があり，これらの住環境の側面に対して母親が困っていたり，不満を感じていたりするほど，子どもの衝動的・非統制的な行動特徴が強くなることが示された。さらに，これらの住環境に関する変数と子どもの行動特徴との関係性において，精神的健康度，子育てによる活動制限感，そして暖かい養育態度の関わりを統制した結果，全ての偏相関係数は有意ではなくなった。これは，住環境と子どもの行動傾向の関係性には，母親の状態が介在していることを示している。

同様の分析を依存的な行動特徴に対しても行った。その結果，住環境に関する変数の“スペース”因子 ( $r = .098, p < .01$ )，隣近所への音漏れの心配 ( $r = .127, p < .01$ )，そして隣近所付き合い ( $r = .072, p < .05$ )と正の相関があった。さらに精神的健康度，子育てによる活動制限感，そして暖かい養育態度の影響を排除すると，すべての相関係数は統計的に有意ではなくなり，住環境の影響は，母親を介して依存的な行動特徴に影響を及ぼしていることが示された。以上の結果から，これまで検討してきたモデルの最終従属変数として，子どもの行動特徴の傾向を想定することが可能であることが示唆された。そこで，第5章第2節で検証したモデルの最終従属変数に子どもの衝動的な行動特徴，および依存的な行動特徴を加えて，共分散構造分析により，モデルの検証を行った。

計算の結果，各適合度指標の値が良好ではなかったため，このモデルを理論的に妥当な範囲で，適切なモデルへの改良を試みた。モデルの修正のための基準として，前出のフル検定と修正指標を用いた。フル検定は，モデルのパスや相関の中で，統計的に有意ではないものを削除することにより，モデルの改良を行うものである。一方，現行のモデルにさらにパスや相関を加えることにより，より適切なモデルへと改良する方法がある。このときに，統計的に有意なパスや相関を見つけ出すために使われるのが，LM 検定 (Lagrange Multiplier : ラグランジェの乗数検定) である (豊田, 1992)。この LM 検定と同じ目的のために使われるのが，修正指標である (狩野, 1997)。修正指標は，現行モデルで相関を反定していない変数間や，パスを想定

していない変数間に，相関やパスを仮定した場合に，カイ二乗値がどの程度減少するかを表すものである（5%水準でカイ二乗値が有意に変化するためには，3.84以上の減少が必要となるため，本研究ではカイ二乗値の減少を期待する値として4を設定している）。

衝動的・非統制的な行動特徴のモデルの修正については，修正指標により提示されたパスのうち，理論的に採用できると判断した「精神的な健康度→衝動的な行動特徴」と「活動制限感→衝動的な行動特徴」を追加した。再度計算を行い，ワルト検定により，有意ではないパスを確認したところ，削除すべきパスはなかった。

一方，依存的な行動特徴についてのモデルは，修正指標による判断で，「活動制限感→依存的な行動特徴」のパスを追加し，再度計算したところ，「暖かい養育態度→依存的な行動特徴」のパスが有意ではなくなった。よって，住環境の影響が養育態度を介して依存的な行動特徴に影響を及ぼしているとは言えなくなったため，モデルから暖かい養育態度を削除した。

これらの改良により，2つのモデルの適合度（Table5.3.3参照）を表しているGFI，AGFIは0.9より大きく，RMSEAも0.05より小さくなり，どちらの場合においても，住環境と子どもの問題行動傾向に関する妥当性を備えたモデルが得られたといえよう。最終的に採用したモデルをFigure.5.3.2とFigure.5.3.3に示す（但し，住環境に関する変数間の相関を表すパスおよび誤差は，図が煩雑になるため省略してある）。

**Table5.3.3 各モデルの適合度指標**

モデル	N	$\chi^2$ 値	df	GFI	AGFI	RMSEA
衝動的・非統制的な行動特徴	776	45.639	28	0.990	0.975	0.029
依存的な行動特徴	760	24.318	9	0.991	0.972	0.047

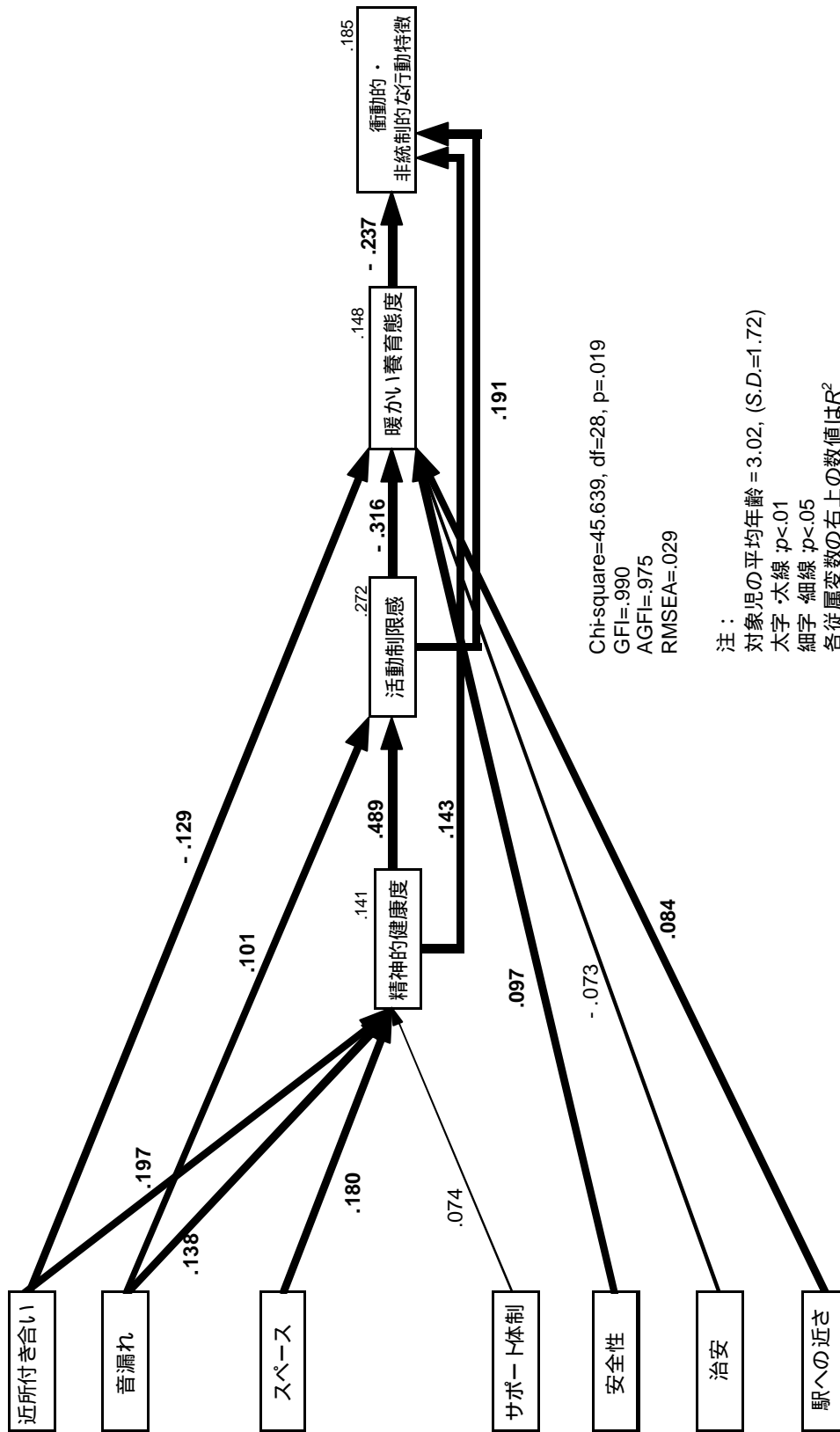


Figure 5.3.2 住環境から衝動的・非統制的な行動特徴までの因果連鎖を示したパスダイアグラム (N=776)

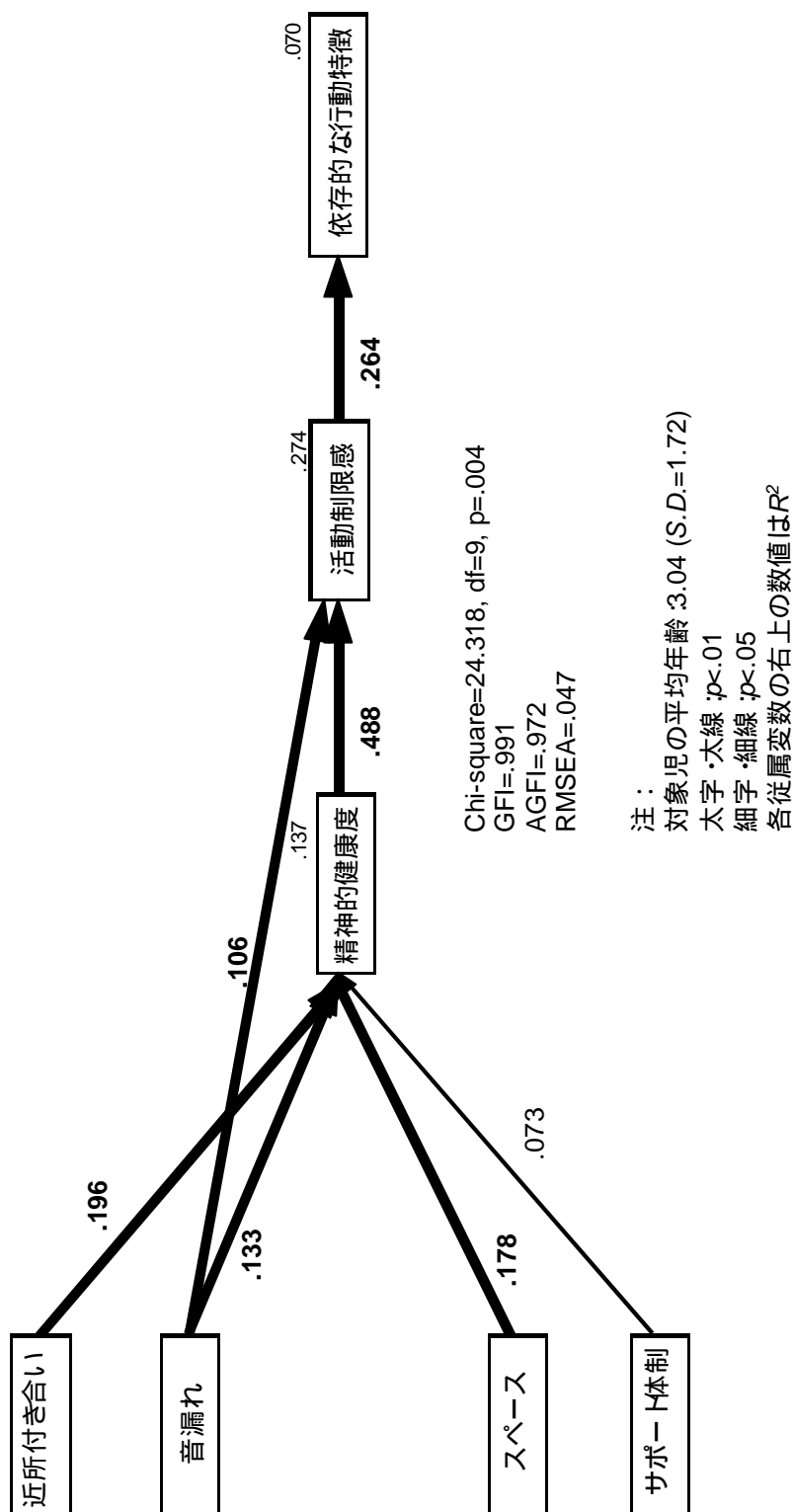


Figure5.3.3 住環境から依存的な行動特徴までの因果連鎖を示したパスダイアグラム (N=760)

## 1. 衝動的・非統制的な行動特徴

これまでに示された因果モデルの最終段階として、衝動的・非統制的な行動特徴を仮定することは妥当性があることが示された。

まず始めに、子育てをめぐる住環境の変数と衝動的・非統制的な行動特徴との相関・偏相関関係の検討から、介在する（精神的健康度、活動制限感、暖かい養育態度）を統制した場合、住環境と衝動的・非統制的な行動特徴の間に見られていた有意な相関関係が、有意ではなくなった。このことから、子育てをめぐる環境に対する母親の評価は、母親自身に関する変数が介在することによって、子どもの衝動的・非統制的な行動特徴との相関関係を示していることが明らかとなった。共分散構造分析によるパス解析を行った結果、暖かい養育態度から衝動的・非統制的な行動特徴への標準化された因果係数は  $\beta = -.237$  ( $p < .01$ ) であり、暖かい養育態度で接していれば、このような行動特徴を示す傾向は弱くなることが示された。さらに、精神的健康度 ( $\beta = .143$ ,  $p < .01$ ) および活動制限感 ( $\beta = .191$ ,  $p < .01$ ) から直接影響を受けていた。すなわち、精神的な健康状態が悪いことや、子育てによる活動制限感を強く感じているほど、衝動的・非統制的な行動特徴が強くなることが示された。

## 2. 依存的な行動特徴

これまでに示された因果モデルの最終段階として、依存的な行動特徴を仮定することはできなかった。しかし、養育態度をモデルから除外し、活動制限感から直接依存的な行動特徴にパスが引かれるモデルは妥当性が得られた。

まず始めに、子育てをめぐる住環境の変数と依存的な行動特徴との相関・偏相関関係の検討から、介在する（精神的健康度、活動制限感、暖かい養育態度）を統制した場合、住環境と依存的な行動特徴の間に見られていた有意な相関関係が、有意ではなくなった。このことから、子育てをめぐる環境に対する母親の評価は、母親自身に関する変数を介して、子どもの依存的な行動特徴に影響を及ぼしていることが明らかとなった。共分散構造分析によるパス解析を行った結果、妥当性を備えたモデルは、因果連鎖の中に養育態度を含まないものであった。暖かい養育態度の前段階として設定していた活動制限感から依存的な行動特徴への標準化された

因果係数は  $r = .264$  ( $p < .01$ )であった。すなわち，子育てをめぐる住環境の変数は，母親の精神的健康度および活動制限感を通して，依存的な行動特徴に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

### § 3. 考察

本節では，これまでの分析で得られた，「住環境 母親の精神的健康度 子育てに対する否定的な意識 不適切な養育態度」とい因果連鎖の最終段階として，子どもの問題行動傾向を反定して，共分散構造分析により，この因果モデルを検証した。

最終的に採用したモデルから，因果連鎖の初期段階の要因の一つとして，住環境が子どもの問題行動傾向を強めるとい関連性を設定することが可能であることが示された。母親が住環境の困りごとに対してうまく対処できない場合，母親の精神的な健康状態は低下し，それによって子育てによる活動制限感が強くなる。そして，次のプロセスからは，問題行動傾向の種類によって異なることが示された。

まず第一に衝動的・非統制的な行動特徴の場合は，母親が住環境から直接的・間接的に影響を受け，子どもに対して暖かい態度で接することができなくなるというプロセスが，このような行動傾向の強化に対して部分的な説明力を有することを示していた。さらに，精神的な健康状態の悪さや子育てによる活動制限感の強さは直接的にも衝動的・非統制的な行動特徴に影響を及ぼしていた。すなわち，母親が子育てしやすいと感じられない住環境の場合，その不満は，精神的な健康状態の低下や子育てに対する否定的な意識の増大などの様々な経路を通じて最終的には子どもの衝動的・非統制的な行動特徴に影響を及ぼしているとい可能性が示されたといえよう。

一方，依存的な行動特徴の場合は，衝動的・非統制的な行動特徴のモデルと基本的なプロセスについては共通性があるが，しかし，「暖かい養育態度」を介することなく，活動制限感から直接的に依存的な行動特徴に影響が及んでいるとい因果モデルが示された。住環境の影響は，子育てによる活動制限感が強くなることによって，依存的な行動特徴の傾向を強化している

といえるだろう。

衝動的・非統制的な行動特徴と、依存的な行動特徴では、子育てをめぐる住環境を始点とした因果モデルの最終段階において違いが見られた。このような違いに対して、一つ想定される理由は、養育態度の側面の問題である。今回測定した「養育態度の暖かさ」という側面は、依存的な行動特徴に影響を及ぼしてはいなかったが、養育態度の別の側面（例えば、密着、過干渉など）では影響がある可能性が考えられる。すなわち、子育てをめぐる住環境が子どもに影響を及ぼす、というプロセスの介在要因として可能性のある養育態度の側面を捉えられていなかったと考えられるだろう。また、説明率も衝動的・非統制的な行動特徴の場合と比べて低かった（衝動的・非統制的  $R^2=.185$ 、依存的  $R^2=.070$ ）ことも考え合わせると、「暖かい養育態度」以外にも適切な変数を測定することにより、子育てをめぐる住環境が母親を介して子どもに及ぼす影響について、理解をより深めることが可能となると思われる。

子どもの問題行動傾向の原因として、様々な要因が指摘されており、それら多くの要因が時系列的に複雑な相互作用を及ぼしあうことによって、問題行動が発達していくものと考えられている（菅原ら，1999、菅原，2001）。このようなプロセスの中において、住環境は、直接的な原因とはならないと考えられるが、先行研究でこれまでに明らかにされてきた原因の背景要因として、説明率は低いながらも無視できないものであることが、今回の分析で示されたと考えられる。

しかしながら、本研究によって得られた因果モデルを一般化することについては、制限があると考えられることは注意しなくてはならないだろう。

子育てをめぐる住環境に対する母親の否定的な評価によって生じた、母親自身の精神的な健康状態の低下や、子育てに対する否定的な意識、不適切な養育態度によって影響を受けた子どもが示す問題行動傾向は、因果モデルの前の段階にフィードバックされ、母親の状態や養育態度を変容させるといふ循環型のプロセスも想定できるだろう。つまり、本研究で検討した変数が、相互作用のある円環的なモデルを示すことも考えられる。しかし、これについて検討するためには、やはり縦断調査が必要であろう。縦断データをとることによって、住環境・母親・子どもといふ因果プロセスについて、より詳しい検討が可能になると考えられる。

本研究で示された因果モデルについて発達的な側面について検討することは，上述のような点から慎重になる必要があり，縦断研究による検証研究を待たなければならないと考えられるが，少なくとも本研究のデータについては，子どもの問題行動の萌芽的な傾向は，母親を介して，住環境から影響を受けていることが示された。このことは，Evans et al. (2001)が可能性として提示した，住居の質の悪さが親を介して子どもにネガティブな影響を及ぼすメカニズムを実証的に明らかにしたと考えられ，今後の研究の一つの糸口になるものと言えるだろう。



#### 第4節 第5章のまとめ

本章では，住環境が精神的健康度と子育てに対する意識を介して母親の子どもに対する養育態度に影響を及ぼすという，本研究の仮説の因果連鎖を検証した。さらに，その連鎖が子どもに及ぼす影響についても検討した。その結果，以下のことが明らかとなった。

- (1) 母親の精神的健康度と子育てに対する意識を介した子育てをめぐる住環境の影響力は，母親の子どもに対する養育態度にも影響を及ぼしていることが示され，想定していた因果関係が確認できた。
- (2) さらに，精神的健康度や子育てによる活動制限感を介さず，母親の子どもに対する暖かい養育態度に対して直接効果を持つ住環境の側面 特に住居周辺環境 もあることが明らかにされた。
- (3) 子育てをめぐる住環境の様々な困りごと・不満によって，母親の状態が子育てにとって不適切な状態になり，子どもの行動特徴の発現に影響を及ぼす可能性があることが示された。また，本研究のデータにおいては，その影響過程は行動特徴の種類によって異なることが明らかにされた。

## 第6章 結論

### 第1節 本論文の総括

#### 第1項 本論文の概要

本研究は、子育てをめぐる住環境が母親の精神的な健康状態、子育てに対する意識、そして養育態度、および子どもの問題行動傾向との関わりについて検討を行った。その結果、この研究で分析の対象となったデータからは、以下の点が明らかとなった。

#### 1. 母親の子育てをめぐる住環境に対する評価は全体としては高いが、スペース関連の問題や子育てに重要な住居周辺環境の側面については不満度が高い。(第2章)

本研究の対象となった母親の子育てをめぐる住環境に対する評価は、全体として高いことが示された。しかしながら、住居内のスペースに関わる問題や近隣環境の快適性、子育てをする上で重要と思われる周辺環境の側面については、不満を感じている母親が多いことが明らかとなった。

#### 2. 住環境に関する物理的な指標によって、精神的健康度に違いは見られない。(第3章)

本研究で用いたデータからは、住居の特性(集合住宅と一戸建て住宅など)によって、母親の精神的な健康状態に違いが見られなかった。精神的な健康状態に影響を及ぼしているのは、現在の住環境に対する母親自身の評価であることが示された。さらに、精神的な健康状態に対して影響力を持っている住環境の側面は、住居内のスペースに関わる問題、隣近所への音漏れの心配、隣人関係、子育てのサポート体制であることが示された。

#### 3. 子育てをめぐる住環境に対する評価は、母親自身の状態を介して、子どもに対する養育態度に影響を及ぼす。(第4章、第5章第1節、第2節)

本研究で用いたデータから、子育てをめぐる住環境に対する評価は、母親の精神的な健康状態や子育てに対する意識を通して、子どもに対する養育態度に影響を及ぼしていることが示された。ただし、隣近所への音漏れの心配は子育てに対する否定的な意識に、隣人関係は養育態度に、間接的な影響だけではなく、直接的にも影響も及ぼしていた。また、駅への近さ、交通面での安全性、治安などは、養育態度に直接影響を及ぼしていた。

#### 4. 住環境は母親を介して、子どもの問題行動傾向に影響を及ぼす。(第5章第3節)

本研究で用いたデータから、母親と住環境との関係性は、子どもの問題行動傾向に影響を及ぼすことが示された。子育てをめぐる住環境に対する母親の評価が低いことは、母親の内的プロセス(精神的健康状態、子育てに対する意識)を介して、子どもに対する不適切な態度を招き、最終的に子どもの問題行動傾向(困った行動特徴)を増長させる可能性があることが示された。

## 第2項 本論文の問題点と今後の研究の展望

### §1. 本研究の問題点

本研究を行った結果、いくつかの問題点が明らかとなった。以下にその点について述べる。

#### 1. 限られた調査地点 - サンプルの問題 -

本研究で用いたデータは、東京都および近郊の県で収集したものである。全体として都市部のデータであったと考えられるため、今回得られた結果は、限られたデータでのみ示されるものである可能性が高い。よって、今回の結果を一般化することには制限があると考えられる。今後、様々な地域での調査を行うことにより、この本研究で示された因果モデルの信頼性を高めることが必要であろう。

#### 2. 住環境変数の妥当性

本研究で用いた住環境の変数は、主に母親からの自由記述回答をまとめたものであるが、子育てをめぐる住環境について代表性を持つ変数であるかということに関して、まだ改善の余地が充分にあると考えられる。各被説明変数の説明率が低かったことから、今回の変数とは別に、子育て期における、重要な住環境の側面がある可能性もあると思われる。住環境変数の整備は今後の課題としたい。

また、居住者自身の主観的な評価以外にも、住環境を評価する変数を設定することが必要であると考えられる。質問紙による調査法だけでなく、観察など実態調査などを行うことにより、第三者が評定できるような住環境に関する項目を設定することが必要であろう。

今回用いた住環境の物理的・客観的な指標（住居特性）は、精神的健康度と関係性が認められなかった。これは、今回分析したデータの特徴にもよる可能性も考えられるが、指標の設定の仕方に原因があるとも推察される。本研究の指標は、大まかなものであったと考えられるので、詳細な物理的・客観的指標を設定することにより、居住者の心理的なプロセスに影響を及ぼす住環境の側面をより詳しく特定することが可能であると思われる。

## §2. 今後の研究の展望

本研究の問題点などを踏まえ、今後の研究の展望を以下に述べる。

### 1. 多面的な住環境変数の設定

先述のように、本研究で使用した住環境に関わる変数について、今後はより多面的な捉え方をする必要があると言えるだろう。例えば、隣人関係などは、本研究では詳しく調査しなかったが、子育てをめぐる住環境の重要な側面として抽出されたことから、このような側面に関する項目を充実させることが必要であると思われる。また、子育てに対する意識や養育態度などは、地域住民からのサポート、夫や親からのサポートと関連していると考えられる。地域住民が子育てに対して理解がある、夫が子育てに協力してくれる、親が同居している、近くに住んでいる、などといったことは、子育ての負担感などを軽減させると推察される。以上のように、住環境における、多様な背景要因を考える必要があるだろう。住環境の一側面として、隣人関係、夫婦関係、リビング・アレンジメントなどを考慮して調査を行っていくことが、今後の研究の課題であると考えられる。

### 2. 住環境と精神的健康度との間に存在する変数の検討

本研究では、住環境に対する評価が直接、精神的な健康状態に影響を及ぼしている想定して分析を行ったが、両者の間に存在する変数があることが考えられる。例えば、母親自身のパーソナリティー（きれい好きなどが挙げられるだろう。同じように環境に対して不満を抱えていたとしても、それが精神的な負担となるかならないかという点において、パーソナリティーの問題は重要であると思われる。今後は、母親自身について、より詳細に検討を加える必要があるだろう。

また、住環境に対して持っている不満に対して、何らかの対処（コーピング）行動を行う人もいれば、最初からあきらめてしまっていて何もしない人、そして「こんなものだろう」と不満だが納得してしまう人と、様々な態度が考えられる。取舍選択モデルでも示されていたように、このような不満に対する対処（コーピング）の方法も、住環境と精神的健康度との間に存在す

変数と考えられる。居住者の住環境における不満（困りごと）に対する働きかけ（対処行動）についても検討していきたい。

以上のように、住環境と精神的健康度との間に介在する変数について検討することは、住環境がどのようなメカニズムによって精神的健康度に影響を及ぼしているのかを解明することにもつながる。この点については、まだあまり明らかにされていないので、今後研究する必要があると考えられる。

### 3. 子どもの発達との関係 年齢別の分析 項目の設定の必要性

本研究で対象となった子どもの年齢は、0歳から6歳までの幅があったが、本研究では年齢別の分析を行わなかった。この時期の子どもの発達はめざましく、大きな変化のある時期であることも考慮すると、年齢別の分析は今後の課題とされる。さらに、母親が子育てのための住環境に対して求める条件、子育てに対する意識、養育態度なども子どもの年齢によって変化していくことが考えられる。年齢別に質問項目を変えて調査することも今後の課題として重要であると思われる。

### 4. 子どもの発達との関係 縦断調査の必要性

本研究では、子どもの変数として、問題行動傾向（困った行動特徴）を取り上げた。今回の調査は横断調査であったため、子どもの発達という時間軸を加えることができなかった。住環境が子どもの発達に及ぼす影響を正確に把握するためには、縦断調査が必要となるだろう。さらに、縦断調査を行うことによって、母親自身の変化や、ライフサイクルによる変化も把握することができると思われる。以上の点から、経年変化を辿ることは、多くの示唆を得ることが期待できるといえる。

### 5. 住環境の移転に伴う居住者側の変化の検討

縦断調査の必要性と関連するが、住環境の移転（relocation）に伴う居住者の変化を辿ること

も重要であると考えられる。

まず第一に、住環境の評価といふ側面に対して、過去の住経験は重要な役割を果たしていると考えられる。以前の住環境との比較は、現在の住環境に対する評価に大きな影響を及ぼすものと推測されるため、移転前後の評価を把握することは必要であろう。

また、住居の移転に関する縦断研究を行った Evans, Wells, Chan, et al. (2000) は、(引越しによる)住居の改善は、引越し前の精神的健康度を統制しても、心理的ディストレスの程度の予測変数となっていることを示している。このような先行研究の結果を考慮すると、例えば、「戸建て持ち家信仰」が強い日本では、集合住宅から戸建て、賃貸住宅から持ち家に移ることにより、住環境に対する不満は改善されるのかなど、移転による心理的な変化を把握することは重要であると考えられる。

## 第2節 総合的考察

### 第1項 総合的考察

本研究は、子育てをめぐる住環境について、母親を中心として環境心理学的視点から検討を行った。まず始めに、子育て中の母親の居住状況（住居特性や住環境に対する評価）の実態を把握し、その現状を明らかにした。次に、仮定した因果モデル（p. 21, Figure 1.2.1）の段階的な検証を試みた。この因果モデルでは、まず初めの段階として、子育てをめぐる住環境の困りごとの多さ・大変さは、母親の精神的な健康状態を悪化させることを想定している。さらに次の段階として、子育てに対する意識に悪影響が及ぶことを仮定し、最終段階として、不適切な養育態度とそれが子どもの行動特徴に及ぼすネガティブな影響を仮定している。共分散構造分析によりモデルの検証を行ったところ、仮定した因果モデルは、概ね支持されるとい結果が得られた。

#### <子育てをめぐる住環境の評価>

まず第2章において、母親が現在おかれている住環境の状況について把握し、子育てをめぐる住環境を検討する上での基礎的な資料を得た。分析の結果、本研究で用いた項目に対しては、評価は全体として悪くはないことが明らかとなった。施設へのアクセスについては、子育て時期に必要なと思われる施設に便利なところに居住していることがわかった。本研究で用いた項目は、実際に子育て中の母親に対して、住環境について不満・困難に感じることをたずねた自由記述回答を基に作成した項目であったが、質問項目として提示されると実際はそれ程不満を感じているわけではないことが予測される。しかしながら、住居内の空間計画に関する項目や、隣人関係、子育てのサポート体制、子育てをする上で重要と考えられる近隣環境の側面などについては、評価は低かった。このような側面に対する不満は大きくのしかかっているため、この時期の母親は他の側面に対してはそれ程気になっていないという可能性が示唆される。

また、住居形態、所有形態など、住環境の物理的な指標によって、住環境に対する評価の違いを検討したところ、「持ち家一戸建て、延べ床面積が広い、部屋数が多い」とい条件の方が、子育てをめぐる住環境に対する母親の評価は、細かい部分では異なる場合もあったが概して



高いことが明らかとなった。

### < 子育てをめぐる住環境と母親の精神的健康 >

第3章において、子育てをめぐる住環境と母親の精神的な健康状態について検討した。その結果、住居特性については、精神的健康度に違いが認められなかった。一方、子育てをめぐる住環境における不満や困りごと(量的、質的な悪条件)については、母親の精神的な健康状態の低下を説明するものであるという、本研究の仮説は支持された。

住環境の特性によって、母親の精神的健康度に違いが認められなかった理由の一つとして推測されるのが、物理的な住居特性が、精神的な健康状態を左右するほど大きな差がなかったことである。本研究の対象となった母親が住んでいる住居は、比較的恵まれているものであったと考えられるので、住居特性は精神的健康度の違いを生じさせるには至らなかったのではないだろうか。

一方、住環境に対する評価については、住環境における困りごとを量的な側面から見た場合に、困りごとの多さは、精神的な健康状態の悪さと正の相関関係があった。すなわち、住環境における困りごとの影響は、「塵も積もれば山となる」ように、累積的に精神的な健康状態を悪化させているのではないかと考えられる。

また、困りごとを質的な側面から見ると、家の中の空間に関わる困りごと、隣近所への音漏れに対する気遣い、隣近所の住民との人間関係、そして子育てのためのサポート体制が、母親の精神的な健康状態に影響を及ぼしていた。特にスペースについては、物理的な指標である述べ床面積と精神的健康度との間に有意な関係性は見られなかったにもかかわらず、スペースの機能に関する困りごととは、関係性が認められた。このことは、物理的な広さよりも、住居内の空間の機能に対する要求が満たされていること、つまり量よりも質を確保することの方が、子育て中の母親の精神的な健康にとって良いことを示していると考えられる。

以上のように、子育てをめぐる住環境における困りごと・不満などは、子育て中の母親の精神的な健康状態に影響を及ぼしていることが示されたが、説明率の程度、各困りごとの精神的健

健康に対する係数の大きさなどから、健康状態を害する主要な要因ではないと考えられる。しかしながら、それぞれの困りごと・不満が累積することによって、精神的健康度に対する影響力が発揮されることが示されているといえよう。よって、個々の影響力は弱いながらも、住環境の各側面が精神的な健康状態に及ぼす影響は無視できないと思われる。

#### <子育てをめぐる住環境と子育てに対する意識>

第4章において、子育てをめぐる住環境は、母親の精神的な健康状態を介して間接的に、また直接的にも、子育てに対する意識に影響を及ぼしていることが示された。

困りごとの量的な側面からは、困りごとが多いほど、子育てに対する意識が否定的になるが、それには、母親の精神的健康度を介する場合と、直接子育てに対する否定的な意識につながる場合があることが示された。このことから、困りごとの性質による違いがあることが示唆された。質的な側面からの検討により、スペースに関する問題、音漏れに対する気遣い、隣人関係、子育てのサポート体制は、母親の精神的健康度を介して、子育てに対する意識に影響を及ぼしていた。さらに、音漏れに対する気遣いは、直接的にも子育てに対する意識を否定的な方向に変容させることが示された。つまり、子育て中の母親は、子どものたてる音に対して非常に神経質になっており、このことは母親自身にとっても、子どもとの関係にとってもネガティブな影響を与えていることが明らかにされた。

#### <養育態度から子どもの問題行動傾向へ>

子育てをめぐる住環境における不満な点や困りごとは、母親の精神的な健康状態を低下させていた。次に、このような状態は、母親が子育てに対して抱く意識に影響を及ぼしていた。そしてこの影響は、母親が子どもに接するときの養育態度に対して、それを不適切にするような方向に作用することが予測された。第5章では、まずこの因果連鎖の検討を行い、そして、その結果をふまえて、最終従属変数として子どもの問題行動傾向(行動特徴)を設定し、仮説モデルの検証を行った。

まず始めに、子育てをめぐる住環境の影響は、母親の精神的な健康状態や子育てに対する意識などを介して養育態度に影響を及ぼしていることが示された。住環境からの間接的な影響に加えて、住居周辺環境のうち、「交通面での安全性」、「治安」、「駅への近さ」といった側面は、直接養育態度に影響を及ぼしていることが明らかにされた。

次に、最終的なモデル検証から、仮定した因果モデルは概ね支持されるということが示された。このモデルでは第一段階として、子育てをめぐる住環境の側面に対して、母親が不満だ・困っていると感じた（適性条件を超えていると判断された）場合、母親自身の精神的な健康状態が低下することを示している。さらに、この状態は、順次段階的に作用し、母親の子育てに対する否定的な意識を高め、さらに母親の子どもに対する接し方（養育態度）を望ましくない方向に変化させていく。そして、最終段階として、子どもの行動特徴の傾向に対して影響を及ぼしている（ただし、行動特徴の種類によっては、養育態度を介さない場合もある）ことが示された（Figure 6.2.1）。このモデルの妥当性が確認されたことは、住環境は子どもの行動特徴に対して、部分的な影響力を持ちうるということを明らかにし、またそのプロセスにおいて母親という mediator（仲介者）を設定することが必要であることを示唆しているといえるだろう。

Conger et al. (1992) は、経済的な困難さが子どもに及ぼす影響は、連続した段階として解釈することが最も適切であると述べている。本研究においても、住環境を母親の視点から捉えた場合、Conger et al. の研究と同様の因果連鎖の過程が示され、住環境が子どもに及ぼす影響も、母親を mediator とした因果プロセスとして段階的に把握することが適切であることが示された。

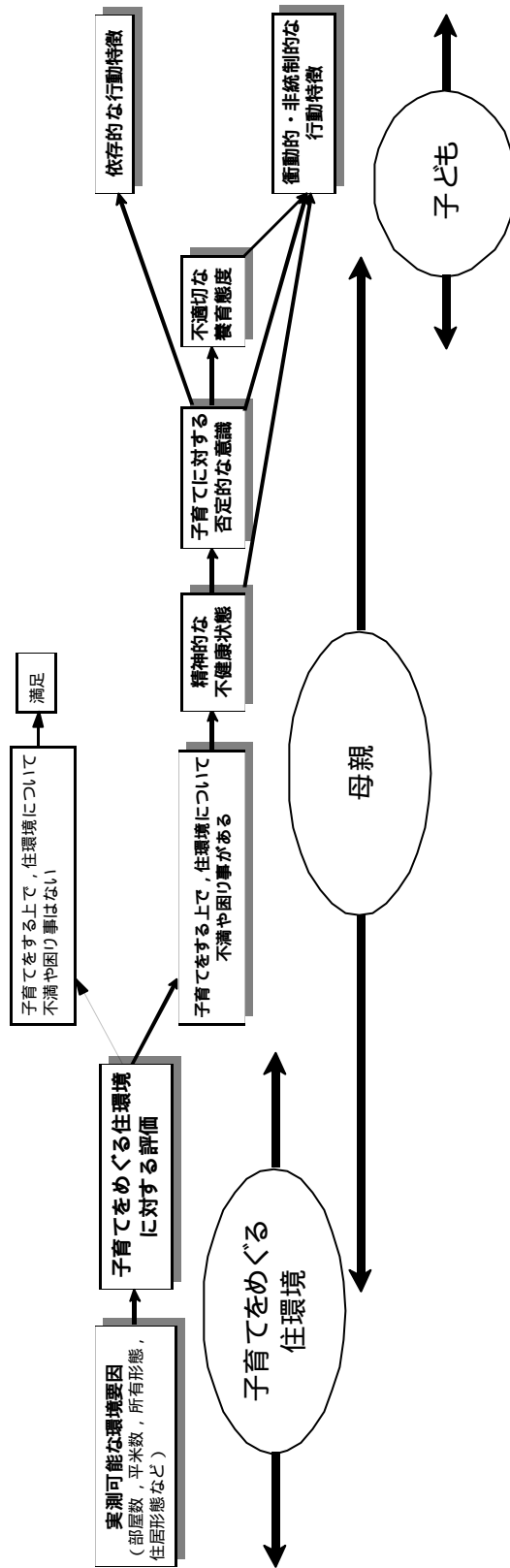


Figure 6.2.1 住環境, 母親, 子どもの関係を表した因果モデル

### < 既往研究との比較からの考察 >

本研究において、子育てをめぐる住環境に対する不満や困りごとは、母親や子どもに対して、ネガティブな影響を与えていることが示された。ここで、特に母親の精神的な健康状態との関わりについて、既往研究との比較から考察を加える。

住環境に関する困りごととして、本研究で用いた項目は母親からの自由記述回答を基にして作成されたものであることは既に述べた。これらの項目は、他の国で行われてきた住環境と精神的な健康状態との関係についての研究で用いられている変数 指標と比べて、かなり要求水準が高いものと考えられるだろう。海外の研究の多くは、劣悪な住環境を貧困と絡めて扱ったものが多く、集合住宅などは時として“雑居”と捉えられるような状況がある。また、住環境に関する項目についても、“給湯設備がない”、“冷暖房設備が整っていない”、“ごみがあふれていて使えない 部屋がある”など、今回使用した項目と比較すると、要求水準としてはより根本的な不都合を指標としている。そのため、精神的な健康状態に与える影響が、本研究の結果より大きくなっていることが予想される。

日本の居住水準は、面積の面では他の国々に劣るかもしれないが、質 設備などの面ではかなり高い水準にあると推察される。それでもなお、子育て中の母親に対して影響があったということは、この時期（ライフステージ）の女性にとって、住環境は重要な意味を持っていると考えられるといえよう。

### < 子育てがしやすい 環境をめざして >

本研究において、住環境と子どもとの関係性を説明するプロセスに、mediator としての母親の存在が確認されたことによって、子どもが健やかに育つためには、子どものため（子どもの視点から）の住環境の整備だけでなく、母親にとって“子育てのしやすい 環境”を整備することが重要であることが示唆された。

シャファー (2001) は、貧困が子どもに及ぼす影響について、親たちの心の健康が影響を受けると、次には子どもたちが心理的に苦しむことになりやすく、さらに Conger et al. (1992) の研

究結果を踏まえて、「親たちの心理的サポートを提供することが、子どもたちを助けるには最も効果的な唯一の方法であろう」と述べている。

本研究で調査を行った地域は、住環境が劣悪な地域とは言えないと思われるため、貧困の場合のように、親側のサポートが「唯一の方法」とはならないかもしれない。しかしながら、本研究によって一連の因果連鎖が確認できたことは、子育てのための住環境の整備を、育てる側の視点から行うことの可能性・有効性を示唆しているといえよう。

本研究で、因果連鎖の最初の段階である母親の精神的健康度に対して、スペースの問題、音漏れに対する心配、隣人関係、子育てのサポート体制などが影響を及ぼしていたことが示された。住環境、特に住居に関わる困りごとを改善することは、比較的操作性が高いと考えられる。例えば、どんなに狭い場所でも母親が「自分のスペース」と思える場所を持つことで、精神的な健康状態は多少でも改善されることが期待できる。子どもには子ども部屋があるように、母親も自分の部屋（場所）を持つことができれば、自分自身のためだけでなく、子どものためにも良いのではないかと考えられる。また、スペース関連の問題点で重要であると考えられるのが、収納の問題である。収納に関しては、後から増やすことは困難であると思われるので、設計段階からの検討が必要であろう。また、収納はただ広ければ良いというものではなく、適切な場所に適切な広さの収納空間（例えば、玄関にベビーカーの収納場所など）を設けることが重要であると思われる。間取りの使い勝手の悪さについても、適切な動線計画を行うことで、緩和することが可能であろう。また、音漏れに対しての心理的負荷が大きくなることも示されたが、防音については、ハート面に対応できることも少なくないと推測される。特に、壁・床・天井で上下左右の住居と接している集合住宅については、建材を工夫することによって防音効果を発揮することができるだろう。

以上のように、住宅を提供する側が、設計や施工の段階において、本研究で指摘されたような点について考慮することは、子育てしやすい環境の実現のための効果的な方法の一つであると考えられる。Winchip, Inman, and Dunn (1989)が指摘しているように、「住環境は家族関係を良好に保ったり、ストレスを軽減したりするために、かなりの柔軟さをもって計画・デザインされ

なければならぬのである。特に、今回調査したような低年齢の子どもを育てている、若い世代の家族が入居することが多い賃貸マンションなどは、子育てしやすい住環境を意識して計画されるべきであろう。

また、住居周辺環境においては、子育てのサポート体制が精神的健康度に、駅への近さ、交通面での安全性、治安などが養育態度に影響を及ぼしていた。これは、近隣環境のこのような側面に対して、母親の評価が高くなることで、母親の自身の状態や子どもとの関係にとって好ましい影響を与えることを示している。すなわち、都市計画や地域の協力などによる近隣環境の整備も、子育てをしやすい住環境の実現に対して、重要であることが示されたといえるだろう。

## 第2項 結論

本研究の結果から,本研究の主要な結論を以下の4点に総括することができる。

結論1: 子育て中の母親にとって,現在の住環境に対する評価は全体的に高いことが示された。しかし,住居内のスペースに関わる問題点,近隣環境の快適性,子育てに重要な住居周辺環境の側面に関しては,相対的に評価が低いことが明らかとなった。

結論2 1: 仮定したモデルの検証により,子育てをめぐる住環境 母親の精神的な健康状態 子育てに対する意識 養育態度とい因果連鎖を設定することの可能性が実証された。すなわち,子育てをめぐる住環境の不満や困りごとは,精神的な健康状態,子育てに対する負担感や不適切な養育態度など,母親に心理的な影響を与えることが示された。

結論2 2: 結論2 1で示されたモデルにおける住環境の側面,すなわち,子育てをする上で重要な住環境の側面とは,直接的には住居の物理的な側面ではなく,母親の主観的な評価であることが示された。具体的には,住居内のスペースに関する問題,音漏れに対する気遣い,隣人関係,子育てのサポート体制,交通面での安全性,治安,駅への近さである。

結論3: 仮説で想定した因果連鎖は,最終的には子どもの行動特徴にまでつながっていくことが実証された。このことから,育てる側が不満,困りごとを抱えないような住環境における配慮が,最終的には子どもの健やかな発達につながることを示唆された。



### 第3項 さいごに

住環境に対する不満や要求は際限がない。住宅情報誌、女性誌、生活情報誌、テレビ番組など、快適な住環境をつくるための情報があふれている。つまり、これほど住環境は人間にとってクリティカルな問題であり、「衣食住」という言葉に示されているように、人間が人間らしく快適に生きていくための重要課題であると感じていることの表れであると思われる。つまり、住環境（巣）およびその周辺環境を快適な空間としたいと思うのは、生物としての本能なのかもしれない。本論文の冒頭で指摘したように、生物にとって重要な活動である種族保存、つまり子を産み育てるとい活動において、子育てをしやすい環境を整えることは根本的な問題であるといえるだろう。人間の子育てにおいても、その巣（=住居）および周辺環境の質が、育てる側の視点に立った場合においても重要な意味を持っていることが、限られたデータの範囲ではあるが、本研究によって実証され、基礎的な資料を提供することができたことは、意義があるといえるだろう。本研究が、子育てをしやすい住環境の整備に向けて、一助となることができれば幸いである。

## 引用文献

- Achenbach, T., & Edelbrock, C. 1978 The classification of child psychopathology: A review and analysis of empirical efforts. *Psychological Bulletin*, **85**, 1275-1301.
- 秋山晴子 1988 住まいと人のかかわり 佐藤方彦 櫻井博 (編) 住環境とヒト 井上書院 Pp. 62-78 .
- オールポート,S. 久保儀明 (訳) 1998 動物たちの子育て 青土社  
(Allport, S. 1998 *A Natural History of Parenting*. Crown Publishers, Inc. )
- Bell, P.A., Fisher, J.D., Baum, A., & Greene, T.E. 1996 *Environmental Psychology*. Fort Worth, TX: Holt, Rinehart and Winston.
- Booth, A., & Edwards, J.N. 1976 Crowding and family relations. *American Sociological Review*, **41**, 308-321.
- Bradley, R.H., & Caldwell, B.M. 1984 The HOME Inventory and family demographics. *Developmental Psychology*, **20**(2), 313-320.
- Cassidy, T. 1997 *Environmental Psychology*. Hove: Psychology Press Ltd.
- Cave, S. 1998 *Applying Psychology to the environment*. Oxon: Hodder & Stoughton.
- Conger, R.D., McCarty, J.A., Yang, R.K., Lahey, B.B., & Kropp, J.P. 1984 Perception of child, child-rearing values, and emotional distress as mediating links between environmental stressors and observed maternal behavior. *Child Development*, **55**, 2234-2247.
- Conger, R.D., Conger, K.J., Elder, G.H., Lorenz, F.R., Simons, R.L., & Whitebeck, L.B. 1992 A Family process model of economic hardship and adjustment of early adolescent boys. *Child*

- Development*, **63**, 527-541.
- Coyne, J.C., & Downey, G. 1991 Social factors and psychopathology: Stress, social support, and coping processes. In M. R. Rosenzweig & L. W. Porter (Eds.), *Annual review of psychology* (**42**, pp. 401-425). Palo Alto, CA: Annual Reviews.
- デビソン ,G.C., & ニール ,J.M. 村瀬孝雄 (監訳) 1998 異常心理学 誠信書房  
(Davison, G.C., & Neale, J.M. 1998 *Abnormal psychology*. John Wiley & Sons, Inc. )
- ドストエフスキー 工藤精一郎 (訳) 1987 罪と罰 (上巻) 新潮社
- Duvall, D., & Booth, A. 1978 The housing environment and women's health. *Journal of Health and Social Behavior*, **19**(4), 410-417.
- Evans, G.W. & Cohen, S.A. 1987 Environmental stress. In D. Stokols & I. Altman (Eds.) *Handbook of Environmental Psychology: Vol. 1*. New York: Wiley.
- Evans, G.W., Kliewer, W., & Martin, J. 1991 The role of the physical environment in the health and well-being of children. In H. Schroeder (Ed.) *New directions in health psychology assessment* (pp. 127-157). Washington DC.: Hemisphere.
- Evans, G.W., Lepore, S.J., Shejwal, B.R., & Palsane, M.N. 1998 Chronic residential crowding and children's well-being: an ecological perspective, *Child Development*, **69**(6), 1514-1523.
- Evans, G.W., Wells, N.M., Chan, H.Y., E., & Saltzman, H. 2000 Housing Quality and Mental Health. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **68**(3), 526-539.
- Evans, G.W., Wells, N.M., & Moch, A. 2000 Housing and Mental Health; A Review of the Evidence and a Methodological and Conceptual Critique. [On-line]. Available:

- [http://www.hel.fi/tietokeskus/tukimuksia/enhr2000/WS13/WS13\\_Evans.pdf](http://www.hel.fi/tietokeskus/tukimuksia/enhr2000/WS13/WS13_Evans.pdf)
- Evans, G.W., Salzman, H., & Cooperman, J.L. 2001 Housing quality and children's socioemotional health. *Environment and Behavior*, **33**(3), 389-399.
- Fanning, D. 1967 Families in flats. *British Medical Journal*, **4**, 382-386.
- Freeman, H.L. 1984 Housing. In H. L. Freeman (Ed.). *Mental health and the environment* (pp. 197-225). London: Churchill Livingstone.
- Gabe, J., & Williams, P. 1986 Is space bad for your health? The relationship between crowding in the home and emotional distress in women. *Sociology of Health and Illness*, **8**, 351-371.
- Gifford, R. 1996 *Environmental Psychology: principles and practices* (2nd ed.). Needham Heights, MA: Allyn and Bacon.
- Gillis, A.R. 1977 High-rise housing and psychological strain. *Journal of Health and Social Behavior*, **18**, 418-431.
- Halpern, D. 1995 *More than Bricks and Mortar? Mental Health and the Built Environment*. London: Taylor and Francis.
- Hannay, D.R. 1981 Mental health and high flats. *Journal of Chronic Diseases*, **34**, 431-432.
- 八田武志 田尾雅夫 三戸秀樹 中迫勝 1993 ストレスとつきあう法 心理学からのアドバイス 有斐閣
- 服部洋子 原田正文 1991 乳幼児の心身発達と環境 大阪レポートと精神医学的視点,名古屋 大学出版会

- 早川和男 岡本祥浩 1993 居住福祉の論理 ,東京大学出版会
- 早川和男 1994 住まいの処方箋 情報センター出版局
- 石井昭夫 1988 快適な住環境 佐藤方彦 関邦博 (編) 住環境とヒト 井上書院 Pp. 45 61 .
- 自治省行政局 1998 住民基本台帳人口要覧 (平成 10 年度版) 財団法人 国土地理協会
- 自治省行政局 2000 住民基本台帳人口要覧 (平成 12 年度版) 財団法人 国土地理協会
- 住宅金融公庫 2000 公庫のデータから見えてくる日本の住まい方 (財)住宅金融普及教会
- 狩野裕 1997 AMOS ,EQS ,LISREL によるグラフィカル多変量解析 目で見る共分散構造分析 現代数学社
- Kasl, S.V., Will, J., White, M., & Marcuse, P. 1982 Quality of the residential environment and mental health, in Baum, A. and Singer, J.E. (Eds.) *Advances in Environmental Psychology: Vol. 4. Environment and Health* (pp. 1-30). Hillsdale, NJ: Prentice Hall
- 河野祐子 日暮眞 織田正昭 1996 高層集合住宅居住の母親がもつ自覚的健康度に関する研究 ,小児保健研究 ,55(4) ,537 543 .
- Kline, R.B. 1998 *Principles and practice of structural equation modeling*. New York. The Guilford Press.
- Knipschild, P. 1978 The Effect of Living in Flats on Mental Health A General Practice Survey. *International Archives of Occupational and Environmental Health* ,41, 207-215.
- 厚生省 1998 平成 10 年度厚生白書 厚生省 P39 .
- クワパット,E 藤原武弘 (監訳) 1994 環境と人間行動シリーズ2 都市生活の心理学 西村書

店

- (Krupat, E. 1986 *People in Cities: The urban environment and its effects*. Boston: Cambridge University Press. )
- Lazarus, R.S., & Cohen, J.B. 1977 Environmental stress. In I. Altman & J.F. Wohlwill (Eds.), *Human Behavior and the environment: Current theory and research* (Vol. 2, pp. 89-127). New York: Plenum.
- Mackay, C., Cox, T., Burrows, G., & Lazzarini, T. 1978 An inventory for the measurement of self-reported stress and arousal. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, **17**, 283-284.
- 牧野カツコ 1982 乳幼児をもつ母親の生活と< 育児不安 > ,家庭教育研究所紀要 ,No. 3 , 34-56 .
- 牧野カツコ 1988 < 育児不安 > の概念とその影響要因についての再検討 ,家庭教育研究所紀要 ,No. 10 ,23-31.
- 松本聡子 1997 都市に居住する母親の育児環境に対する評価 早稲田大学 1997年度修士論文
- 松本聡子 相馬一郎 2000 育児環境としての居住環境に対する評価の分析 都市部に居住する母親を対象とした調査 , ヒューマンサイエンス リサーチ ,9巻 ,97-111.
- 松本聡子 2002 住環境に対する母親の評価が子育てに対する意識および養育態度に及ぼす影響 ,日本家政学会誌 ,53(7) ,715-722.
- Matsumoto, S. 2002 Effects of housing environment on parenting, *MERA Journal*,**7**(2) ,21-30.
- Mitchell, R.E. 1971 Some social implications of high density housing, *American Sociological*

- Review*, **36**, 18-29.
- Moore, N.C. 1974 Psychiatric illness and living in flats, *British Journal of Psychiatry*, **125**, 500-507.
- モリス, D. 日高敏隆 (訳) 1991 アニマル・ウォッチング 動物の行動観察ガイドブック, 河出書房新社
- (Morris, D. 1990 *ANIMALWATCHING A Field Guide to Animal Behaviour*. London: Jonathan Cape Ltd. )
- 中根芳一 2002 生活と住まい ライフラー 生活の科学 8, コロナ社
- 成田智拓 佐藤哲哉 平野茂樹 西岡和郎 坂戸薫 上原徹 伊藤哲彦 笠原嘉 1998 Parental Bonding Instrument (PBI)によって測定された両親の養育行動の因子構造, 季刊 精神科診断学, **9**(2), 263-277 .
- NHK 放送文化研究所 2002 日本人の生活時間 (2000) NHK 国民生活時間調査, 日本放送出版協会
- 日本マーケティング教育センター 2001 2002年度版 個人所得指標 日本マーケティング教育センター
- Oda, M., Taniguchi, K., Wen, M., & Higurashi, M. 1989 Effects of High-rise Living on Physical and Mental Development of Children, *Journal of Human Ergology*, **18**, 231-235.
- 織田正昭 1990 高層住宅居住の母子の行動特性とその影響, 保健誌, **46**(9), 754-760 .
- 織田正昭 日暮眞 1991 高層住宅と子供, 公衆衛生, **55**(6), 312-316 .
- Omata, K. 1995 Territoriality in the House and Its Relationship to the Use of Rooms and the

- Psychological Well-Being of Japanese Married Women, *Journal of Environmental Psychology*, **15**, 147-154.
- 逢坂文夫 1991 最近の居住環境と健康影響との関係について, *住サイエンス*, '91 秋号, 33-47 .
- Parke, R.D. 1978 Children's Home Environments: Social and Cognitive Effects. In I. Altman, & J.F. Wohlwill (Eds.). *Children and Environment* (pp. 33-81). New York: Plenum Press.
- Parker, G 1979 Parental Characteristics in Relation to Depressive Disorders, *British Journal of Psychiatry*, **134**, 138-147.
- Parker, G., Tupling H., & Brown, L.B. 1979 A Parental Bonding Instrument, *British Journal of Medical Psychology*, **52**, 1-10.
- Richman, N. 1974 The effects of housing on pre-school children and their mothers, *Developmental Medical Child Neurology*, **16**, 53-58.
- Richman, N. 1977 Behavior problems in pre-school children: family and social factors, *British Journal of Psychiatry*, **131**, 523-527.
- 定行まゆ子 1986 高層住宅における住環境特性と幼児の自立行動に関する研究 幼児の生活空間計画に関する基礎的研究 東京工業大学 昭和 62 年度博士論文
- Saegert, S. 1982 Environment and children's health. In A. Baum & J.E. Singer (Eds.), *Handbook of Psychology and Health* (Vol.2, pp 247-271). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 坂間伊都美 山崎喜比古 川田智恵子 1999 育児ストレスの既定要因に関する研究, *日本公衆衛生雑誌*, **46**(4), 250-261 .



シャファー ,H.R. 無藤隆 佐藤恵理子 (訳) 2001 子どもの養育に心理学が いること - 発達  
と家庭環境 - 新曜社

(Schaffer, H.R. *Making Decisions About Children*, Blackwell Publishers )

Seligman, M.E.P 1992 *Helplessness: On depression, development and death*. San Francisco:  
W.H.Freeman.

白石真澄 2002 子どもをすこやかに産み育てる住宅環境 - 横浜市における少子化と住宅環  
境に係わるアンケート 調査の結果から ,都市問題 ,93(6) ,65 77 .

Simons, R.L., & Johnson,C. 1996 The Impact of Marital and Social Network Support on Quality of  
Parenting. In G.R. Pierce, R. Sarason, & I.G. Sarason (Eds.). *Handbook of Social Support and the  
Family*, New York: Plenum Press.

Smith, C.A, Smith, C.J., Kearns, R.A., & Abbott, M.W 1993 Housing stressors, social support  
and psychological distress. *Social Science and Medicine*, 37(5), 603-612.

袖井孝子 1994 住まいが決める日本の家族 TOTO出版 ,Pp 65-104 .

袖井孝子 2002 日本の住まい 変わる家族 居住福祉から居住文化へ ミネルバ書房

総務庁統計局 1998 平成 10年 住宅・土地統計調査報告 第5巻 都道府県偏 その11 埼  
玉県 (財)日本統計協会

総務庁統計局 1998 平成 10年 住宅・土地統計調査報告 第5巻 都道府県偏 その12 千  
葉県 (財)日本統計協会

総務庁統計局 1998 平成 10年 住宅・土地統計調査報告 第5巻 都道府県偏 その13 東  
京都 (財)日本統計協会

- 菅俊夫 2000 環境心理の諸相 八千代出版
- 菅原健介 吉田富二雄・片山美由紀 泊真児 高江幸恵 広瀬彩子 1999 プライベート空間の確保に及ぼす家族要因の影響,日本心理学会第63回大会発表論文集,711.
- 菅原ますみ 北村俊則 戸田まり 島悟 佐藤達哉 向井隆代 1999 子どもの問題行動の発達: Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から,発達心理学研究,10(1), 32-45.
- 菅原ますみ 2001 こどもの問題行動はどうやって発達していくのか,科学,71(6),694-698.
- 竹内美香 1999 PBIの発生と養育態度尺度の歴史,季刊精神科診断学,10(4),375-398.
- 戸田須恵子 2000 母親の育児ストレスと幼児の気質および養育態度との関係について,北海道教育大学紀要 教育科学編,50(2),35-46.
- 東京都住宅局総務部住宅政策室 1998a 若い世代の東京の居住に関する意識調査,東京都, P11.
- 東京都住宅局総務部住宅政策室 1998b 東京都住宅白書 東京都, P35.
- 泊真児 吉田富二雄 菅原健介 片山美由紀 高江幸恵 広瀬彩子 1999 プライベート空間の確保が育児ストレス感の緩和に及ぼす影響,日本心理学会第63回大会発表論文集,710.
- 豊田秀樹 1992 SASによる共分散構造分析 東京大学出版会
- 豊田秀樹 1998 共分散構造分析 入門編 朝倉書店
- 東洋経済新聞社 1998 都市データパック 東洋経済新聞社
- 東洋経済新聞社 2000 都市データパック 東洋経済新聞社

- 植村勝彦 永田忠夫 松田惺 鈴木眞雄 1979 社会的ストレス尺度の構成 ,社会福祉学部研究報告 愛知県コロニー発達障害研究所 ,4 ,1 21 .
- Wachs, T.D., & Camli, O. 1991 Do ecological or individual characteristics mediate the influence of the physical environment upon maternal behavior. *Journal of Environmental Psychology*, **11**, 249-264.
- 渡辺圭子 1982 住環境と精神健康に関する研究 建築研究報告 No.101 社団法人建築研究振興協会 ,東京 ,23-38 .
- 渡辺圭子 1985a 住環境と精神健康 .山本和郎 (編) 講座生活ストレスを考える 2 生活環境とストレス 垣内出版株式会社 ,Pp 77-102 .
- 渡辺圭子 1985b 集合住宅と主婦の精神保健 ,公衆衛生 ,**49**(12) ,805-813 .
- Whinchip, S., Inman, M., & Dunn, P.C. 1989 Stress due to crowding in multifamily dwelling interior spaces. *Home Economics Research Journal*, **18**(2), 179-188.
- World Health Organization 1974 Uses of Epidemiology in Housing Programmes and in Planning Human Settlements. World Health Organization Technical Report Series 544. [On-line]. Available: [http://whqlibdoc.who.int/trs/WHO\\_TRS\\_544.pdf](http://whqlibdoc.who.int/trs/WHO_TRS_544.pdf).
- Wohlwill, J.F. 1976 Environmental aesthetics: the environment as a source of affect. In I. Altman and J. Wohlwill (Eds.), *Human Behaviour and Environment: Advances in theory and research*. (Vol. 1, pp. 37-86). New York: Plenum Press.
- 矢郷恵子 1997 なんでこんなに遠慮しなきゃならぬの 160人のお母さんの声 ~子育て家庭には住みづらい今のまち 新読書社

- 山本嘉一郎・小野寺孝義 1999 Amos による共分散構造分析と解析事例 ナカニシヤ出版
- 山内宏太郎 山本和郎 久田満 1983 近隣騒音の心理社会的構造に関する研究 総合都市研究,18,65-87.
- 山内宏太郎 1993 住生活環境と心理的ストレスに関する研究 - 住まいに係わる近隣ストレス尺度の構成 - ,住宅総合研究財団研究年報,20,209-218.
- 吉田寿夫 1998 本当にわかりやすい すごく大切なことが書いてある ごく初歩の統計の本 北大路書房
- 財団法人パブリックヘルスリサーチセンター こころの健康づくり- ストレスの自己チェック -  
[小冊子]

## 謝辞

本論文は、多くの方々のお力添えがなければ、とても完成させることができませんでした。

まず始めに、主査の早稲田大学人間科学部教授野嶋栄一郎先生には、熱心にご指導いただき、また常に温かく励ましていただきました。先生の「頑張れ！」というお言葉に支えられ、「博士論文」という目標に向かって、ここまでたどり着くことができました。大変お忙しい中、私の拙い論文に目を通して下さり、沢山の貴重なご指摘を頂戴しました。心から御礼申し上げます。副査の早稲田大学名誉教授相馬一郎先生には、大学院入学時から長い間、ご指導をいただき、広い視野で研究を捉えることの大切さを教えていただきました。そして、最後の最後までご迷惑・ご心配をおかけしました。本当にありがとうございました。副査をお引受け下さった、早稲田大学人間科学部教授嵯峨座晴夫先生、同じ早稲田大学人間科学部教授齋藤美穂先生には、貴重なご示唆・ご助言を頂戴し、大変感謝しております。両先生から、得られたデータを冷静に、丁寧に検討することの重要性を教えていただきました。ありがとうございました。

お茶の水女子大学の菅原ますみ先生には、母子関係、子どもの発達についてのみならず、様々な視点から多くの貴重なアドバイスを頂戴しました。また、問題意識をどのように研究へ反映させていくかという、研究に対する姿勢を教えていただきました。国際基督教大学のラッカム先生には、英語での論文に初めて挑戦した折に、大変お世話になりました。明星大学の岡林秀樹先生は、学部時代とあまり変わらないようなレベルの質問にも、常に熱心にアドバイスをしてくださいました。山梨大学の酒井厚先生には、博士課程に進んだ当初から、調査を共に行い、共同研究の厳しさ、面白さを教えていただきました。諸先生方に心から感謝申し上げます。

さらに、諸先輩方や後輩の皆さんにも、多くのご指摘・ご意見をいただきました。また、マクナ馬拉ご夫妻には、英文を書く上で、大変貴重なアドバイスをいただきました。本当にありがとうございました。

質問紙の回答にご協力下さいました皆様にも心から御礼申し上げます。また、調査をお引き受け下さいました幼稚園・保育園・児童館・育児サークルの先生方、職員・スタッフの皆様、突然のお願いにも関わらず、快く調査にご協力頂き、大変感謝しております。皆様方のご理解とご協力がなければ、文字通りの研究は成立しませんでした。厚く御礼申し上げます。

伊藤教子さんには、本当に長い間、お世話になりました。落ち込んだ時、研究で行き詰まった時、共に頑張る仲間がいたことは、私にとって大変心強いことでした。眞榮城和美さん、大学は違いますが、同じ「博士論文仲間」として、色々相談にのっていただき、本当にありがとうございました。また、常に温かい目で見守ってくださり、時には叱咤激励して下さった深澤里子先生、弱音の聞き役、そして最後にはいつも適確なアドバイスで励ましてくれた森田暁子さん、本当にどうもありがとうございました。また、それぞれの道で頑張っている沢山の友人達が、常に勇気づけ、背中を押してくれました。皆さんからパワーをいただいて、辛い時期も乗り越えることができました。心から感謝しています。

大学院に入学し現在まで、本当に多くの方々にお世話になりました。本当にどうもありがとうございました。厚く御礼を申し上げます。

最後に、本当に長い間、私のわがままに付き合い、支えてくれた家族に心から感謝します。

2003年1月

松本聡子

## 資料

Appendix 2-1	住環境における困りごとに関する項目の回答傾向 (1998年度調査)...	155
Appendix 2-2-1	住環境 (住居)における困りごとに関する項目の 回答傾向 (2000年度調査).....	156
Appendix 2-2-2	住環境 (住居周辺環境)における困りごとに関する項目の 回答傾向 (2000年度調査).....	157
Appendix 2-2-3	各施設への利便性に対する回答傾向 (2000年度調査).....	158
Appendix 2-2-4	住環境 (住居)の項目の単相関 (2000年度調査).....	159
Appendix 2-2-5	住環境 (住居周辺環境)の項目の単相関 (2000年度調査).....	160
Appendix 2-2-6	住環境 (住居 住居周辺環境)の項目の単相関 (2000年度調査).....	161
Appendix 2-2-7	各施設への利便性の項目の単相関 (2000年度調査).....	162
Appendix 4-2-1	第4章第2節のモデルにおける各変数の直接 間接効果.....	163
Appendix 5-1-1	第5章第1節のモデルにおける各変数の直接 間接効果.....	164
Appendix 5-2-1	第5章第2節のモデルにおける各変数の直接 間接効果.....	165
Appendix 5-3-1	衝動的 非統制的な行動特徴のモデルにおける 各変数の直接 間接効果.....	166
Appendix 5-3-2	依存的な行動特徴のモデルにおける各変数の直接 間接効果.....	167
Appendix A	1998年度調査の調査項目.....	168
Appendix B	2000年度調査の調査項目.....	172

### Appendix2-1 住環境における困りごとに関する項目の回答傾向（1998年度調査）

	経験したことが			
	ある		ない	
	n	%	n	%
部屋に陽の光が充分に入っていない	139	21.7	503	78.3
風通しがよくない	127	19.7	518	80.3
住宅の広さが子育てに十分なスペースではない	248	38.4	397	61.6
育児に適した間取りではない	232	36.0	412	64.0
子ども用品を収納するスペースが充分ではない	383	59.5	261	40.5
冷暖房が子どもにとって快適ではない	125	19.5	517	80.5
台所の設備が使いにくい	202	31.4	442	68.6
お風呂場が親子一緒の入浴には不便である	171	26.5	474	73.5
子どもの遊び場や日光浴のためにはベランダが狭い	307	47.9	334	52.1
ベランダ・バルコニーから子どもが転落するのではないかと心配である	163	25.3	482	74.7
洗濯物や布団を干すスペースがない,または狭い	206	31.9	439	68.1
お子さんの泣き声や物音に対してご近所に気を遣う	275	42.6	370	57.4
湿気が高いので,結露したり,かびが生えて困る	245	38.0	400	62.0
ダニ・ねずみなど,害虫が発生して困る	100	15.6	542	84.4
床・壁材などが健康に関係があると感じた	169	26.2	475	73.8
階段や段差などで子どもが怪我をするのではないかと心配である	182	28.2	463	71.8
無用心で防犯設備がよくない	131	20.3	513	79.7
建物が老朽化してきていて心配である	158	24.6	485	75.4
子どもが家を汚さないかと気を遣う	159	24.7	486	75.3
現在の住まいはこれ以上広げることができない	507	78.8	136	21.2
家の周りの環境が子育てに適していない	156	24.3	487	75.7
近隣の人間関係でいやな思いをした	151	23.4	494	76.6

Appendix 2-2-1 住環境（住居）における困りごとに関する項目の回答傾向（2000年度調査）

	まったくあてはまらない		あまりあてはまらない		ややあてはまる		あてはまる		非常にあてはまる	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
間取りの使い勝手が悪い	194	18.0	407	37.8	274	25.4	123	11.4	79	7.3
子どものためのスペースは充分にある（逆）	135	12.6	223	20.8	221	20.6	354	33.0	141	13.1
収納スペースは充分である（逆）	106	9.9	157	14.6	214	19.9	367	34.1	231	21.5
ベビーカー・三輪車の置き場所がない	329	30.7	262	24.4	178	16.6	145	13.5	159	14.8
自分のための場所がない	212	19.7	293	27.2	258	24.0	162	15.1	151	14.0
家が狭いので友人を呼ぶことができない	348	32.3	391	36.3	177	16.4	77	7.1	85	7.9
階段（室内・室外を含む）の昇降がづらい	601	55.9	257	23.9	137	12.7	50	4.7	30	2.8
室内に段差が多い	492	45.7	386	35.8	132	12.3	48	4.5	19	1.8
子どもに目が届かない場所があり不安だ	403	37.6	475	44.4	143	13.4	40	3.7	10	0.9
風通しが悪い	384	35.6	385	35.7	187	17.3	78	7.2	44	4.1
日当たりが悪い	429	39.8	352	32.6	175	16.2	64	5.9	59	5.5
建物の老朽化が気になる	397	37.0	267	24.9	182	17.0	132	12.3	94	8.8
新建材によるにおいなどが気になる	747	69.5	267	24.8	47	4.4	9	0.8	5	0.5
隣近所への音漏れを気にしている	142	13.2	270	25.1	318	29.6	191	17.8	153	14.2
ベランダの柵・出窓などの高さが気になる	414	38.6	425	39.6	132	12.3	60	5.6	41	3.8



Appendix 2-2-2 住環境(住居周辺環境)における困りごとに関する項目の回答傾向(2000年度調査)

	まったくあてはまらない		あまりあてはまらない		ややあてはまる		あてはまる		非常にあてはまる	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
この地域の空気は悪い	63	5.9	336	31.3	316	29.5	168	15.7	189	17.6
緑や自然に囲まれている(逆)	158	14.5	198	18.2	314	28.9	320	29.4	84	7.7
この地域は静かである(逆)	113	10.6	237	22.1	373	34.8	250	23.3	98	9.2
車や電車が通るとうるさい	159	14.9	428	40.0	229	21.4	127	11.9	127	11.9
交通面での安全性が心配である	27	2.5	131	12.2	297	27.7	263	24.5	356	33.1
周辺の歩道の整備が行き届いている(逆)	43	4.0	109	10.2	247	23.0	413	38.5	261	24.3
隣近所付き合いはうまくいっている(逆)	100	9.3	309	28.9	429	40.1	179	16.7	53	5.0
教育上良くないと思われる施設がある	449	41.8	502	46.8	85	7.9	22	2.1	15	1.4
街灯が整備されていない	153	14.4	431	40.5	302	28.4	111	10.4	68	6.4
治安が悪い	86	8.0	539	50.3	311	29.0	100	9.3	35	3.3
物価が高い	55	5.1	515	48.0	348	32.4	118	11.0	37	3.4
悪臭がする	302	28.3	538	50.3	149	13.9	41	3.8	39	3.6
子育てのサポート体制が整っている(逆)	39	3.7	119	11.2	333	31.3	450	42.3	123	11.6

## Appendix2-2-3 各施設への利便性に対する回答傾向（2000年度調査）

	ない		遠い		やや遠い		まあまあ近い		近い	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
スーパー	22	2.0	49	4.5	193	17.9	392	36.4	422	39.1
駅	12	1.1	213	19.9	360	33.6	319	29.8	168	15.7
公園	16	1.5	38	3.5	128	11.9	330	30.7	564	52.4
病院・保健所	10	0.9	185	17.4	323	30.3	354	33.2	193	18.1
幼稚園・保育園	10	0.9	92	8.6	197	18.4	377	35.2	394	36.8
デパート	272	26.1	416	39.9	214	20.5	108	10.4	32	3.1
コンビニエンスストア	18	1.7	50	4.7	167	15.6	359	33.6	474	44.4
公共機関	22	2.1	140	13.1	324	30.3	426	39.8	159	14.8
児童館	102	9.9	200	19.5	259	25.2	299	29.1	166	16.2

Appendix 2-2-4 住環境（住居）の項目の単相関（2000年度調査）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1. 風通し															
2. 日当り	.599 **														
3. 老朽化	.231 **	.239 **													
4. 新建材	.142 **	.088 **	-.073 *												
5. 階段の昇降	.026	-.033	.165 **	.137 **											
6. 室内の段差	.099 **	.054	.217 **	.149 **	.320 **										
7. 目か届かない場所がある	.073 *	.119 **	.115 **	.153 **	.339 **	.361 **									
8. 間取り	.211 **	.219 **	.395 **	.049	.229 **	.265 **	.281 **								
9. 子どものためのスペース（逆）	.157 **	.146 **	.219 **	.008	.085 **	.069 *	-.023	.278 **							
10. 音漏れ	.089 **	.082 **	.207 **	.078 *	.170 **	.159 **	.110 **	.196 **	.163 **						
11. 収納スペース（逆）	.122 **	.082 **	.154 **	.057	.065 *	.085 **	-.044	.210 **	.509 **	.149 **					
12. ハビ-カ-の置き場	.123 **	.074 *	.111 **	.072 *	.116 **	.118 **	.078 *	.197 **	.258 **	.272 **	.278 **				
13. 出窓の高さ	.082 **	.062 *	.183 **	.098 **	.206 **	.184 **	.185 **	.221 **	.133 **	.196 **	.159 **	.290 **			
14. 自分の場所	.188 **	.184 **	.266 **	.053	.137 **	.135 **	.069 *	.320 **	.366 **	.272 **	.271 **	.328 **	.276 **		
15. 友達を呼べない	.230 **	.250 **	.372 **	.076 **	.205 **	.165 **	.050	.415 **	.481 **	.307 **	.357 **	.322 **	.258 **	.577 **	

\*\* : p<.01, \* : p<.05



Appendix 2-2-6 住環境(住居・住居周辺環境)の項目の単相関(2000年度調査)

住居周辺環境の項目(項目の詳細はAppendix2-2-5参照)

1	.052	-.011	.063*	-.007	.081**	.023**	.069*	.036	.069*	.044	.062*	.125**	.008
2	.060*	-.033	.033	.006	.028	.004	.071*	.031	.044	.065	.025	.080**	.047
3	-.002	-.048	.072*	.048	.055	.033	.005	.023	.088**	.044	.036	.122**	.044
4	.054	.038	.094**	.041	.093**	.007	.070*	.065*	.139**	.043	.077*	.199**	-.042
5	.095**	.021	.031	.044	.041	.031	.009	.025	.094**	.026	.088**	.073*	.016
6	.065*	.067*	.072*	.051	.032	.058	-.031	.107**	.063*	.017	.063*	.148**	.027
7	.088**	.011	.080**	.026	.055	.075*	-.035	.059	.109	-.013	.057	.054	.025
8	.090**	.050	.089**	.045	.112**	.111**	.036	.120**	.132**	.048	.046	.121**	.098**
9	.013	.069*	.073*	.071*	.108**	.022	.161**	.065*	.033	.156**	.077*	.134**	.137**
10	.023	.021	.134**	.126**	.040	.025	.085**	.055	.061	.058	.014	.073*	.005
11	.044	.094**	.122**	.087**	.135**	.027	.110**	.101**	.044	.105**	.094**	.122**	.123**
12	.064*	.074*	.159**	.069*	.092**	.007	.110**	.100**	.055	.115**	.124**	.131**	-.013
13	.098**	.035	.125**	.026	.094**	.060	.039	.145**	.091**	.021	.084**	.166**	.031
14	.103**	.077*	.098**	.090**	.078	.079**	.095**	.110**	.116**	.116**	.094**	.111**	.123**
15	.090**	.046	.042	.157**	.098**	.074*	.053	.105**	.153**	.086**	.086**	.131**	.125**

\*\* : p<.01, \* : p<.05

Appendix 2-2-7 各施設への利便性の項目の単相関（2000年度調査）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. スーパー									
2. 駅	.411 **								
3. 公園	.278 **	.225 **							
4. 病院・保健所	.337 **	.339 **	.287 **						
5. 幼稚園・保育園	.198 **	-.006	.207 **	.246 **					
6. デパート	.262 **	.288 **	.154 **	.266 **	.170 **				
7. コンビニストア	.402 **	.381 **	.266 **	.294 **	.134 **	.218 **			
8. 公共機関	.350 **	.346 **	.197 **	.348 **	.243 **	.309 **	.398 **		
9. 児童館	.163 **	.154 **	.165 **	.244 **	.251 **	.278 **	.200 **	.379 **	

\*\* : p<.01, \* : p<.05

**Appendix4-2-1 第4章第2節のモデルにおける各変数の直接・間接効果**

説明変数	従属変数	
	精神的健康度	活動制限感
<b>スペース</b>		
直接効果	.184 **	---
間接効果	---	.090
総合効果	.184	.090
<b>音漏れ</b>		
直接効果	.142 **	.101 **
間接効果	---	.069
総合効果	.142	.170
<b>隣近所付き合い</b>		
直接効果	.177 **	---
間接効果	---	.087
総合効果	.177	.087
<b>サポート体制</b>		
直接効果	.100 *	---
間接効果	---	.049
総合効果	.100	.049
<b>精神的健康度</b>		
直接効果	---	.489 **
総合効果	---	.489

\*\* p<.01; \* p<.05

**Appendix5-1-1 第5章第1節のモデルにおける各変数の直接効果・間接効果**

説明変数	従属変数		
	精神的健康度	否定的な意識	不適切な養育態度
<b>住環境困りごと数</b>			
直接効果	.222 **	.084 *	---
精神的健康度と否定的な意識を介した間接効果	---	.080	.124
総合効果	.222 **	.164	.124
<b>精神的健康度</b>			
直接効果	---	.359 **	.248 **
否定的な意識を介した間接効果	---	---	.150
総合効果	---	.359 **	.398
<b>否定的な意識</b>			
直接効果	---	---	.418 **
総合効果	---	---	.418 **

\*\* p<.01; \* p<.05



## Appendix5-2-1 第5章第2節のモデルにおける各変数の直接・間接効果

説明変数	従属変数		
	精神的健康度	活動制限感	暖かい養育態度
<b>スペース</b>			
直接効果	.191 **	---	---
間接効果	---	.094	-.030
総合効果	.191	.094	-.030
<b>音漏れ</b>			
直接効果	.131 **	.100 **	---
間接効果	---	.064	-.053
総合効果	.131	.164	-.053
<b>隣近所付き合い</b>			
直接効果	.183 **	---	-.132 **
間接効果	---	.089	-.029
総合効果	.183	.089	-.161
<b>サポート体制</b>			
直接効果	.100 **	---	---
間接効果	---	.049	-.016
総合効果	.100	.049	-.016
<b>安全性</b>			
直接効果	---	---	.086 **
間接効果	---	---	---
総合効果	---	---	.086
<b>治安</b>			
直接効果	---	---	-.082 **
間接効果	---	---	---
総合効果	---	---	-.082
<b>駅への近さ</b>			
直接効果	---	---	.083 **
間接効果	---	---	---
総合効果	---	---	.083
<b>精神的健康度</b>			
直接効果	---	.490 **	---
間接効果	---	---	-.158
総合効果	---	.490	-.158
<b>活動制限感</b>			
直接効果	---	---	-.322 **
間接効果	---	---	---
総合効果	---	---	-.322

\*\*p&lt;.01; \*p&lt;.05

## Appendix5-3-1 衝動的・非統制的な行動特徴のモデルにおける各変数の直接・間接効果

説明変数	従属変数			
	精神的健康度	活動制限感	暖かい養育態度	衝動的・ 非統制的な行動特徴
<u>スペース</u>				
直接効果	.180 **	---	---	---
間接効果	---	.088	-.028	.049
総合効果	.180	.088	-.028	.049
<u>音漏れ</u>				
直接効果	.138 **	.101 **	---	---
間接効果	---	.067	-.053	.064
総合効果	.138	.168	-.053	.064
<u>隣近所付き合い</u>				
直接効果	.197 **	---	-.129 **	---
間接効果	---	.096	-.030	.084
総合効果	.197	.096	-.159	.084
<u>サポート体制</u>				
直接効果	.074 *	---	---	---
間接効果	---	.036	-.011	.020
総合効果	.074	.036	-.011	.020
<u>安全性</u>				
直接効果	---	---	.097 **	---
間接効果	---	---	---	-.023
総合効果	---	---	.097	-.023
<u>治安</u>				
直接効果	---	---	-.073 *	---
間接効果	---	---	---	.017
総合効果	---	---	-.073	.017
<u>駅への近さ</u>				
直接効果	---	---	.084 **	---
間接効果	---	---	---	-.020
総合効果	---	---	.084	-.020
<u>精神的健康度</u>				
直接効果	---	.489 **	---	.143 **
間接効果	---	---	-.155	.130
総合効果	---	.489	-.155	.273
<u>活動制限感</u>				
直接効果	---	---	-.316 **	.191 **
間接効果	---	---	---	.075
総合効果	---	---	-.316	.266
<u>暖かい養育態度</u>				
直接効果	---	---	---	-.237 **
総合効果	---	---	---	-.237

\*\* p&lt;.01; \* p&lt;.05

## Appendix5-3-2 依存的な行動特徴のモデルにおける各変数の直接・間接効果

説明変数	従属変数		
	精神的健康度	活動制限感	依存的な行動特徴
<u>スペース</u>			
直接効果	.178 **	---	---
間接効果	---	.087	.023
総合効果	.178	.087	.023
<u>音漏れ</u>			
直接効果	.133 **	.106 **	---
間接効果	---	.065	.045
総合効果	.133	.171	.045
<u>隣近所付き合い</u>			
直接効果	.196 **	---	---
間接効果	---	.096	.025
総合効果	.196	.096	.025
<u>サポート体制</u>			
直接効果	.073 *	---	---
間接効果	---	.036	.009
総合効果	.073	.036	.009
<u>精神的健康度</u>			
直接効果	---	.488 **	---
間接効果	---	---	.129
総合効果	---	.488	.129
<u>活動制限感</u>			
直接効果	---	---	.264 **
総合効果	---	---	.264

\*\*p&lt;.01; \*p&lt;.05